
死神の杖

RedHands

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の杖

【Zコード】

N4182W

【作者名】

RedHands

【あらすじ】

様々な人々の人生を見守る死神のお話

「ほう、相変らず見事なものだな。」

王冠を被った男が草の手入れをしている私に話しかけてきた。私はそれが直ぐにこの国の王だと分ると振り返って深々と頭を下げる。王は、それを掌で制すると、にこやかな表情を保つたまま威厳のある声で優しく語りかかる。

「余の言は気にしなくてよい。そのまま仕事を続けてくれ。」

「はっ。」

私はそう言われる事は予想済みだったの、さして驚きもせずに再び仕事に戻った。そんな私の背中から再び威厳のある声が話しかけてくる。

「それにしても相変らず見事なものだな。限られた者しか王宮に入れないのが勿体ない。国民全てに解放したいものだ。」

「いえいえ、この庭は私が先代、先々代より時間をかけて王の為だけに作り上げてきたものです。その目にこの庭を焼付け、その足で散策される特権を持つたものがこの国の王たる資格であります。」

「父上も生前に同じ事を口にしていたような気がする。成程な。これは余の失言であった。」

私はこの歳まで余り自分を贅沢したことはないが、この庭だけは庭師としてこれ以上のものは出来まいと、自分の生涯の仕事の総決算のつもりで取り組んできた。それ程広い庭ではないが、木々や池の形、そして造りすぎないよう配所した茂みの草1つ1つに至るまで、私の技量と自然が一体となつて作り上げた傑作である事は疑いの欠片もない。

この国の温暖な風土もそれを更に促進させる材料だ。四季があるにも関わらず、冬と夏の温度差がそれ程激しいわけではなく。1日の昼と夜の気温差もそれ程無い。殆どの植物が1年を通して花をつけることが出来る。だから季節によつて庭の色を変える必要もない。

多分それ程大きく手を入れなくても永遠に美しさを保つているような錯覚に陥る時がある程だつた。

「それももう見納めかもしれんがな。」

王は寂しそうにポツリと呟いた。先程までの威厳が明らかに少し萎んでいるその声を聞いて私は手を止めて振り返る。

「戦…ですか。」

「ああ、そうだ。」

王の目は遠くに田を向けている。諦めとも悟りとも取れる表情を浮かべて口をへの字にきゅっと結んでいた。私はこの王が赤ん坊の時から良く知つていて、何か覚悟を決めて緊張した時のその癖は王の座についても変わらない。そしてそれは私の癖でもあつた。私自身には家族がない為、彼をまるで自分の息子の様に錯覚する事すらある。

「今度の戦はな。おそらく無傷では帰れまい。いや、それどころか、帰つてくる事すらできなかもしれないのでな。」

「これはまた陛下に似合わない弱気な事を仰せられる。」

「何も言うな。」

基本的には、人に弱みなど見せない性格ではあるが、王の家に生まれて幼い頃から緊張の糸を張り巡らせて来た王にとって、この庭や私は、心を許せる数少ない存在だったのだろう。

「更に磨きをかけてお帰りをお待ちしておりますよ。」

私は励ますつもりで軽くそう言って王の表情を見上げた。王は悲しそうな表情のまま私の目を見返すと、少し口を吊り上げて苦笑いする。私である余り見たことのない表情だつた。

「そうだな、とりあえずまた生きて帰つてこの庭でゆっくりしたいものだな。」

王は振り返つて去つていった。その背中はいつもよりも小さく見える。

少し昔話をしよう。

この国は先々代が建国した歴史の浅い国。その血塗られた歴史は、多くの敵を造り、戦いの絶えない国だった。この庭はそんな国の王宮の一角にひとつそりと作られた。

先々代王が引退して息子である先代王に王位を譲った頃、私は各地を庭師として周り自分の技術を磨いていた。町の公園から貴族階級の屋敷の敷地までかなり数々の作品を手がけてきていた。

時には仕事中に戦が始まった事もあり、私の作った公園がわずか1日で灰になる風景も見てきた。その度に、私は自分の仕事に自信を失う日々が続いた。自分のやっている事に意味があるのだろうか……、どう心血を注いでもそれが一瞬でなくなるようなものならば、いつそ自然に任せのままにしておいた方が、よくないだろうか。

そして、それこそが草木の本来あるべき姿なのだろう。

私は、ある国で仕事をしていた父親を尋ねた。

「やあ。」

まるで、遠方からの親友を扱うように父親は私に接する。

「久しぶりだね。母さんは？」

私が親元に戻ってきたのは実に、二十年ぶりだった。当たり前のように迎え出してくれると思っていた両親も、既に見る影もなく年老いていた。

私が母の居場所を尋ねると、父は少し悲しそうな顔で立ち上がり家の裏口へと向かつ。

「？」

私は静かに立ち上がるとその後について行つた。何処へ向かおうとしているのかは、大体分つてはいたが、私は敢えて何も言わず、父の小さくなつた背中について行つた。

裏口を出ると、あまり賑やかで無い通りに出る。この国の城壁が見えるほどの町外れにある我が家から城の門まで歩いてそれ程の距離ではないが、すつかり弱つた父の足では思ったより遠く感じるほど遅々としていた。

私は敢えて父に肩を貸したり、背負つたり、「何処へ」と尋ねたりせずに、その速度に合わせてついて行く。

「手を合わせてやつてくれ。」

とある墓石の前で父は俯いて私に言つ。父に言われるまでもなく私は既に両手を合わせて目を閉じていた。

生前の母は私の我儘を全て許してくれた。私の目から涙が溢れ落ちる。

ふと目を開けると少し離れた場所にある木に誰かがもたれかかって眠っていた。帽子から靴まで全て黒一色の黒ずくめの男を見て私は父を振り返る。

「父さん。」

「ん?」

「あの木の所にいる人が見える?」

私はその木を指差す。父は首を縦に振つた。

「ああ、ここ何日か、毎日あそこでずっとああやつてるのを見るな。知り合いか?」

「いや…。」

そうか。見えるのか…。私は口をへの字にきゅっと結んで再び目を閉じて手を合わせる。

庭師としての父は職人という言葉がこれ程似合う人は見たことがないくらい頑固で融通の聞かない性格だった。特に仕事では、まず人の言う事に耳を傾ける事もなく、ひたすら黙々と作業をこなす日々を送っている。時には、数日家に帰らずに、隣国にまで出かけては仕事をこなしていた。

私は子供の頃に何度も父の仕事を手伝つた事があった。その頃の父には何人か弟子がいて、父は未熟な彼ら（もつとも父から見て未熟という事でしかなく、彼らもまた庭師としての腕は一流だったようだ）を頭ごなしに、怒鳴りつけていた。

家では、寡黙に食事と晩酌している所以外見たことがない父が生き生きとしている様に見えた。だが、そんな独りよがりの仕事ぶりに定着する弟子など居るはずもなく、1年以内に父の周りには誰も居なくなつた。それでも父は動じる事なく、日々の仕事をコツコツとこなしている。

そのうち時々手伝つていた私に今度は怒鳴り散らす様になる。思えばあれが、私の立場が、唯の息子から弟子になつた瞬間だつたと思う。

ただ、私は家族でもあるので他の弟子の様に逃げ出すわけにも行かず、ひたすら耐えるしかなかつた。そして、庭師として独立しても、相変らず父とともに仕事を続けていた。

そして数年経つたある日、私は衝動的に思い立つて父に「旅に出たい」と申し出た。

「旅?、半人前が何を下らん事言つてやがる。明日からの仕事はどうするつもりだ!」

予想してたのと一言一句違わない言葉が返つてくる。

「父さん、僕は確かに庭師としては半人前なのかもしない。でも、父さんも若いときはあちこちまわつて、そして今の父さんがあるんじやないか。僕も世界を見てみたいんだ。」

「馬鹿野郎!、俺はな住んでいた村が戦で焼け野原になつて仕方なく放浪していたんだ。このご時勢に1人旅なんぞ、狂氣の沙汰じゃねえ。」

「だつて、父さんの頃だつてあちこちで戦は起つてたんだよね。僕なら大丈夫だから…。」

「おめえみてえな世間知らずを世の中に出しても、人様の迷惑になるだけだ!」

「世間知らずだから、世間を見に行くんだ!、父さんの言つ事は矛盾してるよ!」

「やつかましい!、屁理屈言つてる暇があつたら早く寝ろ!..」

父は晩酌していた酒瓶を僕に投げつけて、その場でうつ伏せにな

りそのまま寝てしまった。母親が台所から出てきて父の背中にそりと毛布をかける。

「わからず屋…。」

その頃の私の咳きを聞いて母親がそつと私の肩に手を置く。「父さんはね。お前の事を手放したくないんだよ。どんな仕事も受け継ぐ人がいないと意味が無い。特にそれが自分の子供なら、親としても庭師としてもこんな嬉しい事はないからね。」

母の静かで落ち着いた声。私を説得するでも諭すでもなく、ありのままの気持ちをただ言葉にしているだけで、人に何かを押し付けない声。父とはまるで正反対だった。

「僕は仕事を投げ出したりはしてない。必ず帰つてきて親孝行はするよ。なのに…」

私は、悔しそうに歯を食いしばつた。

「…少し、待つてなさい。」

母は私を椅子に座らせると奥の部屋に消えていった。

数分後、鞄を1つ持つて現れる。

「これはね。昔この人が旅をしていた頃に使つていた鞄なの。何処かの貴族の庭の仕事をしている時に仲良くなつた同じ年の人になつたものなんですって。」

「へえ。」

僕は生まれた時からこの家にずっと居るが、その鞄は初めて見ものだつた。数個のボタンには何か動物の彫刻が刻まれている。目利きなどは一切できないが、それが途方も無い価値があるような気がしていた。

「でも何でそれを僕に?」

鞄を手渡す母を見て、私は当然の疑問を口にする。

「言つて世間を見てきなさい。」

母は一言静かにそう言つた。

「え?、で、でも…」

私は傍らでうつ伏せになつていびきをかいている父をチラリと見

た。

「この人には私から言つておくわ。だから貴方は遠慮する事ないのよ。」

手渡された鞄は少し重かつた。慌てて中を開いてみる。そこには古いランプや替えのシャツが数枚と、飲み物を入れる皮袋や仕事に使う道具が入っている。そして脇のポケットにはお金が少し入っていた。

「こ、これは…。」

「手ぶらってわけにはいかないでしょ。」

あの数分でここまで周到に用意できるわけが無い。母は、その頃の私がいつ言い出しても良い様にずっとこれを仕舞っていたのだろう。

「う…。」

私は泣きながら俯いた。

「ほら、1人で旅に出ようと語り合ひのに、出発前から泣く人がありますか。」

背中をさする母の手の感触を私は一生忘れない。

私は鞄を肩にかけると、そのまま、家を飛び出した。通りに人はいない。城門は直ぐそこにある。私は城門を潜り抜け全力で暫く走った。振り返らずとも、見送つて手を降つている母の姿が見えたような気がした。

それからの私はひたすら鬼の様に働いた。ただただ、仕事を見つけでは雇つてもらい仕事をこなす。生きいく為には好きな事だけをしているわけにはいかず、皿洗いから傭兵まで、何でもやつた。必死だつた。

ただ、何をやっても最後は庭師としての仕事に戻つてきた。それ以外は私の生涯の枝葉みたいなものだ。

6年ほど経過したある日、私はとある城の建築の手伝いでとある

国で砂袋を担いでいた。

「ふう、疲れた。」

昼休みに配給された弁当を食べながら周りを見回す。ようやく城壁が形になつてきたばかりで庭などという贅沢なものは影も形も見当たらない。

「よう、隣いいかい？」

この現場で知り合つた男が、私の隣に座つて弁当の蓋を開ける。私の方が先に食べ始めた箸なのにあつという間に男の弁当の方が先に空になつていいく。

「そういうや、君は何処の国の生まれなんだい？」

一気に食べてしまつのが勿体無いと思つたのか、男は一度箸を止めて一息つく合間に私に話かけてくる。

「ここから北の方ですよ。」

「へえそうか。俺は東から來たんだ。武者修行中でな。実家に帰れば王の剣術指南役になるんだよ。」

「はあ。」

滴る汗が疲れを物語つている箸なのだが、それを吹き飛ばす様に男の口からは次々と言葉が溢れてくる。聞いてもない自分の歴史を私に押し付けた後、男は唐突に小声になり私の耳元で囁く。

「そういうや、お前も気をつけろよ。」

「何を？」

男はキヨロキヨロと辺りを見回して再び口に手を当てた。

「最近この城の建設で人が何人か死んでいるだろう。」

「ああ、確かに。」

城の土台の上に建物の骨格を建て始めた最近は人数が増えてきたこともあり、いざこざや事故がなんとなく増えてきた。そして、前日、遂に事故で死亡者が出たことが噂になつてている事は私も知つている。

「それが何か？」

「それでよ。最近、死神が出てきたらしいぞ。」

「死神？」

「ああ、そいつが見えたなら死ぬらしい。この前死んだ奴はそれが見えたらしいぞ。」

「へえ…。」

眉唾ものだが、物騒な事を言っている割には嬉しそうな顔をしている様に見える。

「精々、気をつけるんだな。俺が聞いたそいつの特徴はだな。」

そいつはそこまで話すと思い出そうと上を見上げる。しかし、思い出しにくかったのか、再び弁当の残りをガツツキ始めた。

「まあ、気をつけるよ。」

私は何となく食欲がなくなる。満腹ではないが、今日は比較的涼しいからこの程度で夕方までは体力は持つだろうと弁当の蓋を閉じて腰を上げた。

この現場ではとりあえずレンガの元を運んでそれを練るのが私の仕事だ。単純作業だが王の城を建てるだけあって、国家予算を費やし、働く者からすれば非常に割のいい仕事になつていて。

弁当を袋に放り込むと私は作業に戻る。確か休憩前に最後に運びかけたものがこの辺に置いてあるはずだと、それを探した。

「お、あつた、あつた。」

私がその運び荷に近づいていくと、その傍に全身黒い服を着た大男が立っている。被つた帽子の下から鋭い目がこちらを見ている。私がこの現場に来てから初めて見る男だ。炎天下ではないとはいえ、肉体労働をしている現場で、全身を覆うような黒いマントは、少し暑苦しく感じた。男の目はこちらを見ていた筈だが、あまりに目に生気がないので目線を一切感じなかつた。

「ちょっとごめんよ。」

私はとりあえず作業を再開し、そこそこ重い袋を抱き上げる。庭師に必要なものは何より体力だ。

その男は何を言うでもなくただじっと佇んでいる。周りはマチマチに昼休みを終えた男達が気合を入れて作業を再開している。季節

柄この国には晴天の日に時々寒い風が吹く。マントをしているからなのか、その男に感覚がないからなのか、周りの者が一の腕を掴んで身震いする中で全く身震いもせず表情も氷の様に固まつたままだつた。

「変な奴…。」

私は一応気を使って誰にも聞こえないようになってしまった。乾いた風に乗つて私の声がその黒い男に聞こえなかつた事をほんの少し祈つた。

「さてと…重つ…」

朝の勢いのあるうけにせつておくべきだつたと思ったが、仕事だから仕方ない。それに今の仕事は割りもいいが、何よりこの城の庭園をどう組み立てるかという事を考えながら体を動かすという至福の要素が疲れを相殺するという好循環な日々だつたので特に不満といつものも無かつた。

「いてて…」

とはいへ、ここ数日の突貫工事で結構体はボロボロにはなつていた。少し前までは至極普通の工事ペースで作業していたので割と楽なものだつたのだが、今となつては、一度に運ぶレンガも一時期の一倍近くになつてゐる。

ほどばしる汗とともに何とか仕事をこなしていく俺は、何とか夕方の解散時間までペースを落とさずに仕事を終わらせる事ができた。「全く、日に日に忙しくなるな。」

「ああ、明日は日没までにノルマが終わるどつか怪しげ。」

「まったく、戦争が近いって噂もあるしなあ。」

日々に愚痴る者達を横切つて宿屋への道を真つ直ぐに歩いていく。

「ここもそろそろ引き時かもな。」

傭兵経験があるとはいへ、この国の為に命をかけて戦つつもりはさらさら無い。その噂は單なる噂といつには余りにも工事に関わる者達に広まつっていた。

新興国家だけあって労働者の大半は、お世辞にもこの国に愛着があるとは言えない。その中でのこの噂である。普通に考えて、覚悟

も自信もないものは報酬日の次の日に消えるパターンが多い。

その為に、報酬を全体で割るという方式が取られた。しかし、それも効果のあるはずもなく、徒党を組んで入れ替わりで報酬を受け取り樂をして儲けるものが現れた。それでも、右肩上がりに周辺の国を併呑していった状況の中で、国はとにかく威儀を懸けて報酬を支払った。ここで出し済ると、周りの国に実体を勘ぐられる恐れがある。なので、ここに国運を懸けている感がある程の報酬に次々に人が減る一方、増加人員量もそれに追いつくという状態を長らく続けていた。一方で、工事自体は一進一退を繰りながらも何とか完成予定日に向かって突き進んでいた。

それでも戦争に勝ち続けて国庫は常に潤っていたので、受け取る方は当然として支払う方も誰一人それを気にする者はいなかつた。日に日に上がっていく報酬に人の入れ替わりはますます激しくなつていく。

その為に、見知らぬ顔を現場で見たところで誰も気にしない。勿論私もこれまで何度も見知らぬ顔も見てきた。それなのに何か、あの黒ずくめの男が妙に気になる。

翌日も前日の疲れを残しつつ現場へと足を運ぶ。

「何してるんだ！ボーッとするな！」

突然の叱咤に私は我に帰つて仕事を続けた。じんわりと汗の染込むシャツが冷たい風を更に冷たく感じさせる。それがまた疲れた体を冷やして次の行動へのエネルギーを蓄えるようなサイクルが体の中で続いている。それがまた心地良い。

気がついたら夕方になつていた。ここでは、日が沈む前に仕事は終わる。日雇いの金を受け取ると大体の者は夜の街へと消えていく。私は、一人で飲むのが好きなので基本的にはここから先は誰とも絡む事もない。

大きな酒屋へ行くと絡まれる可能性が高いので片隅のバーの片隅の席で一人でほろ酔うのが丁度いい。

新興の街というものは、どの店も真新しい雰囲気がある。ここは

元々、無人ではなく小さな村だったのだが、今の国王が地理的に適切なのでここを首都にする事を決めて城を建設する事を決めた時から急激に発展してきた。

仕事があると人が集まる。人が集まると仕事が生まれる。労働者が溢れるとそれを標的（あまりよい表現ではないが）にして夜の街も発展する。そんな好循環を繰り返し短期間で様変わりした街だ。いつかバーの老人店主が長々と私に語ってくれた話である。

「いらっしゃい。」

寂れた看板を見つけて私はドアを引いた。狭い店内には2人の男客がそれぞれバーの隅に座っている。お気に入りの席を取られて仕方なくど真ん中に陣取ると最初の1杯を注文した。

「今日も忙しかったのかい。」

老店主はカクテルを造りながら私に静かに話しかける。このマスターは、ここが小さな村だった時からもう長い間、この土地の遷移を見てきた生き字引だ。

「今日は繁盛しているじゃないか。」

「ははは、そうだな。」

席は全部で丁度十席、いつも來てもこの席が埋まっているのを見たことがない。街の最北端という場所柄もあまり良くない。城の位置からすれば、街の繁華街とは少し離れているし、城が完成してしまふとこの辺りはますます寂しくなるだろう。

私は最初の1杯を飲みながら店内を見回す。左隅にいる男はテーブルを見つめながらバー・ポンを飲んでいる。目線を移して右側の客を見ると、黒ずくめの服装は間違いない昼間の男だ。黒い帽子の下に隠れた目は鋭いが生気が感じられない。

しかし、その男の前にはグラスがない。もう飲み終わったのだろうか。だが、あの現場で仕事をしているのであれば、終わって真つ直ぐにここに来た私とほぼ同じ時間に來たと考へると1杯飲み干す時間はないはずだ。

「…マスター、あの男は？」

私は、私の目の前にグラスを置いたマスターに小声で話しかける。

「ん？」

マスターは私の指差す方向を一度見ると目を細めて私を振り返る。

「…何？」

マスターは逆に私を不思議なものを見るような顔で聞いてくる。

「いや、だからさ。あの客が…」

私がここまで喋った時、マスターはハツと何かを思い出した様に目を見開く。私はそんなマスターの顔を初めて見たので、逆に同じ様な表情になつた。

「君、それって黒ずくめの格好をしているだろ？」

「…知ってるのかマスター。」

「そうか…見えてしまつたか…」

突然左端に座っていた男が低く威厳のある声で私とマスターの会話に割り込んでくる。

「見えてしまつた…とは？」

私は思わず気になつて男に問いかける。

「聞きたいか？」

男は静かにテーブルを見つめていた目線を上げて私の目を見る。現場では見かけたことはない顔だった。まあ、私が知らない顔など現場には五万といふが。

「貴方は？」

男はその問いかけにニヤリと笑うと、グラスを傾けて残つていた酒を一気に飲み干す。

「…」

十分程の沈黙が店に流れた。私の問いに男は一度としてまともに返答していないのだが、男の威厳の前にそれについて全く触れられない。やがて男は静かに語り出す。

「昔…この国には王がいなかつた。いや、そもそも国なんてものは

なかつた。」

私は丁度1杯目を飲み干した所だったのでマスターにグラスを見せる。いつものお代わりの合図だった。マスターが私のグラスに2杯目を注いでいる間も、その男は話を続けた。

「そんな小さな村にある日噂が立つた。」

男は話しながらグラスをマスターに見せる。マスターは私の時と同じ様にそれに答え、バー・ボンのグラスを棚から取り出した。

「死神が村に現れたという噂。それは、何百年も平和に暮らしてきた村人の中で突然槍が降つて来たような噂だ。」

男は注がれた酒を少しだけ喉に流し込む。私も右端の黒ずくめの男も沈黙しながら彼の次の言葉を待つた。もつとも、右端の男が私と同じ気持ちだとは何の確証もないが。

「それは、村に来た1人の旅人から始まつた。村の宿に何日か滞在する間に、酒場などで接した村人に死神の話をした。やがて、数日後に村人が1人病で死んだ。そいつは、丈夫な男で病の兆候など何も無かつたはずなのに、突然、ある日苦しみ出して倒れた。」

「ああ、そんな事もありましたね。」

マスターが男の話に相槌を打つ。

別に長い付き合いではないし私に人を見る目があるのかどうか疑わしいが、マスターは嘘をつくような人ではない。そんなマスターの相槌が胡散臭い男の話にほんの少しの説得力を添えたような気がした。

「そいつは怯えた目で死に際に枕元の家族や見舞いに来た村人に死神を見たと散々に語つた。あの旅人が話していた特徴と全く同じ格好をして、別に何かをされたわけでもなく。ただじつとこちらを見ていたという。」

話していた男は、そこまで話すと目線を黒ずくめの男に移す。私もつられてそちらの方を見た。マスターだけは気を使ってか、そ知らぬ顔でグラスを磨いている。

「…」

黒ずくめの男は帽子の下の目線を泳がせたままじっとして動かない。一見すれば呼吸をしている、生きている様には見えなかつた。私は昼間、工事現場で聞いた死神の噂を思い出した。そして店内の気温が下がつたわけでもないのに少し身震いする。「そいつを見たら死ぬ」という昼間の男と、この男の双方の口から出た同じ言葉が私の脳を刺激した。

「大丈夫ですか？」

この時の私は自分ではどんな顔をしていたのだろう。マスターが声をかけたという事は普通に無表情に酒を飲んでいたわけではなさそうだ。店内に鏡は一切なく、私が自分の顔色を確かめる術は、わずかな灯りに照らされたグラスを覗くしかない。しかし、私には自分の顔を見る勇気すら無かつた。

「その男が死んだ後、村人の間では次々と死神を見たという者が現れた。しかし、その後暫くは特に村で不審な死に方をした者は出ない。やがて、その旅人が村を去り、噂も下火になつて村人の間の恐怖が薄れていつた。」

これが単なる怪談話なら、普通に酒の肴になつただろう。そんな店のサービスの一環として、この店ぐるみで私を謀つてているのではないだろうかとも考える。このマスターが、そんな演出が好みなのかは分らないが、もしそうであれば、もう十分だろう。これ以上続けるれば酔えなくなる。しかし、無情にも男の話は続いた。

「そんなある朝に突然始まつたんだよ。」

「何が？」

「戦争だ。」

「どこからともなく現れた馬軍が砂煙を上げて朝靄の中から現れ、突然手当たり次第に村人を殺していつた。」

その男は私に感想を求めるわけでもなく目の前の何も無い空間を見つめながら淡々と話す。

「その時殺された村人が全員死神を見たのかどうかは確かめる術はない。」

男は私に視線を向けた。

「その話、酒の肴にはちと刺激が有りすぎるのでは？」

私は少し笑つて目を泳がせた。男の表情は喜怒哀楽のどれでもない。唯、石像に見られていくように不気味さを感じる。

「…」

「…」

それから凍りついたような沈黙が店の中に現れる。マスターのグラスを磨く音だけが、私の耳を撓つた。

「つかぬ事を聞きますが、あなたはもしかしてその村の…」

「さてね。」

男は、空になつたグラスをトンと置くと、数枚の貨幣を置いて席を立つた。男が出て行くと、私は自然と黒ずくめの男が座つていた方を向く。しかし、そこにはもう誰もいなかつた。

「もう1杯どうですか？」

マスターの冷静な声で何とか我に帰る。

17

バーから帰つた翌日、私は再び現場で砂袋を担いでいた。昨日聞いた話を頭の中で反芻しながら体は労働に従事していた。

「今日はあいつ来ていしないな。」

昼休みにまたあの騒がしい奴が勝手に私の隣に腰を降ろして喋り始める。

「あいつとは？」

「昨日の黒服の奴だよ。」

「ああ、あいつか。」

「お…お前も見えたのか？」

「見えた？」

私は一瞬この男が何を言つているのか分らなかつたが、昨日のバーでの男の話が電撃的に頭に走る。今日は快晴なので、滴る汗が思考を妨げてはいたが、昨日の話は私の脳に相当深く刻まれていたら

しい。

「死神の事か？」

「そうだよ。知ってるのか？」

「その話をするといふ事はお前も見えたって事だな。」

「そうだよ。そういうお前こそ、噂を知ってるんだな？」

男は私の反応に存外食いついてくる。普段は私は、この手の会談めいたものに興味はない。しかし、何故か今回の場合だけは気になつて仕方なかつた。

「昨日少し聞いたよ。」

「逃げた方がいいぜ。」

そいつは少し神妙な顔になつて私に逃亡を薦めてくる。

「俺は、その死神の話をここだけじゃなくて、以前何箇所かで聞いたんだ。眉唾ものだと思っていたんだが、遂に今回は俺自身が見ちまつた。」

「そういう話は何処にでもあるんじゃないのかい？」

「そう思うだろ？ だがな、どの土地の話も死神の特徴がみんな同じなんだよ。だから俺はこいつは存在すると思う。」

軽薄に感じた男の雰囲気が少し変わつたような気がした。

「無駄話だな。」

俺は、目の前のそいつだけではなく、自分の中の記憶に向けて一言放つと腰を上げた。

「おい待てよ。」

歩き出した私の後に続いて男がついてくる。

「！」

突然立ち止まつた私の背中に男がぶつかってきた。しかし、背中の衝撃の信号は私の脳には一切届かない。

「……いて、何だよ。」

鼻をぶつけた男が顔を上げて私と同じ視線の先を見る。

「……」

私も男も立ち止まつて絶句する。

目の前に大きな木が立っていた。その大きな幹にもたれかかって黒ずくめの男が昼寝をしている。いや、昼寝をしているのかどうかは分らないが、俯いて軽く肩で息をしている。

「…見えるか？」

背後から少し震えた男の声が聞こえてきた。私はそれに答えなかつたが、言葉にしなくても男には十分に伝わったと思う。その黒ずくめの男が何かをしたわけでもないにも関わらず、私の中に何か黒いものが広がつていく様な不快な感覚が呼び起こされる。

「ドシン…」

突然の振動に我に帰った私は周りを見回した。

「何だ今のは？」

背後の男も同じ反応で周りを見回す。

「あれは？」

男が指差す方を見るとモクモクと煙が上がっている。始めは気のせいいかとも思つていた振動は次第に大きく体全体を震わせた。やがてそれは無視できない程の巨大なうねりになつていく。

「逃げろ！」

誰かがそう叫んだ時には、騎馬に乗った無数の兵士が剣を振り上げているのがはつきりと視認できた。

「来やがつたか！」

開発中の新興国家にはよくある話だ。特にこの国は周辺国と同盟を結んでいるわけでもなく開発中の隙を伺つて攻撃を仕掛けてくる。そして…。

「進め！」

反対側の城の方から聞こえる鬨の声。

「かかれ！」

無論、新興国の方も無防備なわけではない。砂煙を観測した瞬間から対応を始めていたのである。馬に乗った騎士達が既に剣を抜いて構えていた。その先頭を切つて敵に突撃していく男の顔を見て、私は目を見開く。

「あれは…バーの…」

「おい、何をしているんだ。逃げるぞ！」

通り過ぎていく避難する人波に飲まれて私は混戦が始まろうとしている場所から離れた。走って逃げる最中もどうしても、馬上の男の事が気になつて時々振り返る。しかし、最初に見た時の倍以上の濃度の砂煙の中では、混ぜ合わされた人の影と時々飛び散る深紅の血が認識できるだけだ。

止むをえず逃げながら周りを見回す。あの黒ずくめの男も見当たらない。

私は他の者について城の裏側に回り込む。大勢が城から離れようと街外れまで走り続けていたが、私は立ち止まって造りかけの城壁の隙間に体を滑り込ませる。戦の喚声が鳴り響く城の中へと戻つていった。

普段は、自分の担当以外の箇所は行くことはない為、城の裏庭あたりに踏み込んだのは初めてであつた。

先程から続いている振動は戦いの激しさを物語つている。その中で私は見慣れぬ城を徘徊した。正直、私自身も何故この時に逃げなかつたのかは分らない。人間は緊急時には衝動的な行動を取る。それが正しいかどうかは結果が出ないと分らない。

1階部分は半分以上は既に完成している。

普通、城は敵に侵入された時の為に複雑な回廊にしてあると聞いた事がある。城の構造を私が理解している筈もなく、ただ当てもなくウロウロと歩いた。不思議と恐怖はない。それが若さかどうかは分らないが、とにかくなるようになるとしか思つていなかつたのは確かだ。

「うん？」

突然開けた場所に出る。周りは建物に囲まれていた。中庭だろうか。

「へえ、こんな場所があつたのか。」

上を見上げると吹き抜けになつていて、出入口は2箇所、私の入

つてきた部分は小さなくぐり戸だつたので裏口という事だろつ。正面には見事に開けた街の景色が広がつてゐる。そこから私の働いていたエリアも見える。

「広さも丁度いいな。ここに花を植えて、ここに小川を作つて…。そこから眺めて見える戦場では、血飛沫が舞つてゐるというのに私は、この箱庭に思いを巡らせ始めた。ここが元々何に使われるはずのものだつたのかは分らないが、広さや立地や地面の起伏、周辺を見渡した環境など、まさしく申し分のないこの庭は、しばし私を魅了した。

そうして、どれくらいの時間が流れただろう。

「ん？」

ふと目の前を見ると、小さな机に、あの黒ずくめの男が座つてゐる。私の心に残つていた恐怖は興奮ですっかり洗い流されていたから、思わず話しかける。

「あんた…死神なのか？」

「…」

男はとうあえずはこちらを向いたが、口は全く動かす様子はない。

「…ここで何してるんだ？」

私は第一の質問を投げかける。

「それはこつちの台詞だ。」

不意に背後から別の声が投げかけられた。振り返ると赤い鎧に身を包んだ男が剣を持つて立つてゐる。

「あ…あんた…。」

「ああ、バーの男か。」

鎧の男は剣を一振り素振りして付着していた血を拭うとそれを鞘に収めた。敵意はないようだ。足取りからしても体に付着している血は全て返り血なのだろう。

「逃げなかつたのか。」

「あなたは？」

「ああ、この城の主さ。」

薄々は気づいていた線が繋がる。

王は私の傍まで近寄ると死神のいた木に目を向けた。自然私の目もそちらを向く。

「あ…。」

そこには誰も居なかつた。

「まだ、見えるのか?」

「い、いや、もう見えません。」

「そうか。私にも見えない。といつて…もう一度聞くが…」

「はい。」

「ここで何をしていた?」

「い、いや、私は庭師をしておりまして、この場所が気に入りました。」

別に問い合わせられたわけでもないのだが、咄嗟に慌てて出した言葉がそれであつた。

「そうか、ここを庭になあ。それもいいかもしけんな。」

王は周辺を見回しながらそう答えた。

「おつと。」

城の振動が私の前に佇む木を根元から揺らせる。私自身もバランスを崩して尻餅を突いた。すっかり足腰が弱くなつていて。

揺れは収まる様子もなく私は木にしがみつくよにして何とか腰を上げた。私の傍にはいつの間にか黒ずくめの男がじつと私を見ていた。

「やあ、五十年ぶりだね。」

私の話しかけに男は答えない。

「いや、正確にこつと、三十年くらいだな。こじで念つのが五十年ぶりかな。」

相変わらず男は全ての事象に興味がないとばかりに口や眉を何一つ動かさない。予想通りのリアクションに私は苦笑いをするだけだ。

開けた景色の中で街に突然火が上がる。城壁が破られ雪崩のよう
に見慣れぬ鎧が町に流れ込んでくるのが見える。

五十年前とは違つて城壁も町も城もすっかり完成していた。この
王の住む城は完成してからも今まで何度も攻められた事はあるが、
町にまで雪崩れ込めたのは初めての事だった。

町から流れてくる喚声と嬌声はあまり気持ちのいいものではない。
「かかれ！」

城門が開かれ、城から王を先頭にして見慣れた鎧が町へと飛び出
していく。

「お、お逃げください！」

若い兵士が私の所へ走つてきて背後からうそう話しかけた。

「君、この黒い男が見えるかね。」

私は手をついていた木の傍の死神を見ながら若い兵士に問いかけ
る。

「は？」

兵士は不思議そうな表情を浮かべて首をかしげる。

「そうか。なら君だけでも逃げなさい。」

「わ、私は最後まで…。」

「まだ君は助かる。いや、私も足搔けば分らんが、もうすっかり体
も弱つてしまつたからな。」

「し、しかし…。」

若者はまだどうするか迷つていてる様子だった。こうしている間に
も火の手はどんどん城に近づいているのが見える。王の軍隊でもあ
の勢いは止められないだろう。

「私はこの城の庭師だ。自分の職分を捨てて逃げるには歳を取りす
ぎた。」

私は嗜める様に若者に話しかける。

「し、しかし…。」

この迷いも若さかもしれない。私は苦笑いしながら庭の片隅にあ
る物置を指差した。

「あそこに私の鞄が置いてある。持つてきてくれないか？」

「はい。」

跪いていた若者は直ぐに立ち上がり小屋に向かって走っていく。
どんどん小さくなる背中を見て私は正直羨ましく思う。あつとう間に若者は古びた鞄を持つて来た。

どこからともなく火矢が一本飛んできて木に突き刺さる。あつとういう間に枝葉に火がついて燃え広がつてしまつ。それを見て私は何とかよろよろと木から離れた。

「ふふ、綺麗なものだな。」

火を眺めて呟いた私を若者が不思議そうに見ている。

「君はこの国の生まれか？」

「い、いいえ、私は遠い北の国から…。」

「そうか、なら北門から逃げた方がいいな。ご両親は健在か？」

「あ、は、はい。」

この非常時にする質問としてはかなり異質なものなのだろう。若者は仕方なく答えているという雰囲気をかもし出している。

「そうか。なら早く故郷に帰つて親孝行する事だ。今の君にはそれが仕事だ。」

「し、しかし、私は王命で貴方の護衛をしているのです。」

「もうこの国は地図から消える。国が消えれば王も消える、だから王命に意味などなくなる。」

「…」

少し前まで確固たる信念を持っていた若者は私の言葉に困惑している。王命が無意味だなどと言い放つ私を化物を見るような目で見ている。

「君がもつと歳を取れば、私の言葉の意味が分る日がくるかも知れない。その日まで命だけは大事にしなさい。」

私はここで持っていた古びた鞄一度強く握つて若者に渡す。

「これは…？」

「これは私が父から貰つたものだ。君にやるよ。旅には必要だろう。」

「し、しかし…。」

「いいから貰つてくれ。私には弟子も子供もない。遠慮することはない。」

少し重い鞄を若者は開いて中を確認する。かつて私が母に渡された時と同じ様なものがそのまま格納されている。この庭を離れるつもりのない私が何故こんなものを用意していたのか…それは自分で分らない。

「で、では…。」

若者はようやく重い腰を上げて走り去つて行つた。木に乗り移つた火はそういう間に庭中に広がり続ける。

「さて、と…。」

私は自分の作り上げた庭が自然に帰るのを見届ける為に庭の裏口へと移動して、火の海になつた庭を暫く眺めていた。傍らには死神がじつと立つてゐる。

「10の歳になるとお前を見ても何の恐怖も感じないな。」

とりとめもない会話をしたつもりだが、相変らず死神は沈黙を守つてゐる。

「今日は、よく晴れているから冷たくて乾いた強風が吹いている。敵さんもこの日を選んで攻め込んできたのだろう。五十年前もこんな日だつたな…。」

私は真っ赤に染まつていく庭や町を眺めてその場に座り込んだ。体を包んでいく赤い炎に不思議と熱さは感じなかつた。

長い旅が終わる。俺の武者修行の旅が…。あと山一つ超えれば生まれ故郷の村である。

「待て、何者だ?」

国境の川に掛かる橋の手前で鎧を着た兵士に呼び止められる。

「何者つて、俺はこの国の生まれで今から実家に帰るところなんだよ。」

「そうか通行証は?」

「は?」

俺が怪訝な顔をすると周りにいた数人の兵士達が集まってきた。もうこの国を旅立つて十年になる。十年前には見送り1人いなかつたのに比べてこれは随分と歓迎されたものだ。いつ出来たのか知らないが橋の前に駐屯基地のようなものが出来て、物騒な兵士達がうろうろしているので近づきたくなかったのだが、この橋を渡らずに帰る遠回りの事を考えると止むを得ない。

「この国の人と証明ができるまで通すわけにはいかんな。」

「俺は十年も国を離れてたんだ。通行証なんてどこで手に入れればいいんだよ。」

「そうか。お前は知らんだろうが、この国は十年前にクーデターが起きて、王も法律も変わってしまったのだ。」

「そんな事知らないよ。」

俺が国を出てすぐの時期じゃないか。こんなくだらない事で自分が生まれた国に入れないとは情けない。

「とにかく、ここは通すわけにはいかんのだ。」

兵士は真面目ぶつてインコや九官鳥の様に同じ事を繰返すだけだった。いつの間にか、他に通行している者達も俺の周りに集まってきた。何で帰るというだけでこんな大事になるのか理解できない。

突然兵士の額当てが光った。晴天の太陽に反射してその光が俺の目を差す。

「いてて。」

俺は目を擦りながらその額当ての模様を見た。俺の知っているこの国の模様とは全く異なっている。どうやらこの国が変わってしまったという事は事実らしい。だからと言つてこのまま引き下がるわけにもいかなかつた。

「じゃあ、どうすれば、俺は家に帰れるんだい。」

立腹を露にして俺は兵士に問いかける。

「まったく、本当に何も知らないんだな。」

俺は大きく頷く。兵士はやれやれといった様子で面倒くさそうに説明を始めた。

「いいか、この国は生まれ変わって前みたいな平和ボケではなくなつたのだ。いいか、この国は弱肉強食の法律がある。」

「…？」

俺はまず兵士の言つてゐる事が理解できない。ぼーっと聞いていると兵士は、おもむろに剣を抜いた。

「わっ！」

流石にこれには少し驚いて身を引く。兵士はそんな俺の態度を嘲笑つて剣を肩に担いだ。

「この国では私闘が推奨されているんだよ。」

「私闘？」

「ああ、但し、許されているのは、我々軍事関係者、政府関係者と国外の者のみだがな。」

「どうこうことだ？」

「つまり、こういうことだ！」

兵士はこきなり俺に向けて肩に担いだ剣を振り下ろしていく。とつさにうしろに身を引いて何とかかわす。

「どうした？剣を抜かないと、今ここで死ぬ事になるぞ？」

「何だつて？」

「どうやらこの国は俺が留守の間にとんでもないことになつてしまつたらしい。」

「どうした、背中に担いだ剣は唯の飾りか？」

兵士は俺を目一杯挑発しているつもりの様だつたが、俺は頭にくるどころか、今自分が置かれている状況を理解する為に頭をフル回転させるだけで精一杯だつた。

「何のつもりか知らないけど、俺はこの国の人間だ。それに軍事関係者でもない。そしてこの剣は飾りじゃない。俺は鍛冶屋だ。剣を持つつていもいいだろう！」

俺は兵士の横暴に剣ではなく弁舌を持つて答えたつもりだ。兵士は黙つて弁舌を聞いていたが、神妙な面持ちになつて俺を眺め回す。

「それは、本当か？」

「ああ、嘘じやない。嘘と思うなら調べてみる。この国東の外れにある村の唯一の鍛冶屋だつた俺の親父が十年前に死んでいるはずだ。俺はそれから親父の後を継いで技術を磨く為に旅に出たんだ。家族の不幸の知らせを受けて今日帰つてきたんだ。分つたか？、この国の法律がどう変わつたつたって、家に帰るだけの人間に剣を向ける理由なんかないだろうが。」

「ふーむ…。」

兵士は暫く考え込んだ。こんな簡単な常識を考えないと分らない風になるこの国の法律に大きな問題があると思つたが、今はそんな挑発的な言葉を投げかけるわけにはいかない。とにかく無事にこの川を渡る事が先決だ。

「分つたら通してくれ。結構急いでいるんだ。」

「…、なるほど、なら一つ条件がある。」

「は？」

「この俺の剣を鍛えなおしてくれ。」

兵士はさつきと一転して剣を俺に差し出してきた。俺は「急いでいる」と言つたはずなんだが、どうやら人の話を聞かないタイプの人間のようだ。

「分ったよ。ただし、この国を出る時だ。俺は今、急いで故郷に帰らなければならぬから用事が終わつたら必ずここに来てあなたの剣を鍛えなおしてやるよ。」

「…。」

兵士はしばし考え込む。確かに口約束だが、前向きに善処してくれているようだ。

「よし、分った。約束は破るなよ。」

兵士はあつさりと承諾して剣を鞘に収める。俺の意外な反応に気づいた兵士がわけを話す。

「この国はな、この法律のおかげで1兵卒に至るまで急速に強くなつたから周りの国から睨まれてるのさ。だから、食料を生産する農民と武器を生産する職人が何より厚遇されているんだ。お前さんの言つ村には行つたことはないが、まあ、職人つてのは信用してやるよ。この国で農民と職人を殺せば、厳罰になるからな。」

何ともまあ、無駄を削いだといふか、大分偏った思考の王様のようだ。

「行けよ。約束は忘れるな。」

兵士は一変してあつさりを道をあける。その脇を通つて橋へと歩いていく俺。

「気をつけるよ。俺みたいに物分りがいいやつらばかりじゃないからな。おつと、一つ言い忘れてたが、この国は、この法律のおかげで王が結構この十年で何人か入れ替わつたらしいぜ。私闘の範囲に王も入つていてるからな。勝つたものには全てが与えられる。この国では王のシンボルは冠じやなくて、国のシンボルを彫つた剣だとよ。」

「

橋に向かつて歩いている俺は、背中から聞こえる狂氣じみた話に少し身震いしながら橋を渡りきつた。橋を渡つた門の上には新しい国のシンボルマークの模様が刻まれている。

これも十年前にはなかつた新しいものだ。しかし、あんな話を着た後では血生臭い模様にしか見えない。俺はそそくさと入国した。

余計な事で時間を食つて、日は暮れてきたのでこの辺りで俺は宿を取る事にした。生まれ故郷であるがゆえにこの辺りの山が危険な事は良く知つている。

熊や蛇から山賊まで、命と荷物を失う要素がやたらと存在する。

「疲れた…。」

まあ一日くらい遅く帰つても別に構つまい。山の麓の集落には旅人を泊める宿が何軒か軒を連ねてゐる。この辺りの街道はこの国の新しい王様が輸送道の整備の為に工事して直したらしい。ここを通過すること自体久しぶりだが、俺が旅を始めた時はこんな集落自体存在しなかつた。

「空いてる？」

暖簾をくぐつて声を掛ける。

「すみません。うちはいっぽいでして…。」

奥から出てきた宿の主は手を揉みながら笑顔で残念な返事を切り返す。

「なんだよ。ちえ。」

無論、俺の方は笑顔でそれを返すわけではないが、空いてないのであれば止むを得ない。何軒かそつやつて回つたが、どこも満室でとりつくしまもない。

「仕方ないなあ。」

途方にくれて道端に座り込んでいた。

ふと、何気に顔を上げると街道の反対側に誰かが立つてこっちを見ている。帽子から靴まで真っ黒いものを揃えているから、薄暗い中、今まで気づかなかつた。しかし、そいつは確実にこちらを見ている。

「？」

じりじりと見られている割には全く覚えのない顔である。しかし

から話しかけるのも何か違う気がして、俺は気づかない振りをするのが一番良いと判断した。

「うーん。」

立ち上がり背伸びをする。さて、今夜の宿はどうするか…。強行軍で帰るという手も考えられるが、それも何か面倒くさい気がする。よし、あと一軒だけ覗いて、それで駄目なら…、その時考えよう。

「すいません。」

俺は最後の暖簾をくぐつて声をかけた。奥から出てきた髭の主人が手を揉みながら笑顔で答えるのだが、同じ笑顔を何度も見てきた俺にとっては、また「一杯で…」という言葉が飛び出すと思つた。

「えーと、相部屋でよければ…。」

「えーと…。」

意外な答えに俺は迷いを露にする。このまま、野宿や強行軍を選択するよりはマシだと思い、仕方なく「それでいい」と返答した。「ではこちらへ。」

腰を低くした髭主人は俺を宿の中へ導く。階段を上った2階の一番奥の部屋の前まで来ると髭主人はドアをノックする。

「はい。」

低く野太い声が部屋の中から聞こえてくると、髭主人はドアを開く。

「失礼します。」

部屋に入ると、髭主人よりもさらに髭の濃い中年の男が鞘から抜いた剣の手入れをしていた。片目は大きな傷が塞いでいる。

「すみません。今日は大変に混み合つていて…相部屋をお願いできないでしょうか。」

「私は構わないよ。」

野太い声が快く提案を承諾する。

「失礼します。」

俺は部屋に入り、テーブルを挟んで男の向いに腰掛ける。男は俺

を一向に気にせず剣の手入れを再開した。大分、使い込んでいたが、手入れが良いのかまだ切れ味が衰えている様には見えない。

「いい剣ですねえ。」

沈黙が嫌なので俺は何となく話しかけた。男は手を休めてこちらを見る。

「そう見えるかね?」

「はい。俺はこう見えても鍛冶屋なので。」

「ほお。それは丁度良かつた。この前の戦で使い込んでしまってな。この山の向こうに腕のいい鍛冶屋があると聞いたので来てみたのだが…。」

この辺りで村があるのは俺の村だけだ。それに村に鍛冶屋はうちしかない。親父は元々有名だったので間違いなく親父の事だろう。なるほど、でもその鍛冶屋はもういないですよ。」

「何?、そなのか?」

「はい。」

「そなか。いなのか…。」

男は顔を曇らせて本当に残念そうな顔をする。俺が村にいた頃から、何人かの名のある剣士がうちを尋ねてきた事があるが、これらは俺が対応しなければいけないと思った。

「俺で良ければどうです。」

「そういえば君も鍛冶屋だつたな。」

「はい。親父程ではないけど、まあ、それなりに修行は積んでいます。」

「ふむ、それではお願ひしようか。」

「毎度、じゃ、少し拝見。」

俺は男から剣を受け取るとじつと観察する。修行中に見たどの剣よりも間違いなく名剣だった。もはや芸術品の域に達していると思われる刃芯を見ると、これ以上何をどうしようかというのだろうと思う。

ただ男の言つとおり激戦を潜り抜けた跡なのか、多少の刃こぼれはあった。

「どうだ。何とかなりそつか？」

「はい。とりあえず、ここでは何なんで工房に行つてからですね。」

「工房？、それは何処に？」

「ああ、山の向こうですよ。」

「そうか。では、今日はもう休む事にしよう。」

工房に行つてもどうなるものか分らないが、俺も鍛冶屋の端くれだというプライドで適當な返事をしてしまつた。まあ何とかなるだろう。

十年前に親父が亡くなり、祖父が家業を廃止すると言い出した時、俺はそれに反対した。親父は病で死ぬには早すぎる年齢だったので俺はまだ後を継ぐ技術を十分に引き継いではいなかつた。祖父はまだ健在だつたが、家業を続ける体力は残つておらず、このまま続ける事は困難な状態だつた。

しかし、俺は諦めなかつた。この狭い村では他に鍛冶屋の技術を学ぶ事はできない。俺は家族を説得して旅に出る事にした。何年かかるかは分らないが、武者修行の旅だ。正直俺は生まれてからこの村を出たことがない。だから、これを理由に旅がしてみたかつた。修行は眞面目にするつもりだが、それよりも、旅をするという行為に高揚した気持ちの方が強かつた。

「なるほど、で、修行を終えて戻つてきたといつわけだね。」

俺の話を黙々と聞いていた男は相槌を打つ。

「いや、終えたわけではなくて、祖父がなくなつたという知らせを受け取つたもので。」

「そうか、それで一時帰省という事か。」

「はい。」

「だが、そんな時にお邪魔してよろしいのかな。」
なかなか良識のある人のようだ。

「仕事であれば問題ありませんよ。」

山道も中腹に差し掛かつてきただ頃に少し休もうといつ事になり、
俺達は景色のよい岩肌に腰掛けた休んでいた。

「剣士さんも各地を旅してますか？」

「いや、それほどウロウロしているわけじゃないよ。」

「そうですか。」

いい天気だ。日向ぼっこをしているつまにまた歩くのが面倒になると嫌なので出発しようとして腰を上げた。

力チン。

足元で何か音がした。

俺がそれが何かを確かめようと身を屈めると、今度は頭上で金属音が響く。

「そのまましゃがんでも！」

剣士の声で思わず体が硬直する。そして、引続き聞こえる金属音。何が起こっているのか分らないままにとりあえず指示通りはいつくばつて身を低くする。僅かに首を上げる俺の視界には無数に飛んでくる短刀を見事に剣で叩き落としているのが見える。

一体何が起こっているのか分らないまま、暫くして短刀が飛んでもくなくなつたので腰を上げて周りを見回した。

「すっかり囮まれたな…。」

「え？」

剣士の咳きに背筋が凍る。それと同時に周りから十名程の簡易鎧を来た刺客が飛び出していく。鎧と言つても胴体の正面に申し訳程度にあてがつた板に見慣れぬ模様が描かれているのだ。

俺は、修行中に人に恨まれる様な事をした覚えはない。

「くそつ…。」

背中に背負つていた剣を抜いて構える。これでも1人で物騒な世界を回っていた手前、多少剣術には覚えはあった。俺は剣士と背中

あわせになつて戦闘態勢に入る。

「貴方、心当たりはあるんですか？」

「とりあえず小声で聞いてみる。

「すまないな。」

謝られてもこの状況になつてしまつた以上は仕方ない。とりあえず、殺氣をばら撒いていた刺客達が一斉に飛び掛つてくる。俺は目の前の1人に向かつて飛び掛る。激しい火花とともに力ずくでそいつの体ごとはじき飛ばした。重い槌を一晩振り続ける事もある。それに比べれば一瞬に人間を飛ばす力は十分に備わつていて。追撃して何度も切りかかるが見事に払いのけられた。

まあ本職ではないとはいつくづく剣士の家に生まれなくて良かつたと思う。剣を止めるところからがやられるという思いにかられ必死で剣を振るつた。向こうも俺の隙を伺つていただろうが、素人ゆえにその剣筋を読めずに戸惑つていて。

「当たれ！」

思わず言葉にした瞬間に向こうの体に剣が突き刺さる。願つてみるものだと思つたら、その剣は俺のものではなくて剣士のものだった。

「大丈夫か？」

剣士に肩を叩かれて我に帰り、氣づけばかなり息が上がつていた。

「た、助かった。」

剣を扱う職業とは言え、生まれてこの方、正式な剣術など習つた試しがない。

剣士が鞘に仕舞う前に剣を一振りすると、予想外に生々しく新鮮な返り血が足元の岩肌に飛び散る。それを追つた目線を背後に向けると、先程まで人間離れした動きを見せていた刺客達が物言わぬ屍に変わり果てている。

「何なんだコイツら。」

「おそらく隣国の暗殺者というところだろう。」

剣士は鞘に剣を仕舞いながら抑揚のない淡々とした口調で答える。

「あんた何者なんだ？人に恨みを買つような事してんのか？」

「そうだな、まあ気にするな。」

そう言われても気にしないわけがない。この後も俺たちはあんなに狙われ続けるのだろうか。本人はまるで虫を追い払う様に日常茶飯事の事の様な態度だが、俺は激しく動く心臓を落ち着かせるのに、もう少し時間がかかりそうだ。

「先を急ぐ。この辺りの獣が血の匂いを嗅ぎ付ける前に。」

既に匂いを嗅ぎ付けているカラス達が鳴きながら頭上を徘徊している。もはや獣がどうとかいう問題ではない様な気がするが、とりあえず言われるままに剣士の後について岩から降りた。

正直この時点でこの災いの塊の男を村に連れていくのがどうか迷っていた。このままでは村が襲われかねない。

「まだ距離はあるのか？」

剣士は振り返りもせずに問いかける。返事を返す前に剣士の背中越しに道端に誰かが立っているのが見えた。薄暗い森の中で黒一色の服装なのでとても見えにくいが、そいつは確かにいた。

剣士もその存在に気づいたらしく、背中から殺気がみなぎったような気がした。どうやらこちらから仕掛けるかどうかを迷っているようだ。俺はよく分からないが、こうじつ時には達人同士は水面下で高度な駆引きを行なっているのだろう。

「…」

俺達は素人でも分かる程の緊張感を身に纏つて黒ずくめの男の前を通り過ぎる。特に真横を通過する時の鼓動の速さは生涯最高の速さだった。

しかし、そいつは全く我々に反応を示さずにその場を一步も動かない。逆に生きているかどうかも怪しい程に指一本ピクリとすることも無かつた。

「…」

振り返って男の姿が見えなくなつた時に始めて身体中の皮膚から汗が滲み出てきた。それと同時に何か頭に引っかかっていたものに

気づく。

「あいつ、宿の集落にいた奴だ。」

宿の集落からここまで来る険しい道を我々より早く辿ってきたのか。

「知つてゐる人物なのか。」

「とんでもない、あんな不気味な奴は知り合いにはいないよ。」

剣士の問いに俺は首を大きく横に振った。だが一度も見てしまつと、三度田が頭にちらつく。かなり距離が開くまで気が気がではなく、背中に神経を集中させていた。

ようやく安心した頃に目の前に不気味に立ち上る煙に気づく。

「む、村の方だ。」

「何つ！」

もうすぐ辿り着く筈だった村の方向である。思わず駆け出した俺に続いて剣士も地面を蹴る。

剣を精錬する時の煙に似てはいるが、親父が亡くなつた今、村にはそんな事をする者は一人もいない。最悪の状況が脳裏に浮かぶ中で、久し振りの家路を急いだ。

「待て！」

不意に俺の前に剣士が立ちはだかる。

「どいてくれ！」

「落ち着け、良く見ろ！」

気がつけば俺達は村を一望出来る小高い丘にいた。そこから見える、かつて村があつたであろう場所はほとんど平にならされて、焦げた臭いが鼻をつく。

「そ、そんな馬鹿な。」

足元から魂が抜けていく様に膝を地面につく俺は、剣士に支えられて何とか上半身は起こしたまま、絶望的な景色を瞳に映していた。

「国境が近いとはいって、まさか奴らがこんな所にまで来ているとはな……」

俺は剣士の呟きを殆ど上の空で聞きながら、眼前で赤々と燃えている火を見つめる。勝手知ったる我が家は何とか半壊状態だつた為に雨露くらいは凌げるだろうと、とりあえず一晩ここで過ごす事にした。

「これからどうするか……だな。」

顔を上げると剣士が俺の目を見て核心な問い掛け。確かに一番最初に考えなければならないことかもしれないが、今日はもう色々起これすぎて思考が停止してしまっていた。

「あなたこそ、すいませんね。これでは仕事になりそうにないな。俺は頭を搔きながら精一杯冷静を装つが、おそらく剣士には心中露になつていたと思う。」

「確かにそいつは困ったな。」

俺の真似をしたわけではないだろうが同じ様に頭を搔く。俺は少し小さくなつた火に瓦礫から取つた破片をくべた。火は少し大きくなり俺達の周りを照らす範囲を少し広げる。

「あ。」

「どうした?」

口を開いて明かりと暗闇の境界を見ていた俺の目に人の形が飛び込んでくる。おそらくは大分前からそこに立つていたのだろうが、火をくぐるまで全く気づかなかつたのは、そいつの格好が黒一色だつたからだろう。

「またお前か……」

剣士は剣を抜きもせずに立ち上がる。殺気が感じられないことが今度は俺にも分かつた。もしかしたら、そいつはただ道に迷つただけかもしれない。

「そんなどこに立つてないで、こっちに来て座つたらどうだ?」

何で俺が氣を使うんだ?と思しながら声をかけてみた。

黒ずくめの男は、俺の親切に素直に従い、歩いてきて火の脇に腰

掛けた。

「…」

そいつは何も言わずにただじっと火を見つめている。少しの間、俺も剣士も口を閉ざして沈黙が訪れた。時々俺が瓦礫から取つてきた木片を火にくべた時のパチパチという音だけがやたら大きく耳をくすぐる。

「剣を見せてもらえないでしょ？」「

別に沈黙に耐え切れなかつたわけではないが、俺は剣士に何気なく話す。剣士は黙つて鞘のまま剣を差し出してきた。俺は鞘を抜いて焚火の明かりで刀身を照らした。

目を細めてよく観察すれば多少の刃こぼれは目立つが、ゆらゆらと揺れる火を映したそれは名剣と呼ぶに相応しい色艶を出していた。なるほど、この剣を作つたのはかなりの名工だ。俺の中でくやしい感情が少し頭をもたげてくる。

旅の中でも数々の優れた武器を見る度に沸き上がる気持ちに対しうは、それを糧にするようになるまでには随分と足を引っ張られたものだ。揺れる火を鏡の様に映すそれを眺めていると、思わず槌に手を伸ばしそうになる。

「… そういえば、あつちの方に残つてた小屋は？」

そんな俺の心情を察してか、それとも無視してか、剣士が不意にある方向を指差す。

「小屋？」

俺は暗闇を見つめながら記憶を辿る。焼け残つた小屋とは、それは幼い頃からよく知つてゐる父の仕事場だつた。そうか、まだあの場所は焼け残つてゐるのか。

心の中では迷つていたが、思い切つて口を開く。

「もう一晩ここに留まりませんか？」

「よからう。」

剣士は全てを見透かしていた様に即答する。それ待つてゐたのかと思えるほど、答えた瞬間に雲が晴れて月の明かりが焚火の円灯

の外の風景を照らし出す。そこには確かに見慣れた工房が原型を留めていた。

「仕事しろってことか…」

俺は剣を持ったまま立ちぬくして、すぐには動けなかつた。迷いを見透かしているのか、剣士だけではなく黒ずくめの男も俺の顔を凝視している。まるで次の一歩が人生の分岐点かのような緊張感が辺りの空気を凍らせていた。

「…」

沈黙する二人。虫の鳴き声だけが辺り一体に響いて満月はますます明るく地面を照らしている。

「分かつたよ。」

誰に対しても言つた言葉なのかは分からぬが、とりあえず俺の足は意思とは無関係に前に移動し始める。一步小屋に近づく度に体が重くなつていく様に感じた。

小屋の戸を引こうと手をかけた途端、それはボロボロと崩れ落ちた。流石に無傷というわけにはいかない。

中に入ると記憶の中のそのままの風景が広がる。竈に火こそ入つてないものの見慣れた道具が、窓から差し込む月によつて不気味に光つていた。

それらの道具を一つ一つ手に取つて確認する。使う者が居なかつた事が幸いしたのか、一通りは村を出る時に最後に手入れした状態を保つていた。

「どのくらいかかる?」「…」

まだ作業を始めるとも言つてないのに、入口付近の壁にもたれて腕を組んでいた剣士が質問する。

「…」

俺は即答しようと喉から声を出しかけた。しかしその声が剣士に届くことはなかつた。

「がは…」

「?」

突然喀血したかと思つとそのまま目を見開いたままつ伏せに倒れ込んだ。

「な……」

今度は俺が目を見開く番だった。何が起つたのか理解できるまでの数秒間、剣士の背中が当たつていた部分の壁から突き出た剣と、倒れた剣士の背中から溢れ出してくる血を交互に見ていた。

やがて入口に現れた人影で我に帰る。

「貴様はこの者の縁の者か？」

個性の特定出来ない低くて地獄から響いてくる様な声。俺は妙に冷静に答える。

「俺はこの村の鍛冶屋だ。この男は客さ。」

「そうか、もう一つ質問だ。お前は死神を見たか？」

「何の話しだ。」

「そうか、ならいい。」

薄暗さで表情は分からなかつたが、そいつが何となく笑つた様な気がした。その姿が、かき消す様に消えると、いつの間にか壁から突き出していた剣も消えていた。

それからも俺は暫くは動けないでいた。相変わらず虫の声だけが空気を振動させている空間で、ひんやりとした夜風が戸や窓から吹き抜けていく。

何がきっかけというわけでもなく、俺の全身から汗が噴き出してきた。そして外に出ると、赤々と燃えている焚火の場所まで走つた。そこには消えかけた火以外に動いているものなど何一つ無かつた。

そこにじつと座つていた黒ずくめの男も影すら見当たらない。さつき剣士を殺した奴と関係があるのでどうか？

一先ずその場に座り夜風で汗を乾かすと、よつやく頭が回転し始めた。

「まずは休むことだな……」

誰に言つともなしに咳くと寝袋に滑り込む。誰かは知らないが、俺を殺すつもりならさつき殺しているはずだ。だからもう命の危険

はないとと思う。いや、そう信じよう。

あの黒ずくめの男が刺客だとしても剣士が死んだ途端に姿を消したという事は目的が達成された何よりの証拠だ。気休めかもしれないが、俺は必死に自分の安全を確認しながら目を閉じた。

朝日の眩しさで目を覚ました。まだくすぶつっていた焚火の焦げ臭い臭いが鼻をつく。頭上を見上げると雲一つ無い空に輝く陽射しで少し目が痛い。

細目になつて周りを見渡すと昨夜の事が夢では無かつた物証があちこちに散乱していた。明るくなつて改めて見ると、俺が知つている村など何処にもない。ただ、何とか形を保つっていた工房がもの悲しげに建つていた。

小屋に近づくと、外れた戸から小屋の中が見える。昨日うつ伏せに倒れた剣士が今にも起き上がりそうに生々しく田に飛び込んできた。

「墓くらい作つてやるかな…」

剣士の遺体を抱えて小屋から出すと小屋の脇の木の根元を掘り始める。

「くそつ！」

墓穴を掘りながら俺は急激に口惜しさが込み上げてきた。理由などはないが、何でこんな目に合わなければならぬのだという想いが穴を掘る手に余分な力を注ぐ。

「くそつ！」

呪いの決め文句を掛け声の様に繰返す。あつという間に一人分は埋められるであろう、かなり大きな穴が足元で口を開けていた。

「まあこんなもんか。」

穴掘りは専門外とはいえ割りと立派な穴が出来た。もう一度剣士を抱えて移動を始める。

「ん？」

少し進むと足元に何か光るもののが落ちた事に気づいた。剣士の持ち物なのだろう。それは何かの模様の入った小さな袋だった。一旦剣士の体を地面に置いて拾い上げる。少し後ろめたい気持ちもあつたが、好奇心も手伝つて袋を開けてみた。

少しの貝貨に混じつて何か光る貝貨が一つ入つている。

「何だこれ？」

取り出して太陽に翳すとそれは、太陽の光を倍増して目に入れた様にかなり神々しさを放つてゐる。他のものとは色艶が一変しているものであった。そこに描かれた模様には何処かで見覚えがあつた。俺は、その場に暫く立ち尽くしてどうしようか迷つたが、貝貨は葬式代だと思い頂くことにした。

剣士の死に關しては俺に責任は何もない筈だ。

「さてと、それじゃあ運ぶかな。」

再び剣士の体を引きずつて穴の中に落とす。多少荒っぽいが、まあ勘弁して貰おう。結構な時間をかけて丁寧に土を盛る。さて、あと問題は墓標だ。俺はこの時点で、剣士の名前を聞いていなかつた事に気づく。

「ふむ。困ったな。仕方ない…。」

俺は考えた末に木に「名無」と刻んだ。何もないよりはマシなはずだ。その場で一礼して小屋に戻る。そこには道具一式と剣士の残した名剣がまだあつた。俺は再び剣を鞘から抜いてじっくりとそれを眺める。

「ん？」

剣の柄の所に先程の袋の中に入つていた模様入りの貝貨にとても良く似ている模様が刻み込まれてゐる。

「あ…。」

俺はほどなくして入国した時に見たこの国新しいシンボルだと気づく。そしてあの兵士の言葉…。

「まさか…。」

あの兵士の話が本当だとすれば、下克上を狙つて部下が王を暗殺したとも取れる。しかし、そうなるとこの剣を置いていった理由が分らない。やはり、この国の人間ではないのだろう。

それはそうと、この剣を持つてこの国をウロウロするわけにはいかない。王の称号である剣を持っているといつ事は俺が今はこの国の王という事になる。

「そ、そんな馬鹿な…。」

自分で言つてて馬鹿馬鹿しくなるが、兵士の話が本当なら別段不思議な事ではないだろう。しかし、命には変えられないのは分つてはいるものの、これだけの名剣を手放すには、1人の鍛冶屋として余りにも惜しい気がする。

「うーん。」

美しい剣を眺めながら、俺は雷に打たれた様に一つの事を思いつく。

「そうか…。俺は何の為に鍛冶屋をやつてるんだ…。」

夜の戸張が降りても俺の作業は終わらない。竈に火を入れてからもう数時間が経過した。流石に誰も使っていなかつた工房だけあって直ぐには作業に取り掛かるわけにはいかない。とりあえず、準備で半日以上は使つてしまつた。一休みしようと夜風の吹く外に出た時には、昨日と同じ様に煌々とした月がすっかり夜の顔になつていた。

昨日焚火した跡付近に立つて空を眺める。大きく深呼吸した俺の目に突然黒い人影が映つた。

「なつ…。」

それはあの黒ずくめの男だった。彼は、木の陰から黙つて俺の方を向いている。

「あ、あんた。まだいたのか。」

黒ずくめの男は木陰から月明かりの下に進み出る。だが、相変ら

す口が動く気配はない。

「何をしに戻つてきたんだ?」
「ここに何もないぜ。」

俺は刺激しない様に出来るだけ友好的に話しかけた。何せ相手は、

10

一瞬で話題は尽きて沈黙。まあ、2、3回会った事があるだけで、

俺は二つの声を聞いた事がないのだ。

もう一度聞くけど、俺に何が用なのか？」
男は警戒の、暖簾二重甲しなのを語つ

やめて工房に戻ることにした。

工房にはすっかり準備が整い俺の仕事を今か今かと待つて居る道

具がすらりと並べられて いる。人の気配を感じた私は顔を上げると

「誰だ！」

窓から除く月光だけでは、そいつの顔は確認できなかつた。

俺たよ

十一

十年ぶりに戻ってきたこの国で、村の連中以外に知り合いなどい
る筈もない。「俺」と言って分る人物など…。

お前は...。

その男が一步進み出て顔が用光の下にくる。その顔を見て、俺は

「何でここに。

「お前が東の村つて言ったんじやないか。」

そんな事じゃなくて、これはいる現田を聞いているんだよ

「その剣は可処で手こ入れたんだ?」

「何だと？」

俺との距離が近くなる程、男の表情が強張つてくる。

「その剣がどうしてお前の手にあるんだと聞いているんだ。

— その剣がどうしてお前の手にあるんだと聞いているんだ。

「…。」

俺は男との距離が縮まる度に距離を保とうと後ろに下がった。
「お前は、民間人だ。その剣を大人しく渡せば命だけは助けてやるう。」

俺の背中が壁に当たつてそれ以上は後に下がれなくなつた。

「ま、待て！、俺は今からこの剣を鍛えなおそうとしていたんだ。男の足が止る。」

「鍛えなおす？」

「そうだ。この剣の持ち主は俺にそれを依頼してから死んだ。俺は王なんかに興味はない。だからこの剣はあんたに譲るよ。ただその代わり、依頼は完遂したいんだ。頼む。3日いや、2日待つてくれ。」

男は立ち止まってじっと俺の目を睨む。恐らく頭の中では色々な打算が働いているんだろう事は容易に想像できる。

「…分つた。だが、俺もここで待たせて貰うぞ。」

俺は何とか命を繋げた。

赤く焼けた鉄を鍛える瞬間は無心になる。こんな状況でも、それは変わらない。

カーン、カーン。

その音は俺の心臓を撃つ様に自分の鼓動にあわせて響き渡る。今、俺にとつては世界にこの音しかない空白に近い瞬間。雑念を捨てられる様になつたのは、いつからだろうか。形を変えていく剣をただ無心で見ていた。元々が名剣だったのに今この剣がどの世に生まれ変わるのがかは、俺自身にも分らない。

「ぐ…。」

汗が目に入る。それを拭き取る時、一瞬だけ我に帰る。そして直ぐに無の世界へと入つていく。

どの位経つたのかは分らない。しかし、出来上がった剣を水につけるとジューという音が耳をくすぐると、とりあえず我に帰る。

「ふう。」

大きく息を吐き出して頭に巻いていた手拭を外す。用意していた柄に刃を取り付けると鞘にピタリとはめて作業を完了させた。手拭を外して、何気に絞ると大量の汗が床に滴り落ちた。壊れた戸から外に出ると、月が同じ場所に光っている。

「終わったのか？」

男が一人近づいてきて俺に話しかける。

「ああ、終わったよ。」

「さつさと渡せ。」

俺がゆっくりと手に持っていた剣を差し出すと、男はそれを奪取る。

「ところで、あいつは誰なんだ？」

男は近くの木の根元を指差して聞いてくる。俺はその方向を見たが、その指先には誰もいない。

「さあな。知らないよ。」

「まあいい。これで俺がこの国の王だ。」

男は薄ら笑いを浮かべると剣を握つて走り去る。

俺は、男が指差していた木の根元に歩み寄ると何も見えない木に向かつて話しかけた。

「お前、死神だろ？」

「…」

無論返事はない。そこにいるのかどうかも分らないが、俺は言葉を続ける。

「俺にはもうお前が見えない。」これで俺は助かるんだろうな。何をしたから助かったのかは知らないが、あの男はもうすぐ死ぬんだろう？、この国の王が、あんな馬鹿じやこの国は死んだも同然だな。」

俺は少し笑つて小屋に戻つた。そして更に一本の剣を持って小屋を出る。俺はその剣を最初に埋めた男の墓標として木の根元に突き

立てる。

「俺は王なんてのに興味はないんでね。」

それは、男に渡したダミーの剣ではない本物の剣だ。俺は一度手を合わせて焚き火の場所に戻り荷物を纏めた。もうこの国に未練はない。

俺はそれから旅に出て他の国で鍛冶屋を開いたが、程なく生まれ故郷の国の滅亡の話を風の頬りに聞く事になる。

人間ツイてない時は徹底的に重なるものだ。仕事が忙しいのは悪いことではないが、度が過ぎれば精神的に参つてくる。ようやくとれた休みの日も特に何をするでもなく家でゴロゴロするだけを繰り返していた。

会社に親しい人がいるわけでもなく、無論彼女や友人などという人物関係は俺の周りには存在していない。だから、人に恨まれる事もなければ喜ばれる事もない。

そんな無味無臭の人生に疲れた俺はどうしても一人になりたくて人生初の「無断休暇」というものをしてみる事にした。更に家に居ても仕方がないので、これも人生初になるが旅に出ることにしてみる。

計画と呼ぶほど大袈裟なものでもないだろうが、とりあえずネットで地図を眺めてみる。飛行機や新幹線などは本当に数回しか乗ったことはないし、予約の仕方もよく分からない。車もバイクも無ければ運転免許も持つてない。この乏しい移動手段で何処まで行けるのか…。

何も自分を変えたいだとか、そういうつもりはさらさら無く。ただひたすら突発的に思いついただけの旅だった。

そういう考えているうちに就業終了の時間がきた。

「お疲れ様です。」

一応挨拶はしたつもりだが、周りからは何の返答もない。まあいつもの事だ。就職してから何年も飲み会や食事に誰かと行った試しはないが、仕事に関してはきちんとこなしているつもりだ。リアクションがないという事は裏をかえせば、俺の仕事ぶりに問題はないと受け取っている。

都合のいい解釈かもしれないが、それでもしないと精神的にもたないのだ。まだ明るいうちに会社を出て電車に乗る。誰一人、明日

俺が会社に来ないなどとは思っていない。サボり癖のある人にはよくある日常かもしれないが、俺にとつてそれは大事件なのだ。

荷物を纏める為に一旦家に帰る。散らかった部屋の中から取りあえず一番大きなリュックを引っ張り出す。旅行など行かない俺に両親からの就職祝いだが、一度も使った事がない。

具体的には何が必要かもよく分からぬが、着替えや携帯電話の充電器くらいは必要だろうと、思いつくまま適当に詰め込んだ。詰め込み終わって外を見ると、すっかり日は沈んで星が見えかけていた。

家を出て駅に向かう。途中で空を見上げると、真ん丸い月が俺を笑っている様だった。最寄の駅前には商店街への入口があり、居酒屋などが軒を連ねている。まだ平日だというのに何人ものスース姿のサラリーマンや大学生らしき私服の若者が入れ替わりに店に入りしている。

賑やかな繁華街も俺にとつては、あまり嬉しい町ではない。街灯の光が映し出す彼らの紅潮した顔もあまり好きではなかつた。

目的地は考えていかつたが、一先ず定期を使って改札をくぐつた。会社までは無料でいけるが、こんな時今まで、いつもの見慣れた通勤風景を見るのも嫌だったので、ホームに降りた後に、会社とは反対方向の電車に乗ることにした。

「えーと、こつちか。あ…。」

慣れとは恐ろしいもので、危うくいつも方向の電車に乗りそうになつたが、何とか思いとどまつてホームの真ん中のベンチに座る。1人溜息に身を任せて壁に張られてあるポスターを何気に眺める。次の電車までまだ五分あつた。何もすることがない時の五分は長く感じるものだ。

少しでも空いている方がいいな。そうだ、先頭車両か最後尾なら座れるかもしない。退勤ラッシュの時間はとつぐに終わつていて、いつもの電車より空いている事は予想できたが、席に座れる事を期待して、念には念を入れようと席を立つて移動した。

ホームには誰もいない。いつもは、ホームに降りて最初に到着した電車に乗れない程混雑している見慣れたホームが、まるで別の空間の様に思える程、俺にとっては異色の景色だ。この駅のホームはこんなに広かつたのか…。

端まで来ると五人掛けのベンチの隅に誰かが座っている。

「あれ？」

さつきまで誰もいなかつた様にも見えたんだが…。まあ、俺もボーッとしているから断言は出来ない。更にそいつはまるで気配がない感じがしたし、服装も帽子から靴まで黒一色の格好だったから尚更目立たない。

男は寝てているのか起きているのか、深々と帽子を被り足を組んで手をポケットに入れてじっとしている。ただ、微かな体の揺れで息をしている事だけは分つた。それがなければ死んでいるんじゃないかと思える程にそいつからは生気が感じられなかつた。

まあ俺も似たようなものかもしれないが。

男が座っているのと反対側の端に座つて電車を待つ。電光掲示板には電車遅延の情報は流れていないので、時間通りならもう直ぐ来るはずだ。

いつの間にかホームに一人降りてきていた駅員が旗らしきものを振つていた。先頭車両付近に座つていた俺の目にゆっくりと進んでくる電車の強烈な灯りが目に飛び込んできた。

先頭車両がピッタリと目の前に止まり、立ち上がりつて近づくと左右に開いた扉から中に入ると、その車両は誰一人乗つていなかつた。

「おおつ。」

一車両を独占する事など生まれて始めてだ。小声で歎声を上げた後、隅つこの席に腰掛けた。

パッと顔を上げると、いつの間にか乗り込んでいた黒ずくめの男が向かいに座つている。いくらでも席があるので何もこんな近くに座るとは…。

小窓から見える隣の車両にも誰もいないうに見える。少なくと

も今の駅では、一人しか居なかつたはずだ。

「まさかなあ。」

この電車に俺とこいつしか乗つてないと思えるほど人の気配がない。ついでに言えば、別に恨みがあるわけでもないが、こいつには早々に降りて頂きたいものだ。

扉が閉まつて、進行方向と反対側にかかる重力が心地よく体を押し始める。心なしかいつもより軽快に車輪が回つているように感じた。

窓から見える見事な満月。それだけで、この時間が永遠に続く事を願う。ガタンゴトンと電車に揺られる。いつもならこの揺れが眠気を運んでくるのだが、今日は少しつつもと違う景色や状況に興奮していた俺の瞼は軽かつた。

向かいに座つた黒ずくめの男は深く被つた帽子で表情は分からないうが、眠つてているように見えた。

「次は……。」

アナウンスが聞こえて次の駅が見えてきた。薄暗い灯りのホームには誰もいない。

「……ん？」

俺は、ここで始めて違和感を覚える。元々今日は違和感だらけの日であるが、それとは異質の雰囲気が車内に漂つていた。目の前の黒ずくめの男は相変わらず微動だにしない。

電車がホームに到着して扉が開く。ホームに漂う不気味な空気が車内に流込むと、温度が少し下がったのか、少し身震いした。無人のホームは薄暗い電灯のみが地面を照らしている。

それにしても駅員すら1人もいないのは妙だ。この路線には無人駅は存在しないはず。ましてや終電が過ぎる時間というわけでもないし……。

俺の疑問をよそに電車の扉は閉まつて再び振動と少しの重力が体に圧し掛かってくる。ウーンというエンジン音が耳に入ると窓の外の景色が少しづつ流れ始めた。

それから何駅か通り過ぎる。途中の駅でも様子は何も変わらなかつた。降りる駅は決めていなかつたもののどの駅でもとても降りる気にはなれない。とは言つても環状線というわけではないので、いつかは降りる必要があるのだが、終電までに決めればいいし、終電まで時間もある。

流石に通勤と逆方向の景色は見慣れない事もあって新鮮な風景だ。次々に新しい情報が頭の中に流れ込んでくる感覚は痛快なものがあつた。それだけでもこうしている甲斐があるのかもしれない。さつきから何も変わらないのは、夜空にくつきりと浮かぶ月と、目の前で全く動かない黒ずくめの男だけである。こいつは一体どこで降りるつもりだろうか。もしかしたら、寝過ごしているのかもしない。周りには誰もいないし、一度声をかけてみようか。いや、そこまで親切にしてやる義理もないか。

こうして迷つていても幾つかの景色と駅が流れていく。俺はいつの間にか瞼が次第に重くなっているのに気づいた。次第に思考が空白に近くなり考えが纏まらなくなつてくる。やがて俺は、心地良い揺れの中で、少ない荷物を抱き抱えたまま意識を失つた。

「うーん。」
どの位の時間が経つていてるのか分らないが、俺が目を開いた時は、眠る前と変わらぬ状態だつた。月も男も相変わらずそこにあつた。そして、またしても見知らぬ駅に停車する所だつた。
「次は終点…。」

駅名が告げられる。確かにそこは俺の知つている路線の終点の駅名だつた。車両を見回しても俺と黒ずくめの男以外には誰もいない。こんな事があるのだろうか、いくら何でも。

俺は今更置かれた状況の異常さに気づいた。

しかし、開いた電車の扉は今度は不気味に口を開けていつまでも閉じようとしない。普通ならここで車内点検の駅員が何人か入つて

きて、車内で寝過ごしている人や、棚に置かれた漫画、床に転がっているビールの缶などを片付けていく時間だ。

俺は何度か仕事の疲れで寝過ごしてこの終点の駅まで来た事があるから知っている。

いつまで待つても人の気配はない。ホームを照らしている電灯もいつものものより薄暗く感じる。仕方なく俺は電車を降りた。

背後に感じた気配に振り返ると黒ずくめの男が席を立っていた。そいつは、俺と同じ出入口から電車を降りてホームのベンチに腰掛ける。

「あ、あの…」

俺は男の前まで言つて思わず声を掛けた。現在の状況への焦燥感と、一応同じ時間を共有した事がそうさせたとしか思えない。しかし、別に何の質問も思いつかずに軽く追い込まれた俺は思わずどうでもいい事を呟いてしまう。

「だ、誰もいませんね。」

「…」

沈黙が帰つてくる。まあ、そうか。俺も知らない人にそんな事を話しかけられてもそうするだろう。

「困ったな…。」

時刻表を見ると引き返す電車は十分後に出るらしい。これを逃すと明日の始発までここに釘付けにされる事になる。俺は、迷った挙句、ホームのベンチに座つて始発電車を待つことにした。もつと遠くまで行ける路線に乗り換え可能な駅まで行くしかない。この終点駅からは何処へも乗り換える事が出来ないからだ。

この男もここに座つているところを見ると、俺と同じ様に寝過ごした口だろう。今度は寝るわけにはいかないのでとりあえず時間潰しに携帯電話を取り出した。

「ん？」

そこは圈外だった。立つてホーム内をウロウロしてみたが、電波が受信される気配はない。

「まったく、何て所だ。」

ホームから見える景色は、背の高い芒が何処までも広がっている。民家らしきものがポツリポツリと見えるが、灯りは灯っていない。まあ既に寝ていてもおかしくない時間ではある。

ホームに唯一あつた自動販売機でジュースを買う。ガタガタとう音が周りの静かな空気に吸収されていった。

電光掲示板に示された出発時間が近づいてきていた。新たな電車が来る気配はないので恐らく、さつき乗っていた電車がそのまま引き返しで走り出すのだろう。行き先の表示がいつの間にか変更されていた。

車内の灯りはずつとついたままだつた。まあ、ここまで来たら考へても仕方ない。どうせ、俺とこいつしか乗つていないので見て、車内清掃するまでもないと判断したから誰も出てこなかつたんだろう。

しかし電車が走つていたという事は運転手がいた筈である。先頭車両に乗つっていたのだから一旦降りるか反対側に移動する時に見かけそうなものであるが、少なくとも俺は見ていない。

「すいません。何か変だと思いませんか？」

俺は思わずまたしても黒ずくめの男に話しかけてしまう。男は、今度は顔を上げて一応俺の方を見たが、ただそれだけで相変らず返答は帰つてこない。俺は乗り過ごすと大変なのでとりあえず一礼して電車に乗り込んで席に座る。

それとほぼ同時に、まるで俺が乗り込むのを待つていたかの様に扉が閉じた。異様な気配で動き出す電車の中をゆっくりと先頭車両に向かつて歩き出す。

最後尾から隣の車両に移るが、そこにはもちろん誰もいない。次々と車両を乗り移り前へ前へと進んだ。ここまで無人な電車は本当に初めて乗つたのかもしれない。

やがて行き着く先まで辿り着いた。最後の繋ぎ田を渡つて先頭車両に入る。

「あ…。」

一番前の席に腰掛けた黒ずくめの男。こんな服装は一人といまい。
「あんたさつきの…」

思わず指差して話しかける。男は面倒くさそうに顔を上げてこちらを見たが、それ以上は何も言わない。どうやつて乗ったんだ？
俺が乗り込んで扉が閉まった時にはまだホームにいたと思ったのだが、しかも先頭車両まで来る時間は絶対に無かつた筈だ。

頭の中がグルグル回る。そんな時、不意にホームへの扉が開く。
しかし、今の俺にはそんな事よりカー テンの向こうの運転席の方が気になる。黒ずくめの男の前を通り過ぎて運転席のカー テンのかかつた窓に耳を付けると、力チ力チと何かのスイッチもしくはハンドルを操作している音が聞こえる。

傍らに運転席に入る扉がある。ガチャガチャとノブを捻るが、鍵が掛かっているようだった。

「すいませ～ん。」

不安に駆られた俺は窓をドンドンと叩いて呼びかけてみた。しかし、窓の向こうからは何の反応もない。運転中だからだろうか…。

仕方がないので次の駅に到着した後、再び同じ様に呼びかけてみるが、電車が駅に停車している間も何の反応もない。背筋に冷たいものが走り、ホームへ飛び出そうと、そちらを向くと丁度閉まつたところだった。

やむを得ず黒ずくめの男の向かいに座る。そしてもう一度周りを見回した。いつもの雑誌の広告がぶら下がった車内には異世界的な雰囲気はない。ただ、そこに流れる空気は冷房もついてないにも関わらず肌を刺す。

目の前の黒ずくめの男に対してもう少し怒りすら覚えてきた。が、いくら睨み付けても帽子の奥の目は呆然と床を眺めているだけだ。

「…あんた、何か知ってるのか？」

俺には人に話し掛ける事自体が勇気がいる事だが、この時ばかりはそもそも言ってられず、何の躊躇いもなく男に話し掛けた。

俺には人に話し掛ける事自体が勇気がいる事だが、この時ばかりはそもそも言ってられず、何の躊躇いもなく男に話し掛けた。

「…」

「さっきから何なんだよ。俺はどうしちゃまつたんだ？」

生まれてこの方あまり感情を表に出した事はない俺がいつしか黒ずくめの男に詰め寄る姿は我ながら似合わないと頭の片隅で思う。

「…」

何か言えよ。ん?、待てよ、話せないのか?

それならばとポケットから手帳とペンを出して質問を書きなぐり、そいつの田の前に翳した。

「こには何処なんだ?」

あまり綺麗な字ではないかも知れないが、言葉が分かれば普通に読める筈だ。しかし、そいつは興味なさそうに田線を下にそらす。字も読めないのであれば、完全にお手上げだ。もしかしたら俺は全く違う異世界に迷い込んでしまったのだろうか?

「くそつ…」

俺は歯を食い縛りながら男の向かいに腰を下ろす。絶対に次の駅で降りてやる。

流れていく景色に俺は奇妙な事に気がついてしまった。

「月が…」

あれだけ煌々と空にのさばっていた満月が何処にも見当たらない。背後の窓も振り返って覗いてみたが、星一つ見当たらない。始めは曇っているのかと思ったが、目を凝らしてもそろは見えない。

更に悪いことに気づく。やたら駅間が長くないか?、時計を見たが、いつの間にか見事に壊れていて、既に時間を刻んでいなかつた。やけに電車のスピードも速い気がするし、外の風景にも生気が感じられない。

「…」

突然に眠気に襲われた。さっきまでの興奮の反動だろうか。目的の駅まではまだ数駅あつたので、大丈夫だろうと、重い瞼に逆らわずにそのまま眠ってしまった。

意識は起きたが目は開かずにいた。数秒ばかり眠る前の状況を思い出そうとする。ふと肩が誰かに触れて目を見開いた。太陽の明るい光が不意打ちで目を突く。

「え？」

キヨロキヨロと周りを見回す俺に、左右の席に座っている人や目の前に吊革を持つて立っている人達が不審者を見る目を向けている。普段の俺なら縮こまってしまうのだが、眠る前の状況を思い出した今となつては逆に周りに同じ目を返す。

「…夢落ち…？」

誰にも聽こえない位のボリュームで呟いてみたが、手に持つたりユックの中に終点駅で昨日買つたジュースのペットボトルがあるのを見て夢ではないと判断した。

周りを見るとどうやら何時もの通勤電車の風景だった。寿司詰めの車内は閑散とした無人電車とは対称的に熱気に包まれていた。

どちらを見ても人、人、人。それが嫌で逃げ出した俺には地獄絵図に見える。降りようにも人を搔き分けて降りるには少し勇気が必要だったが、とにかくここから出なければと席を立つて扉に向かった。

「ふはっ…」

海底から陸に上がつた様な深い深呼吸。見慣れた景色は職場の駅だとすぐに俺に気づかせた。俺と同時に降りた何人の人が狭いホームにひしめき合い、階段とエスカレーターに並んでいる。朝の一番混みやすい時間だ。この人の流れに乗つてしまつたら、せつかく逃げ出した空間に戻されてしまう。

根拠は無かつたがそう思つてしまつたので隅つこのベンチに腰かけて、詰まつて いる行列の方をボーッと見ていた。

突然に雷に打たれた様な衝撃が体を貫いて硬直する。

「あれは…」

見慣れた後ろ姿だ。見慣れたもなにもスース姿のその男は人混み

に紛れながらも軽快に階段を上がっている。その肩幅、髪型、スツの色、少しよれた鞄、どれをとっても、俺自身が良く知っているものだつた。

世の中にはよく似た人が三人はいると言うが、まさか…。悪い予感に捕らわれながらも、俺は自然とベンチを立ち上がって人混みに紛れ込んだ。

その背中を一定の距離で追いかけている間、頭の中は真っ白になつていた。何故追いかけたのか、その根拠すら曖昧なまま足は前へと進む。

駅の改札をぐぐるそいつを追いかける。どう考へても見慣れた通勤路を通りて会社に向かっている。しかし、それまでの道のりの風景は、微妙だが何かが違つていてる。

ビルの合間をぬつて進んでいくと、見慣れたビルが見えてきた。どう見ても俺の会社だ。前を歩く追跡対象は俺には一度も気づかず、に早足でビルに入つていった。

このビルは少し妙な造りになつていて1階入口からエレベータまで長い1本道の廊下になつていて、あまり大きなビルではない為に、受付などというものはない。俺はビルの入口からそいつがエレベータに入る所までをはつきりと目撃。エレベータの扉が閉まる直前男が振り向いた。

「！」

その顔は初めて見るものではない。毎朝、顔を洗う時の鏡等で見る自分の顔だつた。少し雰囲気は違つたが、いくら物忘れが酷い俺でも自分の顔を見忘れる事はないだろう。

「何なんだ？」

思わず一人で呟くが、それについて解説を加えられるわけはなく、いくら考へても分らない。その場に十分程立ち廻くした後で俺はとりあえず近くの公園に移動した。

公園では、中央の噴水の周りで集まってきた鳩に餌を与えていた老人や、乳母車を押している母親など、良くある景色が広がっている。昼休み時には、近くのオフィスから色々な人が押し寄せて憩いの場として活用されている公園である。

しかし、あんな体験をしてしまった俺には、ここが夢の世界に思えてならない。ふと目を覚ますと、あの電車の中でリュックを抱えて座っているのではなかろうか。そんな期待感だけに支えられているような状態だ。

「これからどうしようか…。」

少し腹が鳴る。そう言えば、朝飯も食べていない。とりあえず、この腹を何とかしないと思考回路もろくに回らない。ふと、立ち上がるが、公園の入口から数人のスーツ姿の人々が公園内に入ってきた。自分の時計は壊れていたので公園の時計を見る。しかし、「修理中」と書いた張り紙が目に入った。

入ってきた人達がお弁当を広げるのを見るどどんやら昼時らしい、幸いこのオフィス街に親しい友達などはいなかつたので、私服姿を見られたとて、さほど害はないのだが、問題は、自分の行動パターンからすれば、コンビニ弁当を持つて公園で食べるのが日課になっているという事だ。しかも、いつもの癖でいつもベンチには、今、まさに自分が腰掛けている。

別に悪い事をしているわけではないのに、俺は自然とベンチを離れて近くの木の影に移動した。天気は良く、土の地面にクッキリと映る木の影の中はとても涼しい。いつも通りのどかな公園の中では、俺だけが異物である様な空気感を出しているのが自分で分かる。

「む…。」

やがて少しすると予想通りに「俺」が公園に入ってきた。抱えたコンビニの袋は良く行く店のものだ。恐らく中身は、日替わり幕の内あたりだろう。何をこそそしていたのか自分でも分らないが、俺は本能的に身を隠した。ベンチから見て後ろ側に周り半身を出してこつそりと「俺」を観察する。「俺」は、俺の予想通りにいつも

のベンチの右端に座つてコンビニの袋を開いた。こちらからは背中しか見ないので、弁当の種類までは分らないが、確実にもそもそと食事をしている。

「さてと、どうするか…」

見つからなかつた安心感からその場に座り込んだ。だが視線は、「俺」から外してはいない。これから事を思案していると、ふと、ベンチの反対側、つまり左端に座つてゐるそいつに気づいた。

いつからいたのだろうか、弁当を持った「俺」が右端に座つた時には、確かにいなかつた筈だ。しかし、今は、シーソーのバランスを取るように、ベンチの中央から全く同じ距離の反対側に座つてゐるその人物にも見覚えがある。

「あいつ…。」

帽子から背中まで、たつた一色しかないその服装は、電車の向かいの席に座つていたあの男以外の何者でもない。何であいつがこんな所にいるのだ。

少しパニックになつた頭を整頓している間に、「俺」とその黒ずくめの男が何か会話してゐるのを見えた。「俺」は男の方を向いて何かを喋つてゐる。この距離では、声は何も聞こえない。自分と同じ顔を見るだけでも気持ち悪いのに、俺には近づいて何を言つてゐるのかを確かめる事などできなかつた。

「俺」は結構な剣幕で何かを男に言つてゐる。俺は電車の中での自分と男のやり取りを思い出した。

「あいつ、結局何も言わなかつたな。」

恐らく今も俺の言葉に対する返答は何一つ返つてきていないのでろ。暫くはそんなやり取りが続くと、「俺」はベンチを立てて公園を立ち去つてしまつた。

それを確認すると、俺はベンチへと近づいて男の正面に回り込む。やはり、あの電車の男だ。

「お前は、何者なんだ？」

「…」

男の沈黙には慣れてきた。目立つのは嫌だったので、俺は大きく深呼吸をして心拍数を下げる。そして、ベンチの「俺」が座つていた所に腰掛けた。

「ここは…、何処なんだ?、こいつは夢じゃないのか?」まるで人形に向かつて話している様に虚しいが、この男が何か知つている事は間違いない以上、こいつから真相を聞くしかない。

「何で俺に付きまとうんだ?」

質問ばかりで会話のバランスが悪い。俺は、喋るのをやめて考えた。夢であれば、時間が経てば目が覚めるだろう。

「もういいよ。」

俺は男から聞き出す事を諦めてベンチを立ち上がる。しかし、横をふと見ると、男は既にそこにはいなかつた。こういう不思議な事でも慣れはあるものだ。あいつが只者でない事は間違いない。そしてこの世界は、俺がいた世界ではない。確信はないが、これまでの状況から見て間違いないと思う。問題は、ここから帰る方法だ。

「帰る?…」

俺は空を見え上げて少し笑つた。帰る…か。

ほんの昨日まで現実の世界からどれだけ遠く離れるかを考えていた俺が、今度は元に戻る方法を考え始めている。今、まさに最初の願い通り、遠くへ来た筈なのに…。だいたい元の世界に戻つたとして何があるというのだ。

俺は、リュックに入つていたペットボトルを取り出して一気に飲み干した。温い炭酸が刺激する喉は、この世界がリアルに存在している事を俺に教えていたようだった。

「げほつ…。」

乾いた喉に慌てて流し込んだので少し蒸せてしまった。

「ふう…。」

口を拭つて顔を上げる。とりあえず、もう一人俺がいるという事は、ここは本来俺がいる場所ではないという事だ。傷心旅行的な軽いサボりだった筈なのに、とんでもない事になつた。

「さて、これからどうしようか…。」

思案しながら公園を出ると、不意に目の前の人だかりが見えた。数十人の人達がビルの前で何かに群がっている。

「？」

それどころではないと通り過ぎようとしたが、ふと、そのビルが自分の会社のビルだと気がついて足を止めた。

「何だ？」

「自殺か？」

人々が口々に唱えているのを聞いて、脳内に電撃的に悪い予感が広がる。

「ち、ちょっと、すいません。」

人混みを掻き分けて群集の中に入る。しかし、狭い道に予想以上に集まっている為に中々体が前に進まない。少しづつ体を前のめりにしていくと、人の隙間から倒れている「俺」の顔が見えた。俺は目を見開いて、人混みを掻き分けていた腕の力が抜けた。

「どけよ！」

突然何ものかに突き飛ばされて、群集からはみ出す。

人混みから何とか抜け出すと通りの向かいに黒ずくめの男が立っているのが見えた。俺はこの時に何度も見たその姿で背筋が寒くなる。男は無表情のままだつたが、俺には笑っている様に見える。

ツカツカと詰め寄つて男の表情を覗き込んだ。

「説明してくれ。って言つても無理か。」

一人完結した俺はそのまま男から離れた。背後からは救急車のサイレンが聞こえる。

電車に揺られていつもなら座つたら眠気に襲われる筈だが、この時ばかりは興奮で目を開いたままだつた。特に何をというわけではないが、電車から見える景色を睨み付けている。この時の俺の顔は恐らく笑う子も泣く顔をしていたのだろう。

「次は～」

アナウンスが流れ、席を立つ。周りの数少ない着席している客はほぼ全員が居眠りしていた。

ホームに降りると、まず周りの様子を見回す。駅員が笛をふいているいつもの駅のホームだった。それでも警戒を解かず、改札へと向かう。

正直電車に乗っている間、気が気ではなかった。普段なら仕事をしている昼間の時間帯とはいえ、今の俺の身の回りでは何が起こるか分からぬ。

家路を辿る途中で、時々振り返る。あの黒ずくめの男が、何処からか俺を見ている様な気がしてならない。駅から家までの街並みも微妙に何かが違っている。

しかし今の俺には、そんなことはどうでもいいことだ。ここが既に別の世界だということは間違いはなさそうだ。今の俺に必要なのは元の世界に戻る手段を探すことだけだ。その手掛かりになるかならないかも分からぬまま、さつき死んだ「俺」の家に向かっている。微妙には違っていても、大まかな場所は何も変わっていないかったので、あつさりと家に辿り着く事ができた。正確には自分の家ではないのだが、アパートの階段を登る途中に見慣れたおばさんとすれ違う。

「あれ？もう会社終わったのかい。」

「いや、気分悪くて早退したんで…」

「そりゃお大事に。」

普段は声など掛けられないはずなのだが、こちらの俺は少し社交的なようだ。

ドアの前に立ち、鍵穴に荷物から取り出した鍵を差す。駄目元でとつた行動だが、ガチャリと音がして、あつさりとドアは開いた。

中に入ると、家具の配置や匂いも微妙に違っていた。こっちの俺は少し整理整頓が出来るようだ。

物の配置が変わってても、俺本人であれば癖や考え方には大差はない

はずだ。俺は机に座つてそこにあつたパソコンのスイッチを入れる。パスワードでロックされた画面が表示されると、何の躊躇いもなしに自分の使つていたパスワードを打ち込んだ。

いつもの当然の流れの様にホーム画面に切り替わる。さつき死んだ男が「もう一人の自分」であるという確信がますます募つていつた。更にデータを探つてみる。さすがに一言一句同じデータというわけにはいかないが、幾つかのテキストファイルを開いてみると不気味なメッセージじみた文字が踊つていた。

職場や自分の周りに対する不平不満、まあ全部読まなくとも書いている内容は予想がつく。

暫くデータをザッピングしていると「あれ?」と思つ様な不可解な日記が目に入つてきた。当然俺自身はこんなことを書いた覚えはない。

「今日もアイツが後ろからついてくる。死神の様な黒ずくめの男だ。いや、実際に奴は死神なんだろう。朝に駅の前にいたかと思えば、電車に乗つてもいのに会社の最寄り駅に俺が降りた時には出口に立つてゐる。」

背中が少しひやつとした。思いきり身に覚えのある体験だ。どうやらアイツは「俺」につきまとつていていたらしい。それから暫くは黒ずくめの男への恐怖と苛立ちが綴られてゐる。同じ事をやられたら同じ様に書いていただろう。

日記も最後の方に差し掛かると、「常に何かに追いかけられる夢を見る」や「何処からか落下し続ける夢を見る」など、かなり追い詰められた表現が増えてきた。そして最後のページを開く。

「何もかもうまくいかない。遠くへ行きたい。」

同じだ。俺は今遠くに来ているはずなのに、現実に戻された様に不快感が漂つ。同じ遠くでも、それを死と解釈した事はない。日付を見ると、どうやら今朝書いたものらしかつた。

ファイルを閉じて窓の外を見ると、夕焼け空が赤々と燃えている。

「俺はどうすりやいいんだ。」

無論何処からも返答はなく、静まり帰つた部屋の中で侘しくなる一方だつた。振り替えれば、あの無感情な目がこちらを見ていると思つと、後ろを向くのも勇気がいる。

ここにいても何も始まらないとばかりに早足に外に出た。

周りを見渡すが、誰もいない。人通りが少ない時間帯とはいえ少し様子がおかしい。あの男は何処から俺を見ているのだろう。俺の足は自然に駅の方に向かつて歩き始める。

1分毎に暗くなる街並み、長い様で短い駅までの距離を歩き切る。居酒屋などの看板には灯りが灯つているにも関わらず人の気配がないという異常な事態に俺は戸惑うばかりだった。

駅に入るとますます異世界への扉を開いた感があった。そこは無人で、あの黒ずくめの男すらない。今俺は世界のどの位置にも立つていないのでだろうと思える程に孤独感が襲い掛かる。

既に外は日が沈んでいた。駅のホームは改札からは見えない位置にあるが電車が走っている音は聞こえる。まるで誰も乗っていない様な軽快な車輪の軋む音が。

「はつ…」

背筋に寒さを覚えて俺は振り返る。そこは、黒い影が立つている。「またか。俺に何の用だ？」

「…」

黒ずくめの男は相変らず沈黙を守つていた。この先に会話が始まることとは夢にも思つていないが、口に出さずにはいられない感情が俺の中で渦巻いている。

「俺は…死にたくない。」

そう呟くと同時に男は振り返つて夜の暗闇に溶けていった。遠ざかる背中は、寂しそうにも見えたし、泰然としていた様にも見えた。まるで絵画の一部の様に、夜を描いたキャンバスに黒い絵の具を一滴垂らしたような男の姿を完全に見えなくなるまで俺は呆然と眺め

ていた。

振り返つて階段を上がる。そこにある僅かな光が導くように俺はホームへと向かった。まるで俺を待っていたかの様に、丁度電車がそこに止っている。俺は少し迷いながら、ホームにあつた自動販売機で炭酸のジュースを一本買つて電車に乗り込んだ。

そこには勿論誰もいない。発車のベルが鳴ると、走り出した電車の振動で少しバランスを崩した。ヨロヨロと先頭車両まで歩いて一番前の席に腰を降ろした。空には星も月を見えない。しかし、電車の揺れは否応なしに俺の瞼を重くする。

「帰つたら…今まで通りで、いいか…」

自分でも何故帰れると思ったのかまるで分らない。何の根拠もない安心感で更に瞼が重さを増す。俺の呟きは誰にも聞こえないはずだ。次に目覚めた時には窓から月が見えている事を期待して俺は静かに目を閉じた。

「おい、起きる。出発する時間だ。」

あまりに返事がないので私はテントを捲つて覗き込んだ。仲間は寝袋の中で目を閉じてじつとしている。動きがないのでとりあえずテントに入り頬を叩いてみた。普通なら飛び起きて顔が紅潮するはずだが、人形の様に生氣はなく閉じた目が開くこともなかつた。

「おい、どうした？」

他の仲間が背後でテントを捲つて覗き込む。

「駄目だ…。」

「え？」

私の言葉が耳に届くと、仲間は驚きの表情をする。それがテントの外で待っている他の仲間に届くと一同動搖し始めた。私は物言わぬ屍となつた仲間を一旦降ろすとテントを出る。

「駄目つて…まさか…。」

私の目の前には3人の仲間が、真剣な表情で暗い顔をしている私を覗き込んだ。皆言葉にしなくても最悪の事態を予想している。そして、それは的中していた。

「駄目だ。もう息をしていない。」

「心臓マッサージは？、昨日はあんなに元気だつたんだぜ。」

「そうだ。食欲のない俺の分の携帯食料まで食つてる程だったのに。」

「皆口々に私に蘇生を薦める。」

「駄目だ。硬直具合からいっても、もつ息が止つて数時間は経つてる。蘇生は難しいだろうな。」

私の言葉に皆、まだ何か聞いたそうだつた口を閉ざす。他に出来る事はないかと頭を回転させるが、我々に出来る事は何もありそうにない。遺体を担いで行くわけにも行かず、さりとて手厚く葬る時間や道具もない。

「どうするんだ？」

その言葉は誰の頭にも浮かんでいる。

「引き返そう。ここらが限界だ。」

私ではない誰かがそういう。多數決では間違いなくその意見が採用されるはずだ。しかし、私は一同を見回した後、静かに口を開いた。

「いや、このまま進む。」

「は？」

全員が横一列に同じリアクションを取つた。

「正気か。確かに食料や道具の問題はない。しかし、この天候でもう10時間も足止めを食つてるんだ。様子を見て風が落ち着いたら、下山すべきだ。」

彼の方がまともな意見なのは十分に承知している。しかし、私は必ず頂上に行かなければならぬ理由があった。

「降りたい者はそうしてくれ。私に付き合う必要はない。」

私の中でも苦渋の決断だつた。本当は続行する事を説得しなければいけないのだが、死者まで出してしまつた以上、私に強く引き止める権利などあらうはずがなかつた。

「おいおい、待つてくれ。何であんたそんなに無理するんだ?」、一旦引き返してまた昇ればいいだろ?、今回は運がなかつたんだ。」

山の天氣は変わりやすいなどと俗に言つが、今回のそれは登山経験豊富なメンバーをかなり戸惑わせた。1日置きに正反対の天候となるだけでなく、常に吹き続ける強風が我々の気力と体力を削り続けた。そして遂に、犠牲者が出てしまつた。残つている者達も既に限界を感じているのは仕方のない事だ。

「…運か…。」

俯いてにやけている私をメンバーは蔑んだ目で見下ろすと、そのうちの1人が不意に立ち上がる。

「分つたよ。俺は降りさせてもらう。死にたくないからな。」

もう1人のメンバーで一番若い者が続いて立ち上がる。

「僕も…悪いけど…。」

2人は自分のザックを背負うと風が止むのを待つ為にその場に座り込んだ。今朝も強風が吹き荒れていたが、一時程ではないし、霧のようないつも風に飛ばされて晴れかけていた。

最後の1人が私の横に座りなおして肩に手を置く。

「どうしても、今回じゃないと駄目なのかい？」

「ここまで来て戻ることはできない。次はいつになるか分らないからね。」

私の力強い答えに最後の1人が諦めた様に溜息をつく。

「君が頑固なのは知っているが、今回は少し譲つたらどうだい？」

嗜める様に静かな声は風に乗つて私の耳には半分ほどしか届かなかつたが、それでも十二分に意図は伝わった。

「残念ですが。」

「そうか。」

最後の1人が、他の2人と同じ様にザックを背負うと、その途端朝靄が晴れて風が弱まつた。他の2人も立ち上ると私を振り返る。「これが最後のチャンスだぞ。君が頂上に辿り着けないとは言わない。しかし、復路の事を考えると生きて帰ることは難しいかもしない。生存確率を考えれば死に行くようなものだ。それでも行くのか？」

私は静かに首を縦に振る。

「分つたよ。もう何も言わない。好きにするといい。」

「それじゃ。」

「幸運を。」

3人のメンバーはそれぞれ軽く手を上げて、そのまま山の斜面を下り始めた。晴れてみると見晴らしのよい場所で3人の背中が小さくなつていいく。

「さてと…。」

私は遺体の寝袋をその場に放置してザックを背負う。出発前にほんのささやかな黙祷を捧げて、3人とは正反対の方向へ重力に逆ら

つて歩き始めた。

「ん？」

ふと前を見ると山肌に晒された幾つかの岩のうちの1つに誰かが座っている。そんな馬鹿な、前人未到のこの山に我々以外にも誰かが？、いや、その存在よりも私の目を引いたのは男の格好だった。三角の帽子を深く被り、分厚いコートのようなものを着込んでいる。少しサイズの大きなブカブカの長ズボンに紐で縛るタイプの靴。およそ登山をするような格好ではない。

この格好でここまで昇ってきたのだとしたら、それだけで我々のこれまでの苦労を見下されているような不快な気分になる。

「…。」

私は一旦立ち止まって目の錯覚ではないかと、もう一度目を細めてその男を見直した。しかし、そいつは間違いなくそこに存在している。気持ちを落ち着かせる為に、腰にぶら下げたステンレスの魔法瓶を持って水分を補給する。しかし、それでもそいつの存在は消えなかつた。

男は目線の位置が分らない程に帽子を深く被っていたので私を視認しているのかどうかは分らない。しかし、間違いなく私の存在には気づいているはずだ。礼儀の面からもこのまま無視して通り過ぎるわけにはいかないだろう。私は遠くから一礼して男に近づく。

男は座つたまま全く動かずにこちらを見ているのかどうかも分らない。いや、もしかして死んでいるのかもしれない。確かに近づけば近づく程、男から生気が感じられない事が不気味に思えてくる。

「こんにちは。」

勇気を出して声をかけると男が顔を上げた。よかつた、どうやらとりあえず生きてはいるようだ。

「あの… いつからここに？」

男は何も答えない。

何なんだ…私が時々立ち止まって振り返るが、男はそれを気にする様子もなく一定の距離を置いてついてくる。別に何かをするわけでもないので、来るなども言えず、私は背中に不気味さを背負つたまま頂上へ向けて歩いていた。

しかし、何者なのだろう。見たところ登山の装備どころか、水筒一つもつていない。途中でなくしたとも考えにくいし…仲間割れでもして荷物を取られたのだろうか…。息一つ切らさずついてくる様子なので体力には自信があるのだろう。助けてあげたいが私の方も余裕がないし、第一意思疎通自体が困難な状況では、何もできない。

「あの…。」

私は思い切ってセカンドコンタクトを試みた。

「何処までついてくるつもりか知りませんが、一刻も早く山を降りた方がいいですよ。」

私の最大限の親切心だ。男に反応がないので、やむを得ず前に向き直り再び歩き始めた。

既にかなり空気が希薄になつており、息切れの間隔が刻一刻と縮まつてている。休憩を何度も小刻みに入れながら、頂上との距離を確実に詰めていく。

天気は快晴。上を見上げると青いキャンバスに吸い込まれそな程雲一つない空だ。太陽の日差しが冷えた空気と汗で下がつた体温を補完する様に照り付けている。今の瞬間は、この登山の中でも恵まれて充実した時間だった。あそこで帰つていれば味わえなかつたところだ。

周囲には人工物は見当たらない。それも、前人未踏である事の何よりの証だ。月にすら到達した人類も、この山のこの場所にはまた足を踏み入れていない。宇宙飛行士もこんな気分で月の地面に足を踏み出したのだろうか。今の私の一步は普通に街中を徒步する一步とは重みが違う。

真上に見える太陽が午後の始まりを継げている。山では午後から

の方が天気が崩れ易い。ここから何処まで進んで休憩を取るかというタイミングが何よりも大事になつてくる。背後について来ている黒尽くめの男も私と同じタイミングで休憩をとつているから体力的な事を心配する必要はないだろう。

というか、何故私が突然現れて勝手についてくる見ず知らずの人の心配をする事があるのだろう。妙な事になつたものである。

頂上に近づくにつれサングラス越しに見える山々の景色が私の不快な心を洗い流す。

頂上へ行くまでは少なくともあと1泊は必要だろう。無理をすれば登頂は可能だが、天気が崩れた場合に山頂近くで1泊するのは危険が大きい。半日ほどで頂上とベースを往復できる程度の距離で休憩する方がよい。しかし、地図には前人未到の頂上までの距離などが書かれているはずもなく。私は経験則で、最後のベースキャンプの場所を決めた。

例の男は私がテントを広げている間に近くの岩に座つて私の様子をじつと見ている。気にするなという方が難しい。どう見ても、テントなど持つていらないだろう。が、私のテントは1つしかないのでも貸すわけにもいかない。どうするつもりなのだろうと、時々男の方を見てみたが、特に何かをする様子もない。

男は岩肌に腰を降ろすとそのまま、また動かなくなつた。
少しだけ風が強くなつたように感じる。私には天候が変化する感触なのだと直ぐに分つた。

やむを得ず私は、黒尽くめの男に近づく。

「これから、天候が変わつて強風になります。下手すればホワイトアウトになるかもしね。私のテントが少し広いので、そこへ来ませんか。」

今までの男の態度から、もしかしたら言葉が分らないのではと心配もしたが、男はゆっくりと立ち上がつた。どうやら私の声は届いているらしい。

「どうぞ。」

私達はテントに入る。

「本当はお茶でも出したいところですが、生憎切らしてましてね。」

「…。」

男は沈黙で答えた。まあ、返答を期待したわけではないので良しとする。

バタバタとテントの幕が激しく揺れ始めた。予想通り風が吹き始めたようだ。私の予想では、このまま吹雪になるだろう。元々低かつた気温が更に下がつていてるからだ。

「それにしても、よくその服装でいれますね。」

男の格好はおおよそこの気温に耐えられるものではない。顔色一つ変えないのは、我慢強いのか気温を感じる器官が麻痺しているのか分らないが、見てるだけで身震いしてしまつ。

「…。」

男の表情からは喜怒哀楽の感情が全く読めない。

「本当はね。私も今朝まではパーティで登つっていたんですよ。」

別に沈黙に耐えられないわけではないが、私も丁度話相手が欲しかった所だったので1人で話始めた。テントを叩く風からすればどの道暫く動けそうにないからだ。

「そのうちの1人が死んでしまつてね。他の仲間は引き返す様に私に言つていたんですが、私1人がどうしても譲れなくて、こうしているわけですよ。」

「…。」

「どうして私がそう頂上に拘つているのか?」

「…。」

男からすれば、私の過去などどうでもよいのかも知れないが、私は構わず話を続けることにした。明日には、もう話すら出来なくなつているのかも知れないという危機感が私の口を動かした。

「十年前に私には友人が1人いたんです。そいつとは、学生時代から一緒にいろんな山に登つた。いくつもいくつも。私なんかより体力も技術もよっぽど優れていた。私は悔しくて努力しましたが、ど

うしても追いつけなかつた。この山の調査隊が公募された時には、勿論私達2人は応募しましたが、当然の如く選ばれたのはそいつだつた。」

私は記憶を引きずりだしながら一言一言言葉を紡ぎだす。最早男の反応などどうでもよくなつていた。

「何、本当か?、修一。」

俺は椅子から立ち上がり机を強く叩く。

「ああ、通知が来たんだ。だが一つ問題があるんだ。」

「問題?」

「出発は半年後なんだが……。」

「それがどうした。」

口籠る修一の肩を掴んで顔を近づける。

「いや、その、予定日がその頃なんだ。」

「そうか。奥さん元気なのか?」

「母子共に健康だよ。でもなあ……。」

一度山に入ればどの位の期間で戻つてこれるのかは分らない。最長の日数は大体決まつていて、前人未到の場所ともなれば、何が起こるか分らない。リーダーの判断により直ぐに帰つてくる場合もあるが、最悪の場合は数ヶ月程戻つてはこれない。

「一次調査隊の報告は俺も読んだが、最悪で3ヶ月程だらうな。」

「うん。俺もそう思う。上手くいつて登頂して戻つてくるとしてもそれぐらいだな。」

「最悪の場合は……。」

「おい、弱気になつて馬鹿な事いうんじゃない。」

「冗談だよ。分つた分つた。」

修一は席を立つて廊下へと出た。

「何処へいくんだ?」

「決まつた以上、準備しなくちゃな。来週の予行演習に参加するんだよ。」

「そうか。俺も行くぜ。」

俺は修一の後について行った。技術面でも体力面でもこいつに勝てた事は一度もない。悔しいが、今回選ばれたのは当然の選定だと思う。今度の本番は世界級の山なだけあって、予行演習といつても、かなり過酷なものだつた。俺にとつては本番さながらの予行に付き合わされた事によつて自分のレベルアップにはなつたのだが…。

それからの半年の体力造りは完璧だつた。別に俺は登るわけでもないのだが自分でもこのままこいつについていけるんじゃないかと思う位自分の体力も充実していた。

「それじゃ、気をつけて。」

「ああ。」

奴は奥さんから白いハンカチを受け取ると俺の方を向いて拳を突き出してくる。

「ちょっとそれ貸せ。」

俺は奴からハンカチを奪い取るとポケットからペンを取り出して一言書き添えて返す。

「それじゃお先に。」

「ふん。直ぐに追いついてやる。」

強がりを言いながら奴の拳に自分の拳をあわせる。お腹の膨れた奥さんと俺に見送られて奴はゲートを潜つた。

それから3ヶ月程経つたある日…

「おい。お前に面会が来てるぞ。」

「え？」

図書室で調べ者をしていた俺の肩に突然、友人が手を置く。

「面会?」

「ああ、何か子供連れの女だけど、お前まさか…。」

「馬鹿野郎。」

「まあ、冗談だよ。西口の受付にいるみたいだぜ。」

軽口を叩いて図書室を出ると西口へ向かう。その女性は子供を抱いてソファーに座っていた。俺の顔を見ると立ち上がりて一礼する。「ああ、生まれたんですね。すみません。あいつこよりしく言われていたのに、忙しくて。」

「いえ、それよりこれを。」

奥さんは一枚の紙を俺に手渡した。

「あいつ元気ですかね。」

俺は貰った紙を開きながら軽く聞いてみた。しかし、その紙に書かれた内容を見て口を開ざす。

「……」

「昨日、その手紙が届いて……。どうしたらいいのか分らなくて……。よく見ると彼女の目が真っ赤に腫れている。タベ泣き明かしたのだろう。」

「そんな。全滅つて。」

山岳隊と連絡が取れなくなる事はよくある事だ。天候や磁場の状態や無線が故障している場合もあり、我慢強く連絡を待つというのも常識の一つだ。しかし、2週間連絡が途絶えることは絶望的な事だった。予定通りなら既に登頂して下山を始めている筈だったが、誰一人戻つておらず、全滅の可能性が濃いといつ一連の説明が無機質に紙に書き並べられていた。

「くっ！」

俺は紙を床に叩きつけると壁に拳をぶつけた。

「あ、あの……」

「あ、ああ……すいません、取り乱してしまって。とにかく共通の知人に連絡して確認してみます。心配でしょうが、3日程待つてもらえますか。何かあつたら私の方から連絡しますので。」

「は、はい。宜しくお願ひします。」

奥さんは一礼して出口へ向かう。途中見えなくなるまで何度も振り向いては頭を下げる。この状態で3日も待てとは辛いとは思うが、俺のつてを使っても確かな情報を得るまでにはそれくらいは最低で

もかかるだろう。一番いいのは俺自身が現地へ向かう事かも知れないが俺にも仕事を空けるわけにはいかない。

その日は電話で現地とつながりのある友人に確認する様に手配するので精一杯だった。

数日後、俺の元に来た知らせは絶望的なものだつた。捜索隊が組織されて入山する事が決定した様だが、その目的は生存の確認というより、死亡の確認に近い意味合いなのだろう。元々組織された登山隊前二十名、誰一人戻つて来ていない。登頂してもしていなくとも既に予定下山期間を終えている上に全く連絡が取れないのであれば死亡の判断も妥当な事だろう。

俺は奥さんに連絡を入れると、捜索隊に入る様にコネをフル活用して手配する。しかし、それも何も実らなかつた。

「その時の捜索隊は何一つ見つける事が出来ずに成果はゼロ。山へのアタックも暫くは先送りになつた。今回の登山までの十年、この山に誰も近づいたものはいない。」

私は長い昔話を終えて顔を上げる。黒ずくめの男は先程と何も変わらない体制で座つてじつとこちらを見ている。

「退屈だつたかい？」

「……いや。」

男が沈黙を破つた事は驚くべき事だつたが、私は特にそれに触れずに話を続ける。

「あいつが『修一』がこの山の頂に立つたのかどうか、確かめたい。もし、それが確認できればそれを世間に発表してあいつは歴史に残る。そしてもし、あいつが辿り着いていなければ、私が初登頂を果たして、奴を追い抜いた事になる。」

「そうか……。」

男は納得したのかしていないのか男は一言言い放つた。

テントを打つ風が少し収まってきたのか、さつきまでバタバタと音を立てていた壁のざわつきが収まっていく。

出口から外を覗くと雲が晴れていた。しかし既に日没間近の時間帯だったので、私はこのままここで休むことにした。

「今日はこのまま休んで夜明けとともに出発する。それでいいな? 男は私の言葉を聞いているのかいなか既に目を閉じていた。よく考えれば私が気を使う必要はないのだ。私は考えるのを止めて目を閉じた。

田を開くと既に薄つすらとした日光がテントの幕から漏れ出している。何処か遠くから小鳥の泣き声が聞こえてきそな程、安定した温度だ。テントの中には私しかいない。あの男は何処に行つたのだろう。

私の話を聞いて諦めて下山したのだろうか。

テントの出口を捲つて外に出る。すっかり雪は溶けて、昨日の視界が嘘の様に晴れ渡つていて。薄い空気が肌寒さを訴えていたが、私はそれより、目の前に見えた風景に神経が集中した。

「ま、まさか……。」

もう少し距離があると思っていたのだが、まさか、こんな近くにあるとは……。

歩していくば百メートル程だろうか。澄み渡つた空をバックに間違いなくその頂は存在した。いや、頂そのものがある事は分つていたが……。

「あいつ……。」

頂に立っている旗は間違いなくその地が前人未到ではない事を物語つていた。私は歩いて旗に近づいていく。その旗には何の模様もない。そしてそれはかつて修二が出発する時に持つていたハンカチだ。旗、いや、ハンカチの隅にサインされている修二の文字は間違

いなく奴の筆跡そのものだ。

「そうか。やっぱり私は彼には追いつけなかつたのか…。」

空を見上げて大きく深呼吸をする。たとえ初ではなくとも一番高い所というのは気分がいいものだ。

私は周辺の山々を見下ろす。ついでにあの黒ずくめの男も探したが周辺には誰もいない。

「ふふふ、こんなに近いんだ。私が2番目ではなくて3番目になつてしまつたかもしれないな。」

本人がいなのでは既にそれを確かめる術はない。しかし、今の私には2番目だろうが3番目だろうが、そんな事はどうでもいい事だ。

「ん？」

ふと下を見ると地面を掘り返した後を見つけた。私はしゃがんでその土を少し掘つてみた。土質が硬く中々てこずる。地質調査の為に誰かが掘り返したのだろうと思つたが、指に何かが当たつた。

「何だ？」

石ではない。掘り返してみると何かカプセルのようなものだつた。修一か誰かが何か埋めたのだろう。と言つても、ここに来た人物は限られるが。とりあえず取り出したカプセルを開けてみた。特に鍵が掛かっていたわけでもないのでそれはあっさりと開いた。

「これは…？」

中に入つていた数枚の紙。広げると中には私の国の文字で何か長文が書き綴られていた。その筆跡は間違いなくハンカチのサインと同じものだ。

「手紙…か？」

「この手紙を君が受け取る事を願つてここに残す。まず、子供に会えない事は残念だが、仕方ない。それより、君がここに来たという事は、既に死神に会つてていると思う。」

「死神…？、何の話だ？」

「俺達は、登り始めて2ヶ月程は順調だつた。しかし、途中で原因

不明で1人仲間が死んでしまった。他の者達は下山する事を主張したが、俺にはどうしても頂が直ぐ近くにあるような気がしてならなかつたからそれに反対した。食料問題や他の者の体調がすぐれないのであれば仕方ないが、奴等はただ仲間の死に怖気づいただけなのだ。

「…相変らず頑固な奴だな…。」

私は苦笑いしながら手紙を読み進める。

「仲間割れをして俺は山に残つた。そして食料を持って仲間と袂を分かつた。俺の計算では歩行で1日以内に辿り着ければ、多少の足止めを食つても必ず下山できる計算だつた。そして、思い通り、頂に向かつて半日後、奴が突然現れた。そいつは上から下まで黒一色の服を纏つて岩肌に座つてこちらを見ていた。山の麓に住む民族に伝わる死神の姿そのものだつた。昔から、山に近づくものに死を与えるという伝承を聞いた時には、お化けなんて信じた事もない俺でも少しば背筋が寒くなつたもんだ。」

「伝承？」

そんな事もそう言えば聞いた事があるな、ただ私はよくある話だと記憶からすっかりそんな事は削除していた。黒一色の服装…、この地にそんな格好で現れた不自然さには勿論違和感はあつたのだが、まさか…。しかし、死神だと考えると説明はつく。いや、非現実と人は思うだろうが、山での過酷な出来事も私達には同じような非日常だ。

「しかし、奴は特に何もしなかつた。俺の後ろからついてくるだけだ。俺はそれに慣れてしまい。話し相手として、利用した。そして俺は遂にここに辿り着いた。俺は暫く、この素晴らしい景色を堪能した。ここから見える景色、こここの空気、そしてこここの土、その全てが素晴らしいものだ。唯一の気がかりはここから下山する体力が残つていらない事だ。君がこの手紙を見ない事を祈る。」

「もう、見てるよ。」

俺は咳きながら最後の一枚に目を落とす。

「もし君がこの手紙と死神を見ているのなら、それは残念な事だ。助かるかどうかは分からぬが、一刻も早く山を降りるんだ。ハンカチは形見として妻と子供に渡してくれ。」

手紙の最後の方の文字はかなり乱れていた。修一の奴がどういう気持ちでこの手紙を書いていたのかが、伝わってくるようだ。少なくとも山にいる間の奴は誰よりも冷静な奴だった。

私は顔を上げて周りを見渡す。しかし、死神は見当たらない。昨日まで確かに私はテントの中に死神がいたはずだ。

「早く降りろか…。だが、私は目的を達成したんだ。ここで死ぬのも悪くない。」

ふと顔を上げた俺の目にハンカチがたな引いている。

「あ…。」

奴のサインの少し上に消えかけた文字が不意に浮かび上がった。それは十年前に私が彼に送った一言。

「生きて帰つてこそ達成。」

その文字は確かに今までそこになかった。安物のペンで書きなぐつたその文字は風雨に晒されて消えていた筈だったのに…。

「…分かつたよ。」

まだ修一はそういう意味では何も達成していない。生きて帰つてこそ達成。昔読んだ本で誰かが言っていた言葉を何気なく書いた。それが今やつと自分の血肉になつた気がした。

そうだ。ここで私が生きて帰れば…。あいつの夢、いや、私の夢でもある目標が達成できる。いつか誰かが達成するかもしれないが、今、私がその切符を握っているのだ。まだ、食料は十分にあるし、まだ体力にも少し余裕がある。天候と雪崩などまだ危険は十分に残されているが、生還できる可能性は高い。

「やればいいんだろ！」

私は誰に言うともなく呟く。いや、あの消えた文字を浮かびあがらせた修一の魂はきっとここにいるはずだ。

「一つだけ…。悪いけど、このハンカチはここに残していくよ。君

が行きで私が帰りとはいえ、ここに辿り着いた証だからな。代わりにこの手紙を貰っていく。」

俺は手紙をポケットに入れると後ろを振り返った。

「……」

そこには、死神が無表情な目をじらじらに向けていた。

「もう、あれから二十年か……。父さん。」

若者は、頂上に刺してあつたハンカチを手に取ると、その片隅のサインを見て涙ぐんだ。背後に立っていた仲間の1人が若者の肩に手を添える。

「良かつたじやないか。そのハンカチは父親の形見なんだろ?」「ええ。修一のサイン。間違いなく父親のものです。母さんも喜ぶぞ……。」

若者は嬉しそうにハンカチをポケットに仕舞いこむ。「写真も取つたし、後は土を採取するくらいだな。」

「はい。ん?」

若者は足元の土が少し盛り上がっている事に気づいて、しゃがみこんだ。

「どうした?」

周りの数人の仲間が集まつてくる。

「何か埋まつてる。」

若者は土を掘り返して、何か力プセルのような物を掘り起こした。「何だこれ?」

それは少し力を入れるとあつさりと開いた。中には数枚の手紙らしきものが入つていて。皆が見守る中で若者は手紙を默読する。

「親父の字かな……?、誰かに宛てたものだ。」

「いや、内容からすればそうだろ。凄いな二十年前の手紙だよ。」

背後から一緒に黙読していた1人が感嘆の声を漏らした。

「そうだな…。」

若者も手紙の内容を見てそう確信したようだつた。写真でしか会つたことのない父親に手紙だけでも再開できた事で涙ぐむ。

「あれ？」

「どうした？」

最後の一枚を捲つた若者の声に仲間が反応する。

「この一枚だけ違う字だ。」

「違う字？」

最後の一枚は確かに紙の質や筆圧が明らかに違つてゐる。
「もしかして、十年前にこの山で行方不明になつた。親父さんの友達じゃないか？、ここに来た可能性があるのは、その人しかしないぞ？」

「ええ、僕もそう思つていました。」

「何て書いてあるんだ？」

「えーと…。『私は今から山を降りる。この手紙も持つて帰ろうかと思つたが、死神を見てしまつた以上は私は助からないだろ。もしこの手紙を読んで、死神を見ていらない者がいれば、ハンカチと手紙をここに届けて欲しい。』」

紙の一番下には、若者のかつて住んでいた住所が書かれてあつた。
「死神つて…。」

「お前の親父さんの手紙にもそんな事書いてあつたな。」
若者の手が少し震える。

「どうした？」

「さつき、そこで黒ずくめの男に会つただろ？、」

「ああ、おいおい、お前まさか。こんな事信じてるのか？、そりや気持ち悪い奴だつたけど、死神なんかいるはずないだろ？、笑わせんな。」

仲間は若者の心配を一笑した。

「昔は、大変だつただろ？が、今の近代装備じや、この山も昔程は難関じやない。さあ、写真を撮つたら帰るぞ？」

「は…はい。」

手紙をポケットに仕舞いこんだ若者が振り向くと、少し離れた若肌に黒ずくめの男がじっとこちらを見ていた。

「全く…何でこんな事に…。」

「まあ、そう言つなよ。こんな体験は滅多にできるもんじやないぞい。」

白髪の教授は嬉しそうに三角フラスコを揺らした。俺は椅子に浅く腰掛け、さつきから部屋の片隅からじつといつも見ている黒ずくめの男に目線を合わせる。

「一生したくなかったよ。」

「じゃが、バイト代はちゃんと払つたださう。」

「そういう問題じやない。」

その時丁度、教授の手の中のフラスコから紫色の怪しい煙が噴出した。俺は丁度窓際にいたので急いで換気する為に窓の鍵に手をかける。

「おつと、開けるなよ。」

「何でだよ。」

「秘密の実験じやからな。」

何が秘密だ…。

しがない大学生の俺が金に目が眩んで、このマジドサイエンティストの実験の被害者になつたのはほんの数日前だつた。

元々変わり者として学校内では誰も近づかなかつた名物教授だといつは入学した当初から先輩達に聞いていた。俺も別に科学なんぞに興味はないし、同じ学校内にいても特に顔を合わせる事なく平穀な生活を送るはずと思っていた。数日前に廊下に張り出されている張り紙を見るまでは…。

「とにかく早く解毒剤作つてくれよ。俺はもうこんな生活は嫌なんだよ。」

「人生何事も乐しまないといかんぞ?」

俺はこの部屋にいる間、何度もここつを殴りそうになつた。

「兎に角、早くしてくれ。金は返すからわ。」

悔しいが今はこの変態教授に解毒剤を頼むしかない

「そう焦るな。人生は長いぞ。」

「こいつは人の話を聞いているのだろうか。この数日間の地獄を考えると焦るなという方が無理だ。

「もうこんな体は嫌なんだよ。もしかしたら他に何か副作用があるかも知れないだろうが。」

副作用という言葉を聞いた瞬間に教授は顔を赤らめて俺の方に向き直る。

「ワシの薬は完璧だ。そんなもんあるはずがない。」

俺は怒りを通り越して呆れかえる。副作用がない?、よくまあそんな事が言えるものだと腹を抱えて笑い出しそうになつた。

「あのね。いいですか?、もう一度見せますけど、痛いからこれが最後ですよ。」

「何を?」

俺は教授の問いかけを無視して席を立ち、近くの蛇口まで行くと水を流した。

「いいか、よく見てる。」

真つ直ぐ真下に流れ出る水に腕を伸ばして少し触れさせた。

「ぐう…。」

激痛が走り、思わず呻き声が漏れる。そして、それと同時に水に触れた俺の腕が煙を上げて水に溶けていく。これ以上はまずいと直ぐに腕を引っ込んだ。

「ほお!」

教授はそれを見て感心した様にずれた眼鏡を真つ直ぐな位置に戻した。

「ほお!、じゃないよ。さつきも一度見せただろ。これで俺が嘘をついてない事が分つただろ?、このままじゃ日常生活が出来ない。元に戻してくれ!」

「ふむふむ…。」

まだ煙を上げて いる俺の腕を教授は手にとつて眺める。さつき、同じ事をして見せた時には大してリアクションが無かつた癖に大した役者だ。

「水に触れるとき溶ける体…か。これは世にも奇怪な。どうしてこんな事に？」

教授：と呼ぶのもメンドクサイ、この爺め。

「やがましい。そりや少しほは知りたいけど、今は一刻も早く元に戻りたいんだよ。何とかしてくれ。」

「ふーむ。」

他人の話を聞かない事がこんなに人をイラつかせるものなど、この時の俺は生まれて初めて痛感する。これからは、この爺を「反面教師にして人の話は聞くようにしよう。それはそれとして、兎に角今はこの体を正常な状態にする事が何より急務だ。

「…で、お前は何なんだ！」

これ以上教授に問わつていたら血管が切れそうだったので、怒りの矛先を部屋の片隅にいる黒ずくめの男に向けた。この爺とは何の関係もないとは思つが、俺がこんな体になつてからというもの行く先々で見かける様になつた奴だ。

いつも俺に目線を向けて いるので一度、「何か用ですか?」と、話しかけた事があつたが見事にシカトを食らつたので、それ以来こちらも無視する様にして いた。警察に連絡すればと友人に言われたが一つ問題があつた。

「お前、誰と話して いるんじや？」

顔を上げた教授が俺と同じ目線の先の部屋の隅と俺の顔を交互に見ながら目を丸くしている。

「何でもありませんよ。ストレスで見えるはずのないものが見えてるもので…。」

「それはお大事に。」

素つ 気無い反応の後、教授の興味は再び俺の方に戻る。しかし、よくまあストレスの大元がそんな反応できるものだ…。もう溜息一

つ出ないよ。

と、この様に俺以外の人には全く見えないらしい。友人にも、この爺と同じ反応をされたので、「原因はストレス」という風に結論付けた。

大体警察に「ストレスで見えないものが見えるんです」と通報した所で、何処かの病院を紹介されるのが関の山なので、俺は無視を決め込んだ。恐らく体が元に戻れば、このくだらない幻想も消えてなくなる筈だ。そう、全ての原因はこの爺の作ったわけの分らない薬から始まつたのだから。

「成程な。大体分つたわい。」

ようやく長い思索から覚めたのか、教授が顔を上げる。

「やつと分つてくれた?、で、解毒剤は?」

「無い。」

「…。」

あまりの衝撃の答えに俺はリアクションを忘れた。頭の中が真っ白になり、1分程、呆けた俺と教授は田を呑わせたまま時が止まる。

「ふざけるな!」

実験室に響き渡る声に教授がとつさに耳を塞ぐ。

「落ち着け。」

「こんな事落ち着いてられるか。この体で一生いろと?」

「そんなに心配せんでも、薬の効き田は1ヶ月じゃよ。」

「1ヶ月…。長い、長すぎる。」

「そ、そんな、せめて、それを短くする薬とか作れないのかよ。1ヶ月もどうしろつてんだ。」

「そんなに心配する事はあるまい。1ヶ月、水にふれなきやいいんじゃよ。飲むのは大丈夫なんじゃろう?」

この爺は俺が怒り心頭な事を理解しているのだろうか。いやしていまい。

確かに飲む分には何も無い事は確認済みだが、風呂はどうする?、顔も洗えないぞ。いや、それより、窓の外で降つている雨は?

「まあ、そう言わんと落ち着け。座つてテレビでも。」

教授は実験室の隅にある、思い切り旧型のテレビのスイッチを入れる。少しほやけた画面に、よく見る顔のニュースキャスターが映り、彼女の背後には天気図が見えた。

「おい…マジか？」

俺の目がおかしくなれば、そこに映つている大きな円形の低気圧は、例のあれだ。今の俺の体には何よりの天敵。雨水とあらゆる方向から体に叩き込む例のあれだ。心なしか、窓の外の風の音が次第に強くなっている様に感じる。

シトシトした雨は元々降つてはいたが、風がそれに加わると話は変わつてくる。横殴りに叩きつける様な雨の中、傘1本では家に帰り着く事は不可能だ。

「冗談じやない。どうしてくれるんだ？」

振り返つて教授に詰め寄る。

「合羽ならあるぞ？」

爺は、実験室の片隅にあるロッカーを指差して苦笑いする。

「うーん。」

目を覚ますと実験室の片隅のソファードで寝ていた。少し頭が痛い。あれ？、何で俺はこんな所で寝ているんだっけ？

昨日の出来事が、大昔のテレビのスイッチを入れた時の様に、少しづつぼんやり形を成していき、やがてそれが完全な形となる。結局、不本意ながら実験室に泊つたのだった。周りを見渡すと誰もいない。

「くそ。妙に頭がガンガンするな。」

昨日は間違いなく酒など1滴も飲んでいないはずだが…。

これは予想でしなかないが、おそらく大気中の水分が寝ている間に少しづつ俺の体にダメージを蓄積させていったのではないかと思

う。でもなければ、この頭痛の説明がつかない。

俺は一旦ソファに戻り深々と座つてテレビを睨みつける。まだ電源すら入れていない。

黒いブラウン管に映る自分の酷い顔などあまり見たくもないので、リモコンを探そうと周りを見渡した。

「！」

昨日と全く同じ位置に同じ人物がいる。

「アンタ、一体何なんだ？」

普通に考えればこんな不気味な事はないのだが、今の俺には自分の境遇への怒りが勝つていて、全く恐怖の欠片も感じずにこの男に怒りをぶつける。それに、最初は少し覚えていた恐怖の感情も、こいつの姿を見慣れてくるに従つて次第に消えていった。

ここ数日、実験室だけではなく、図書館や映画館などの一般施設から、果ては飯を食い入った飲食店まで、所構わずに俺に付きまとつていて。自分で言うのも何だが、俺は人に恨みを買うような事は何一つしていない。むしろ今は逆に人に恨みをぶつける側の人間だ。現れた時から何を言つても答えない。一度警察を呼んだ事があるが、駆けつけてきた警官は、不思議そうに俺の周りを見回すだけだった。

「何だ？、誰もいないじゃないか…。私も暇じゃないんだ！」

そう言つて逆に怒られてしまう始末。昨日の教授もそうだが、こいつはどうやら俺にしか見えていないらしい。

昔から、こういった類の怪奇現象は全く興味がなく、基本的には信じないのだが、ここまで鮮明に露になると、俺にとつては性質の悪いストーカーと何ら変わりがない。せめて何のつもりでここにいるのかをはつきりさせてくれないと、気になつて仕方ないという想いだけが、心に引っかかっていた。

「くそ…返事なしか…。」

期待しても仕方ないので、俺は諦めて廊下にある水道の蛇口まで顔を洗いに…いや、駄目だ…。水道の蛇口を捻ると同時に、自分の

今の状態を思い出して、誰に見せるともなしに首を横に振る。

「あつぶねえ…。」

一人咳きながら、ポケットから出したハンカチを少し湿らせて顔を拭く。本当はこれでも少し皮膚がヒリヒリするのだが、仕方ない。よく考えてみれば、教授は1ヶ月で直るなんて言つていたが、そんな保障は何処にも無いではないか。一生このままであればまともな社会生活が送れるはずもないではないか。何もせずに、ただ1ヶ月待つだけなどとも出来そうにないので、今日は教授が来たら、昨日以上に詰め寄つて元の生活に戻らなければと、強い決意を抱く。

「よし…。」

鏡を見て両頬を掌で叩く。まだ氣力は何とか残つてゐるようだ。

「さてと…。」

黒ずくめの男に氣を取られて氣づかなかつたが、窓の外は朝にも関わらず薄暗い。昨日の台風が暴風域に入つてゐるようだ。グウーと腹の虫が空腹を知らせるが、今は外に出るわけにも行かず、俺は実験室に戻つた。

「あ！」

壁のカレンダーを見て今日が祭日だつた事に氣づく。下手をすれば教授どころか誰一人この建物にはいないし、今日は誰も訪れる事はないのだ。

「くそつ…。」

ソファーに座つてテレビを睨みつける。天気予報で、キャスターが笑いながら、

「午後には晴れます。」

と、断言していた。

こんな憂鬱な日には過ぎたグットニュースだつた。

「仕方ないな。午後まで寝てるしかないのか。」

そう結論付けるとソファーでじうつと横になる。窓に叩きつける大粒の雨が、まるで戦場に飛び交う弾丸の用に俺を狙つて誰かが乱れ打ちしているかのようだ。

無駄に怒つてエネルギーを消費したからだろうが、俺は直ぐに眠くなつた。これも夢であればいいのにという考えが頭を駆け巡る。あと数秒で睡眠状態だつたであつうその瞬間…。

ガシャーン！

鉄骨で飾り気の全くない実験室に響き渡る甲高い音。俺は直ぐに目を開いて床に転げ落ちる。

雨粒の弾丸が俺を狙つて窓ガラスを破壊する音だという事は瞬間に分つた。俺のいた窓際のソファーアに水分が染込んでいく。

「アブねえ…。」

寝起きの運動は体にあまり良くはない…などと考えながら俺は窓から距離を置いた。台風の暴風域の中では雨はほぼ横から降つてくる。遮るもの無くなつた雨粒は俺に向かつて容赦なく飛んでくる。俺はただそれを見ているわけにも行かず、辺りを見回して傘を探した。

それらしきものが無かつたので仕方なく教室の隅で暫く待つことにする。時計と空を交互に眺めていると、いつの間にか、雨は小ぶりになり始める。俺は座つてウトウトし始めていた。

朝、目を覚ます為に洗面器一杯に溜めた水で顔を洗うという一般的な習慣が俺にはある。いつもの癖でうつかりそれを実行しそうになつたが、洗面器に手を入れかけた時に自分の置かれている状況を思い出した。

「くそ…。」

ビニールの手袋をしておいてから、タオルを濡らして思い切り絞る。それで顔を拭くと肌がヒリヒリする。逆にこの刺激で目が覚めるくらいだ。何とか顔を拭き終えると部屋に戻つた。

「さてと…。」

もうこの体になつて十日は経つ、教授の話を信用するとしてまだ

二十日程の気の遠くなる日々がこの先に待っている。安いアパートの部屋は、この前の台風の日から、かなり湿っぽくなっている。大気中の水分が増えれば夜などは特に体がヒリヒリと痛み出す。まずはそれを何とかしなくてはなるまい。

外出着に手早く着替えると靴を履く。部屋を振り返ると隅にいる黒ずくめの男がこっちを見ている。

「出かけるぜ。ついて来ないのか？」

「…。」

いつも通りの沈黙。数日前からとうとう家にまで現れるようになつたのだが、特に何をするでもなく、部屋の片隅に座つていてるだけだ。

「まったく…。」

外に出ると雲1つない快晴だった。今日は傘を持つて行く必要は無さそうだ。たしか、駅前に大型電気店が新しく出来てているはずだ。駅までの道のりをテクテクと歩く。金に目が眩んだせいとんでもない事になつてしまつた。

今は戻つてくる日常を信じて出来る事をするしかない。しかし、いい天気だ…。ふと後ろを見ると、天気の様に晴れていた気分を害する黒ずくめの男が一定の距離を置いてついて来ている。

ここ数日、こいつについて幾つかの事が分つた。どうやら俺以外には見えていない。そして、いくら部屋に鍵をかけても出入自由。そして実害は何もなく喋らない。こういうオカルトチックな事は嫌いではないが、自分の身にこういう事が降りかかつてくると好き嫌いという問題ではない。

「どうしたものか…。」

ひとりごちている間に電気店に到着した。店内に入ると平日だからか、客と店員が同じくらいの人数でまばらに歩いている。案内版を見ると、どうやら目的のものは一番上の階にあるようだ。

空いているエスカレーターに乗り込むと上の階を見る。いつの間に上がつたのか黒ずくめの男が俺を見下ろしていた。既にこういう事

には慣れていた。結局こいつは幽霊が何かなのだろう。

除湿機の「一ナーハー」に行くと、いくつかの製品がまるで芸術品の様に展示されている。俺はこれまでこんなものを買った事がないので、どういうものがあるのかまるで分らない。一応パンフレットを手にとつて一通り眺めてみると、どうやら機能的にはあまり差が無いようだ。値段の大きな差は「デザイン的」な事に理由があるようだ。

あの安アパートには「デザインの良い品を置くのはちょっと違和感があるので、一番安い品を買うべきだろ」。第一、この体質が直るまでの間しか使わないつもりだからそれまでばいい。手続きをしている間、俺はベンチに座つて一息つく。

「面倒な事になつたなあ。」

ふと横を見るとベンチの反対側の端に例の黒ずくめの男が座つている。視認するまで気配を感じないのは、いつもの事だ。

「なあ、あんた普通の人間じゃないだろ?」

「…。」

返事がないのも慣れてきたとはい、ijiはちゃんと答えて欲しい。

「何で俺について回るんだ。俺はただの貧乏学生だぜ?、まあもつとも今は、人間らしからぬ状況にはあるけどね。」

「…。」

はたから見れば、この男もみえていないから、ただ俺が一人事言つているようにしか見えないだろ?が…。

「何とか言ってくれよ。せめて名前だけでも名乗ってくれ。」

「…。」

俺の言葉だけが虚しく空中に消えていく。会話を諦めてベンチを立つて商品を受け取ると店の外へと向かつた。空を見上げると、店に入る時には無かつた怪しい雲が空を覆つていぐ。

「おいおい、マジかよ。」

俺はそこそこの大さと重さの荷物を抱えて全速力で家へと走つた。実は流れる汗も肌を少しヒリヒリさせるのだが…。まったく、

どうなつていいんだか…。

「教授、いるか？」

壊れるんじゃないかと思えるくらいに乱暴にドアを開く。相変わらずの研究室の中は煩雜に器具が置かれていて、他では味わえない独特の匂いが充満している。

「換気くらいしろよ。」

「ここ」一週間で、俺は空気が読める用になっていた。といっても世間一般の雰囲気を読むとか、そういう意味ではなく、物理的に空気が持つ濁りや湿度感が肌で判定できるようになつたというだけの事だ。

「いないのか？」

遮光率の悪い安物のカーテンと窓を開くが、教室の中には教授の姿は見当たらない。ここに来るまでに、教員室に寄つてみたのだが、他の先生方は、教授の姿をここ一週間ばかり見ていないといつ。

以前から変わり者で1週間程度なら講義すらサボつてここに籠る事も珍しくなかつた名物教授だから、1週間程度に姿が見えないくらいでは、誰も気にしなかつたのであらう。窓を開くと心地良い風が肌に染みる。

今日は快晴で、特に湿度もそんなに高くない。俺にとつては、後2週間ばかりこういう天気が続いてくれれば、何の問題もなく、この体からオサラバできるのだが…。

「いないのか…。」

夕日に照らされた教室内には、俺ともう一人、黒ずくめの男が隅っこに立つて俺を見ている以外には誰もいない。

「しようがないな。少し待つとするか。」

ここに来た目的は、万一に解毒剤を作つている可能性に掛けてみたくなつたというだけの事である。ただ、元々の薬 자체が怪しいの

に、解毒剤を信じる根拠は何もないのだけれど…。それでもワラにすがる思いで、来てみたものの、見事に肩透かしを食らつた次第である。

俺はソファーに寝転がると、天井を見上げて溜息をついた。

「はあ…。」

開いた窓から心地良い風が吹く。ここ数日は晴れの日が続いている感じに乾燥している。まあ、元々こんな目に合う前からジメジメした空気は好きではなかったのだが、除湿機を買ってからは中々体の調子も良い。

ウトウトと瞼が重くなる。なんだかんだ考えているうちに時間が過ぎていく。廊下からは足音の一つも聞こえず、教授が戻ってくる気配はなかつた。

「まったく、どこ行つたんだ?、もう帰つたのかな。」

本当は自宅にでも押しかけたいくらいだが、そこまでするのも面倒だ。

仕方なく帰ろうとする俺の目に、小さな紙切れが飛び込んでくる。事務机の隅においてあるその紙切れが妙に気になつた。

俺はこゝ見えて直感などという類のものは信用しない。しかし、この時は何故かその直感が働いたのか、何気にその紙切れを手に取つた。

開いてみると、汚い字で何かを殴り書きしてある。

「水、公式、回避、不可能、死神…」

幾つかの単語が並んでいたが、俺が読めたのは、それだけだった。何を意味しているのかは分らない。単語一つ一つは、解釈できても、この紙全体で読んだ者に伝わるメッセージは皆無だった。

しかし、読める単語を繋げて読めばあまりいい感じはしない。まあ、元々教授の考えている事など理解しようとするだけ時間の無駄だ。

振り返つた俺の目に黒ずくめの男が飛び込んでくる。またしても、俺の直感が働いてそいつに向かつて思わず呟いた。

「お前…死神か？」

「…。」

そいつは相変わらず何も言わずじっとそこに立っている。そして俺はもう一度紙切れを見た。比較的科学的な単語が並んでいる中で、「死神」という単語は一際異形を放つてゐる。何故か、この単語だけが、特に丁寧に書かれている様な気がしてゐた。

振り返つた俺の目に飛び込んできたそいつの表情は、少し笑つているようにも見える。

「お前…教授をどうした?、まさか、殺したんじゃないだろうな?俺は後ずさりしながら、そいつから少しづつ距離を取る。

「さあな。」

男の低い声が、まるで地獄の底から俺の脳に直接呼びかけてるような声が確かに聞こえた。しかし、ようやく聞こえたその声も、明瞭な意思を表すものではなかつた。どこか空虚で命そのものの呼吸など感じられない。俺は本氣でこいつが死神なんだと思つた。

「俺は…死ぬのか?」

もし、死ぬとしたら原因など一目瞭然だ。あと2週間に迫つたゴールが遠ざかつたように思つ。いや、その前に、こいつに殺されるのか。

「くそ、俺もただでやられるわけにはいかないぞ。」

そう言いながらも後ずさりは続いた。そのまま窓際まで来ると窓を開いて奴が何か言おうとするのを少し待つた。2週間目でようやく取れたコンタクトは、俺の好奇心を刺激したが、それよりも命あつてのものだねだ。

こいつは1階なので窓から飛び出せば、逃げる事は可能であるが、よく考えれば、こいつは、俺の家を知つてゐるし、第一本物ならば、果たして逃げられるものなのだろうか…。

俺は漫画や小説に出てくる死神というイメージを膨らます。間違いないこいつはその要素を色々と満たしている。俺みたいな奴はともかく、科学の権化みたいな教授が、なぜそんな単語をメモしたり

したのだろうか。

紙切れに書いてあつた2文字の単語が、俺の背筋を凍らせる。

「まさか……。」

思考が一巡して考えるのをやめた。信じよつが信じまいが現実に奴は目の前にいるのだ。そして、俺はあと2週間程で自由に普通の生活に戻れるのだ。

2週間後の自分を想像して「普通である事」の素晴らしさを考える事で俺は目の前の現実から気持ち的に逃れられたような気がした。それから教授はやがて行方不明という事で学校側から警察に届けが出された。自宅も強制捜査されたが、結局、行方は分らないままだ。

聞いた話だと、自宅には作りかけのカツブ麺があり、風呂場には服が脱ぎ捨ててあつたらしい。そして、シャワーの水が延々と流れでは排水溝に吸い込まれていたそうだ。

「な……。」

津波警報がテレビの画面に踊る。今日、1ヶ月目でこのふざけた魔法は解けるはずなのだが、俺には2つの不安があった。一つは部屋の隅に座っている死神の存在。そして、教授の言った1ヶ月で薬の効果が切れるという言葉。

まだ試してはいないが、恐らく俺の体は正常な体に戻っているはずだ。洗面所で顔を洗えば1発で分る事だが、まあ、ここまでれば、1日くらいの猶予をおいてもいくらいに考えていた俺にとってこのニュースは晴天の霹靂そのものである。

「くそ。」

災害に対する備えなど一切考えていなかつた1ヶ月前の俺とは違う。こんな時の為に逃げる準備くらいはしてある。外は、雨こそ降つてはいなかつたが、怪しい雲が空を覆っていた。簡単に荷物をま

とめて外へ飛び出すまで約5分。我ながら要領の良さに驚いた。街の人達は既に避難を初めており、高台へ向かっている。

自転車などの乗り物は一切持つていなかつたので、とにかく走るしかない。俺も皆と同じ方向に全力で走り出す。家から飛び出す時に、部屋の片隅にはまだ死神が残つていたが、まあ、あいつは放つておいても問題はないだろう。

携帯ラジオでの情報では、津波の到達までまだ1時間近くあつた。高台までの距離と俺の足を考えると十分余裕はあるはずだ。

周りは家族連れや近所の喫茶店のマスターなど顔見知りもちらほらいて、皆、普段見せたことのない様な表情で必死に高台を目指している。

差し掛かつた交差点では、警官が交通整理に追われていたが、彼ら自身も逃げないといけないので、何となく落ち着かない様子だつた。混雑する車を捨てて走り始める者もちらほらと見える。

比較的大きな街ではないので何とか大混乱という程でも無かつたが、それでも、災害の恐ろしさを十分に物語ついている。耳元のラジオでは、落ち着いたキャスターの声が災害情報を冷静に伝え続けていた。

「津波は高さと勢いを増して沿岸部に向けて進んでおります。」

勢いを増してつて…。避難中にいつの間にか最初の想定の高さの倍程に膨れ上がつてている。俺は、生まれてこの方、津波などというものは、映画のCGでしかお目にかかつたことはないが、それでも、今、頭の中に湧いているイメージは、本物と然程差分はあるまい。何とか高台の麓に到着して階段を見上げた。割と広い階段だつたが、人で埋め尽くされている。パニックになる人を警官が宥めている場面もちらほらと見える。

俺自身は、特殊な事情で他の人の倍くらいはパニックになつていたのだが、列を作つて並んでいる人を見ると何も言えなくなり、その最後尾に並んだ。

「お前等は、所詮水を多少被つても死にはしないだろう?」

と、心中では叫んでいたのだが、こんな特殊事情を説明したところで相手を納得させるのには時間がかかり過ぎるし、こんな時だからこそ、信じてもらえる自身もその弁舌もなかつた。

何故かこんな時なのに俺は周りを見回して、黒い服を探す。似たような体格で黒い服を来た人もちらほらいてドキリしたが、俺がこの1ヶ月ずっと見てきたあの男は見当たらない。もつともこの人混みの中では普通に探す方が困難なのが。

「すいません。うちの子を見ませんでしたか？」

取り乱した母親が子供を捜す声が聞こえる。無理も無い。この状況ではよくある事だが、力になれないだけに、悲痛な声が耳に痛い。

暫くして何とか階段に足をかける。時間的には全く余裕はないのだが、止むをえない。周りの人々も今出せる全力のスピードで階段を駆け上がっている。

「くそ…。」

思わず舌打ちしたものはどうしようもない。

不意に大粒の通り雨が体を叩いた。

「！」

一応合羽を着込んでいたものの1ヶ月も怯えていた水に体を叩かれるというのは気分のよいものではない。合羽のフードを深く被つて何とかやり過ごす。今の所体に水滴がついていないのか、体质が直つたからなのか全身の何処にも焼けるような痛みはない。しかし、それを確認する余裕はもちろん無かつた。

ようやく階段に足が掛かると加速度的に人の群れに押し流されるよう駆け上がる。不気味な地鳴りが体を振動させていたが、今はそれに耳を貸している場合ではない。何の保障もないが、とにかくこの階段を駆け上がるしかないのだ。

乗り物を持つていてる人は既に街から退避するという手段とつている人も大勢いる。ここにいるのは、俺のように乗り物を持つていてるために短時間で遠くには逃げられない人々が多い。老若男女、様

々な人がいたが、人間危機感を感じるところまで力が出せるものかと思える程、皆力強く階段を登っている。

いつの間にか薄暗くなってきた。今が何時なのか分らない。俺は腕時計など持つておらずいつも携帯電話で時間を確認していた。しかし、ポケットから取り出した携帯電話を開くと画面が真っ暗なままだ。電源ボタンを押しても何の反応もない。

「こんな時に限って…。」

電池切れの役に立たない携帯をポケットに戻す。ふと上を見上げると、ようやく丘の頂上が見えてきた。これで何とか助かった。

そう思った俺の目に飛び込んできた黒い服。奴だ…。

「なつ…。」

「おい、止るなよ！」

背中にぶつかった人から、俺に向かつて罵声が飛ぶ。一瞬立ち止まつた後、俺は再び階段を上り始めた。しかし、上を見ると奴の姿は消えていなかつた。気のせいなどではなく、冷たく俺を見下ろしている。見慣れている筈のその目は、今は俺の背筋を凍らせるだけの威力を持っていた。

その目が俺を焦らせたのか…。登り慣れていない階段を俺はあつさりと踏み外した。

「あ…。」

それが俺の記憶の最後の一言だつた。後の事は何も覚えていない。「何やつてんだ！」

「うわああ！」

「馬鹿野郎！」

誰が誰に向かつて話しているのかすら分らない。耳の中に入つてくる罵声を浴びながら俺は体に激痛を伴つて気を失つた。ただ悔しいのは、その激痛が階段に体を打ち付けた、人間本来の痛覚によるものなのかどうかが分らなかつた事くらいだ。

ファントム（前書き）

この物語はフィクションです。名称や人名は実在の人物とは何の関係もありません。

ファントム

俺には友達がない。

高校に入つてからとかではなく、幼稚園、小学校、中学校と見事にゼロである。数える必要もなければ、今後増える予定もない。自分としては、今のところ楽で良いとしか考えていらない。

別に人と話すのが苦手とか人間として何か欠陥があるということも特になく、誰かに迷惑をかけたこともない。一人の時間が苦しいと思つた事もなく、誰かに話したいエピソードも別にない。

チャイムが鳴ると騒がしくなる教室をよそに席を立つて教室を出た。片手には、朝コンビニで買ったサンドイッチと珈琲牛乳の入った紙袋を持つて。いつもの屋上の特等席に向かつて階段を気だるい歩き方で昇る。

この学校は屋上は立入禁止なのだが、入学してすぐに校内に一人になる場所を探していた俺は屋上に出る扉の横にある窓が通り抜けられる事に気づいた。

「今日は風が強いな。」

いつもの昼寝ポイントに移動すると紙袋から昼食を取り出した。快晴の空に少しだけ肌寒い程の風が大変居心地が良く、午後の授業をサボりたい気分が蔓延してくる。目を閉じると何もない真っ暗な世界が瞼の裏に広がっている。気絶するように少し昼寝すると頭がすつきりする。

本当にこのままサボるという事も考えたのだが、残念だが、俺はそこまで不真面目ではないので渋々起き上がった。

俺がいたのは出口のある小さな小屋の様な四角い建物の上だ。正確に校舎で一番高い位置にいた。起き上がって、降りようとした俺の目に制服が飛び込んでくる。1人は男、もう1人は女だ。

「あ。」

突然現れた俺の方に驚きの目線を送る2人。負けじと俺も2人に

対抗視線を送る。人付き合いでが苦手な俺にとって、この空気は最悪の場面の1つだ。そして、2人もその空気があまり得意ではないようで、暫く3人ともそのまま固まってしまった。

と、チャイムが鳴り響く。

その音で、俺を含めた3人は現実に戻つて来た。俺はそそくさと小屋を降りて、そのまま帰ろうとしたが、背後から不意に声を掛けられた。

「あ、あの…。」

「…。」

声を無視するわけにも行かず俺は立ち止まる。だが、こちらから声をかける事はなかつた。

「よく、屋上には来るの？」

振り返ると男の方がこちらに近づいてきた。その後ろからの方も恐る恐る近づいてくる。

「…。」

俺は、何も言わずに振り返る。男の方はよく知らないが、女の方は見た事はある。確かに同じクラスに同じ顔がいたと思つ。

「あの、ここにいる事は…。」

心配そうに言う男の言葉が終わらないうちに俺は言葉を重ねる。「言わないよ。言つたら俺もいたことになるでしょうが。」

「そ、それも、そうね…。」

女の方がほつと胸を撫で下ろして、後から言葉をつけ加える。

「あ、あのー、もう一つ…。」

振り返つて戻ろうとする背後から、今度は女の声が俺の足を止める。

「何だよ。もう昼休み終わるよ。」

次の授業は確か体育だ。教室に戻つて着替えてから校庭に行かないといけない。少し焦つた態度の俺に彼女は思わぬ言葉を投げかける。

「私たちは、その…。」

大体言いたい事は分る。急いでいた俺は彼女の言葉を率先して補完した上で約束を取り付ける。

「付き合つてゐる事は黙つておくよ。俺はここで何も見なかつた。それじや。」

今日は本当に振り向いて俺は出口へ急いだ。

はつきり言つて、2人の事など全く興味はない。それより、自分が場所と思つていた屋上への侵入者というイメージしかない。また、明日から1人で居られる場所を探さなくてはという事だけが頭をよぎつた。

教室に戻ると既に誰もいない。制服が各椅子に掛かっているという事は、どうやらクラスの皆は着替えを終えているのだろう。俺は、急いで着替えると昇降口に走つた。学校の授業自体には興味はないが遅刻する事で目立つのがとても面倒くさいからだ。

「くそつ。」

思わぬ事で時間を食つた為に、間に合つ公算の方が少ない。このまま屋上に戻つて昼寝でもして、何食わぬ顔でそのまま帰つた方がいいのかと考え始める。

ともかく上履きを靴に履き替え、踵を踏んだまま外に飛び出した。

「！？」

不意に何かの塊が視界に入った。

一瞬何が起こつたのかわからなかつた。

しかし、次の瞬間、それが人の形で赤く染まつてゐる事を認識する。

「た、助けて…。」

ゆつくり上げた顔を血に染めて、手を差し出すその女子は、先程屋上で見た顔の変わり果てた姿だつた。

はつきり言つて俺はホラー映画の類は苦手だ。なので、子供の頃に一度見たきりで、テレビでもその類のものは直ぐにチャンネルを変えてしまつ。そんな耐性の無い俺が、いきなりこれはレベルが違うすぎる。

「…。」

恐怖などといふものを通り越して、俺はその場に固まってしまった。そんな現実から目を反らすように俺は上を見る。

彼女がもし誰かに突き落とされたのだとしたら俺の視界に何かが入るはずだったが、俺が冷静じやなかつたのもあつたのかも知れないが、特に何も見えなかつた。

「はあはあ。」

突然の息切れに顔を降ろすと、彼女の震える手が今にも俺の足に届きそうな勢いで近づいてくる。情けない事に俺はそこから一歩も動くことが出来なかつた。

「た、助けて…。」

消えそうな声でそう呟くと彼女の血塗れの手が力なく地面に落ちるとともに彼女の顔もうつ伏せになつた。

俺が何気にそれを見届けて顔を上げると、いつの間にそこにいたのか。黒ずくめの男が彼女の傍らに立つていて。

「わっ！」

次々と起つくる想定外の出来事に俺の心の許容範囲を超えたらしい、遂に幻が見えてきたと思った。その男はじつと俺を見ていた。特に何をされたわけじゃないが、見えないプレッシャーに押されたのか、その場に尻餅をついた。

「で、君は屋上に行つていたと。」

「はあ…。」

目の前の初老の刑事がメモを取りながら型通りの質問を繰返す。

「その時に屋上にいたのは？、君と彼女だけか？」

「いや、最初に行つた時は誰もいませんでした。それで少し寝転がつてゐる間に、あの2人が…。」

「2人？」

「えーと、彼女ともう1人いました。」

「真弓さんともう1人？」

「真弓？」

「何だ、君は自分のクラスメートの名前も知らないのか?、吉村真弓。君が第一発見した彼女の名前だ。」

「そういうや、そういう女子がいたような気がする。」

「しかし、災難だな。さっきの話だと君が最初に見たときは彼女はまだ生きていたんだろ?。」

「う…。」

忘れようとしていたおぞましい光景が脳裏に再び浮かび上がる。

「は、はい。刑事さんには日常でしうけど。」

「はつ、残念だけど、俺は二十年以上刑事やってるが、人が死ぬ瞬間なんか見たことないよ。俺達は事件が起きた後でしか動かないしな。」

「そうですか…。」

そんな二十年以上も仕事をしたプロが見たことないもの、しかも一般人なら普通一生見ない様なものを見たのか。そう思うと、後悔とは少し違う、何ともいえない感情が湧き上がつてくる。しかも俺は映画ですら見たことがないのだ。

「で、君が見た、もう1人つて誰なんだ?」

「えーと…あ…。」

刑事は俺の態度を一見して頭を搔いた。

「なるほどね。君友達少ないだろ。」

「は?」

「まあ、同じクラスの人の名前も覚えてないんだから、名前が出てこないのも無理は無いか。」

「う…。」

至極もつともだ。事実、俺は顔は覚えていたが名前なんか一切出でこない。第一、名前を聞くことすらしてない。

「はい、分らないです。」

「 そ う か 、 仕 方 な い 。 で は 、 何 か 思 い 出 し た ら 、 こ こ に 電 話 し て く れ 。 俺 は 赤 木 だ 。 ま 、 覚 え て い る か ど う か は 自 由 だ け ど な 。 」

刑 事 は 軽 く 嫌 味 的 な 事 を 残 し て 、 俺 に 紙 切 れ を 渡 す 。 紙 切 れ に は

電 話 番 号 が 書 か れ て い る 。

刑 事 が 立 ち 去 つ た 後 、 俺 は と り あ え ず 部 屋 か ら 出 て 昇 降 口 へ と 向 か う 。 あ ん な 目 に あ つ た 場 所 に 戻 り た も な い が 、 この 校 舎 か ら 外 に 出 る に は ど う し て も 通 る し か な い 。 取 調 ベ が 終 わ つ た ら 、 今 日 は も う 帰 宅 す る よ う に 先 生 に は 言 わ れ て い る か ら 、 行 か ざ る を 得 な い 。

現 場 は 上 へ 下 へ の 大 騒 ぎ が 続 い て い た 。 学 校 の 外 か ら も 野 次 馬 が 見 に 来 て い た 。

靴 を 履 い て 外 へ 出 る 。 ま た 何 か 落 ち て き そ う で 思 わ ズ 上 を 見 た 。 空 は 既 に 夕 暮 れ の 様 相 を 呈 し て い る 。

「 ん ？ 」

校 舎 は 3 階 建 て で 屋 上 か ら 誰 か が 覗 い て い れ ば 直 ぐ に 見 え る 。 そ し て 今 、 誰 か が 、 屋 上 か ら 下 を 覗 い て い た 。

「 あ れ は … 。 」

俺 は 思 わ ズ 昇 降 口 に 戻 る 。

よ く 考 え れ ば 、 こ れ 以 上 こ ん な 事 に 関 わ る 気 は 無 い は ず な の に 、 体 が 勝 手 に 動 い た と し か 言 い よ う が な い 。

そ れ に し て も 今 日 は よ く 走 る 口 だ 。 足 が 痙 缩 し そ う な 気 が す る 。 笑 う 膝 を 抱 え て 屋 上 へ と 向 か う が 屋 上 へ の 出 入 口 の 前 に 鑑 識 員 ら し き 若 い 男 が 立 つ て い た 。

「 何 だ 君 は ？ 」

「 あ … 、 あ の 。 屋 上 に … 。 」

「 屋 上 は 今 、 立 ち 入 り 禁 止 だ よ 。 ま あ 、 最 も 普 段 か ら 立 ち 入 り 禁 止 み た い だ け ど 、 今 日 は 特 に ね 。 」

「 い 、 今 、 下 か ら 見 た ら 屋 上 か ら 人 が 覗 い て い た ん で す 。 」

「 覗 い て ？ 、 ま あ 、 今 、 色 々 調 べ て い る か ら ね 。 監 視 員 の だ れ か じ ゃ な い の か ？ 」

「 い や 、 そ の 。 」

今の心理状態では見間違いも確かに考えられるが、それでもあれは確かに、あの時の生徒だった。そして、そいつは屋上から俺を真っ直ぐに見ていた。

「あの、一応お聞きしますが、うちの生徒は1人もいませんよね？」「生徒？、あのね。いたら追い出されるよ。もう三十分以上も我々はここにいるけど、生徒でここに来たのは君が最初だよ。」

警察がこんな嘘を言うとは思えない。やはり見間違いだろうか…。

「そ、そうですか…。分りました。すいません。お騒がせしました。」

俺は諦めて屋上を後にした。

学校を出ると駅に向かう。しかし、どうしても背後が気になり、後ろを振り返ると、たつきの黒ずくめの男が一定の間隔を置いてついて来ている。

服装は目立たないが、尾行という程こそとしているわけでもない。第一、明らかに俺を見つかっているが、全く何も気にしないまま、深々と被った帽子に隠れた田はしつちを見ているのかどうかも分らない。

警察に連絡するのが安全かもしぬないが、今の所不気味なだけで別に何もしてない。いや、人の後ろをついて来ているというのは犯罪なのだろうか。何かあってからでは遅いし、ストーカーである可能性は否定できない。

散々色々考えた挙句に俺は無視する事を決め、早足で帰路についた。

「あーあ、疲れた！」

部屋に入ると大の字になつて溜まつていた一言を天井にぶつけた。

今日は本当に色々とあった。もう頭を使うのも面倒くさい。

とりあえず、落ち着く為にいつも通りの生活をする事にする。外

はすっかり日が落ちていた。両親は、今夜は遅いと言っていたから、台所に行けば夕飯の用意はしてあるはずだ。風呂に入つて飯を食い、部屋に戻つて机に座つた。

ノートを開いてペンを握る。学生の本分である学業だ。一応体裁は整えたが、頭がそちらの方向に動くわけは無い。

ペン先でノートをトントンと叩きながら、ノートの中身などは頭に入つてきていない。それどころか部屋の片隅からする異様な雰囲気にはますます気が散るばかりだ。

「あんた、何なんだ。」

俺は今まで消していた部屋の灯りをつけた。部屋の片隅に座つていた黒ずくめの男の姿がくつきりと浮かび上がる。

「…。」

そいつはこちらからの問いには何も答えない。ただ、目線は確実に俺を捕らえている。よく考えれば何故俺はこんなに落ち着いているのだろうか。

何を聞かれても答えない不気味な男が部屋に侵入しているのだ。普通なら悲鳴の一つもあげてもおかしくはない。なのに俺は多少の腹立しさがあるとはいえ、この状況で、この得体の知れない相手と堂々と対峙している。

「第一、何処から入つてきたんだ?」

一番の疑問を聞いてみる。さして広い家ではない。玄関からトイレの窓まで鍵は一応すべて閉まっている筈で、俺はこの家に帰つてから今まで、玄関と風呂の窓以外は触つていない。その風呂の窓も外側に格子がついている筈だから、侵入は難しいだろう。

男は笑うでも怒るでもない表情をしている様に見える。その無の表情は、この男がこの世の存在では無い事を想像させるのに十分な説得力を持っている様に思える。

「この世…。」

俺は1人呟く。俺の声がこいつに聞こえたのかどうかは分らない。立ち上がりて部屋の隅の本棚に手を伸ばす。最近買ってきた他愛

も無い小説を手にとつてページを捲る。

その三流小説は、あるサラリーマンの男が人生に嫌気がさして自殺を考え、ビルの屋上へ向かった所、死神に会つたという話だ。奇妙な事に死神は、男に自殺をやめる様に説得する。結局男は死に切れずにもう一度頑張ろうと決心したその日に、交通事故で重傷を負い、搬送先の病院で苦しんでいる所で再会した死神に苦しみを訴えて殺して貰うという話だ。

今、目の前で俺を見ている男の格好が、その死神にとても酷似している。ただ一つ違うのは、小説で出てくるような鎌を持っていないという事だ。だが、案外本物はそういうものかも知れない。

「お前、俺を殺しに来たのか。」

思い切つて問い合わせるが、案の定戻つてきたのは沈黙だった。
「勝手にしろ。」

よく考えれば、この小説の主人公と違つて俺は自殺なんか考えた事もない。第一、屋上ではこいつを見かけてはいない。そう考えていくと、俺と言つよりは、死んだ吉村真弓という女子の方に取付いていたとしか…。

「あ。」

机に戻つた瞬間、一つの仮説が頭の中に生まれる。

こいつは、俺に取付いたんじゃなくて元々、吉村真弓に取付いていたのではないだろうか。いや、それどころか、屋上から彼女を突き落として殺したのはこいつ?

そう考えると何かと辻褄が合うような気がしてくる。

そうなるともう一人、屋上にいたあいつはどうしたのだろう。名前もクラスも分らないが、彼は生きているのだろうか。しかし、そうなると突き落とされたのは2人という事になる。いくら何でも落ちてきた人間を見失う事はありえない。確かに俺の目の前で地面に叩きつけられたのは、1人だけだった。

それに2人一緒にいて、片方が突き落とされるのを黙つて見ていた筈は無いし…。あの男子生徒は何処へ行つたのだろう…。

疑問が疑問を呼んで少々混乱気味になつた頭を少し冷やす為に伸びをした。よく考えればそれらは全部死神ありきの考え方だ。そんなものこの世に居るわけがない。俺はもう一度部屋の隅を見た。そこには既に誰も居なかつた。一切何かが動いた気配はなかつたのに…。

結論としては、「疲れて見えた幻」という事にするしかなさそうだ。

「いてて。」

登校中の電車の中で、痛む頭を押えて呟く。

俺は生まれてこの方酒など一滴も飲んだ事はないが、俗に言つ「2日酔い」とはこんな感じなのだろう。タベは明け方まで、色々な事が頭をよぎつて普段寝ている時間を過ぎても全く瞼に重さを感じなかつた。

ようやく眠気が訪れたのが、明け方の5時。とりあえず一回眠つたが、全く足りていらない睡眠時間と夜使いすぎた脳の疲れが、今朝の頭痛の原因だという事は明白だつた。

屋上から彼女を突き落としたのは誰か？

今朝の新聞やニュースで一応色々と見てみたが、遺書めいた言葉が彼女の日記から見つかったらしく「自殺」という事で警察の捜査は終わるらしい。

しかし、俺は納得できない。あの時彼女は確かに「助けて」と俺に言ったのだ。自殺した人間がそんな事を言つわけが無い。

昨日の刑事さん様に「十年のベテランでなくとも自然と容疑者は絞られる事になる。俺は思い切つて、あの時屋上にいた奴に会つてみようと思う。あまり、深く関わらないのが正解かもしれないが、あんなインパクトのある死に方を目の前でされでは、こっちも気にせずにはいられない。」

別に理路整然とした根拠があるわけではないので、会った所で何かを確認できるわけではない。

電車を降りて頭を抱えたまま俺はいつもルートで登校し、席に座つた。特に話しかけてくる奴もないのに、そのまま教科書を立てて思い眼を閉じる。

次に俺が目を覚ましたのは、既に四時間目の終わりのチャイムが鳴つていた時だった。誰も起こしてくれなかつたのかと思いながら、のそりと起き上がる。

あの男子生徒を探すつもりだったのだが、いつもの習慣でついつい屋上に足を運ぶ。しかし、階段手前で立ち入り禁止の看板が鎖で頑丈に繋がっていた。

元々禁止されていたのだし、あんな事があつた後に出入ができる方がおかしいか…。

「 しようがない…。」

引き返す為に振り返つた瞬間、俺は何かの物音を感じてふと立ち止まる。

「 何だ?」

屋上に続く扉の向こうから何か足音のような音が聞こえる。最初は気のせいだと思っていたが、耳をすませるとやっぱり何か聞こえてくる。

看板を繋いでいる鎖の間を縫つてドアに耳を当してみると、微かに人のすすり泣く声が聞こえる。

「 お~おい…。」

まさかと思つてドアのノブを回してみると…。

ガチャリ…。

立ち入り禁止の看板は前の色褪せたものではなくまだ新しい。こんなものを飾つておいて鍵をかけない筈はない。しかし、現に鍵は開いている。

突然の緊張感が俺を襲つ。この先へ進むべきかどうか…。ノブは回したものまだドアを少し押しただけで、屋上の様子はまだ全く

分らない。一応昨日警察が来て散々調べたと言つていたから、変なものはないだろつ。単純に鍵の掛け忘れな可能性もある。
少し迷つた挙句に俺は思い切つてドアを押した。

屋上には、昨日の男子生徒がいた。

「おいおい！」

そして彼は手摺を超えようとしていた。俺はとつさに彼の腕を引つ張り屋上の中まで引き戻した。

「何しているんだよ！」

「もうほつといてくれ！」

彼は俺の問いかには答えずに叫んだ。屋上の強い風がその声をかき消す。校庭では、無数の生徒が、俱楽部活動に勤しんでいる。恐らく、その人達には、この声は届いていないだろつ。

聞くと鍵は開いていたそうである。名前は本人が「大木和也」と名乗つた。

「丁度よかつた。少し君に聞きたい事があるんだ。」

「聞きたい事？」

「昨日の事なんだけど……。」

俺が口を開くと同時に彼はあからさまに不快な顔をした。
警察の事情聴取の際にも同じ様に聞かれたそうである。

「屋上で彼女と何をしていたのか。彼女が飛び降りる前、どのような会話や行動をしていたのか。」

ほぼ容疑者として扱われ、かなり精神的にまいつていた所に俺が同じ質問をぶつけそうになつたものだから感情が少し弾けたらしい。気持ちちはわからくもない。

「真弓が自殺だらうが、そうで無かるうが僕には、彼女がもう戻つてこないという事に変わりはないんだから、関係ないよ。今更、どうしてそんな事言つんだ。僕は、次の授業が理科室へ移動しないと

いけなかつたから彼女より先に教室に戻つたんだよー、君まで僕を疑つてるのか？」

「…。」

和也の強い口調に俺は、その理由が「好奇心」だとは言えなかつた。それを否定出来ないとはいへ、言葉にするにはあまりにも不謹慎だと、一応分る。

「すまん。そうだな。」

屋上の片隅に立つてゐる死神が俺の目に飛び込んでくる。既に見慣れてしまつた事も危ない。これ以上関わると、俺の命も危ないのだろうか。仕方なく、和也に背を向けて出口に向かつて歩き出すると、その瞬間、何か引っかかつてゐた違和感が弾けるように俺の体を貫いた。

「死神…。」

その単語が元々頭に引っかかつてゐたのだが、何故、最初から俺に奴が見えていたのだろう？

「もう一つ聞いていいか？」

うなだれている和也に向かつて、努めて冷静を装つた俺が話しかける。

「何だよ。」

「最近、黒い服の男を見なかつた？」

「は？」

不快な顔つきから一転して目を見開いて眉毛をハノ字にする。「こいつは突然何を言い出すんだ?」といつぱりような表情である。

「例えば、あいつみたいな。」

俺は見えてゐる死神を指差して聞いてみた。和也は一応俺の指先に目線をあわせてくれたが、首をかしげながら、

「何も見えないけど…。」

と、遠慮げに答えた。

「そうか。ありがとう。」

今だ不可思議な表情をしている和也を尻目に俺は屋上の出口へ向

かつた。

俺からすれば、吉村真弓が屋上から転落する前には、そんなものは一切見えなかつた。最初に見たのは彼女の遺体を見た後。その時は、あまりにもショックキングな場面に遭遇したせいで、死神が見えるタイミングなど考えもしなかつたが、今となつては、この事件に関わるきっかけとなつたタイミングで、あの黒服を見かけるようになつてゐる。

という事は、この事件に関わらなければ死神を見る事も無かつたのだろうか。

ほんの少しの後悔と同時にもう一つ奇妙な事がある。

何故、和也がまだ生きているのだろう?、和也には死神が終始見えていなければ?、真弓が死んでから一番悲しんでいる奴は、一度自殺未遂までしておいて死神の存在に気づいていない。

「なあ……」

俺は振り返らずに立ち止まって口を開く。

「何だ?」

背後からやたら冷静な声が聞こえる。

「君は、彼女と最後に交わした言葉はなんだ?」

「え?、悪いけど覚えてないよ。でも、多分『また放課後に』とかだつたと思うけど、それが何か?」

「どうしても気になる事があるんだ。」

「気になる事?、でも、お前彼女と別に仲良くも無かつただろ?。あんな事があつて第一発見者という関わりくらいだろ?。何を気にしているんだ?」

「君の話だと、彼女は飛び降りる前は1人でここにいた事になる。自殺なら、遺書めいた事とか会話の節々に出てきそうなものだけど。」

「さあな。新聞じや、警察は彼女の日記にそんな事が書かれていたとか言つてゐるけど、僕との会話にはそんな雰囲気ではなかつたよ。」

「

俺は正直に言うがどうか迷つた。

「ちなみにその日記は、読んだ事は？」

「ない。」

「ふむ…。」

俺が顎に手を当てて考えていると和也は近づいてきて肩に手をおく。

「何が、そんなに気になるんだ？」

先程とは別人のような低い声が耳を撫る。

「いや、やっぱりいいや。他人に深く関わると口クな事ないからな。」
「そうか。僕も…、それがいいと思うよ。」
ほんの少しだけ悪意が薄らいだような声。俺はこれ以上ここにいてはいけないような衝動に駆られて出口まで走った。正確に言うと、走つて逃げたのだ。

一気に階段を駆け下りると昇降口を出るまでほぼ止らずに駆け抜ける。普段運動などしていない俺に、こんな体力があつたのかと思う程、飛ばした。

「はあはあ。」

昇降口を出た「現場」で一旦立ち止まり息を整える。

そこから見上げた屋上からは、一見誰もいないように見えるが、何かが俺を見下ろしている感じがする。俺は、本気でこの件に関わる事をやめようと思ったが、あの日、彼女の最後の言葉がどうしても耳に残っている。

「た、助けて…」

自殺する人間の発する言葉ではない。即死しなかつた事で後悔している可能性もあるが、俺には事切れる前の彼女の言葉が、死のうとした人間の言葉とは思えない。

それに同じクラスのクラスメートではあるが、人付き合いの無かつた俺にこれ以上関わる必要があるのだろうか。

放課になると俺は職員室のドアをノックした。そして、担任の

先生に彼女の住所を尋ねる。

「吉村真弓の住所？」

「はい。一応第一発見者ですから、線香の一本でも思いまして。

「そうか。まあ、そりゃいい心がけだ。えーと……。」

個人情報保護とやらにうるさい時代だが、担任の初老の先生の世代にはそんな意識はない。あつさりと住所を紙に書いて渡してくれた。

「行くのはいいが、失礼の無いようにな。」

「はい。」

校門をくぐると俺の足は自然に吉村真弓の家に向かった。彼女の家に来るのは、もちろん初めてだ。チャイムを鳴らそうと指を押し当てる瞬間に声を掛けられた。

「お前、何でここにいるんだ？」

声の方を向くと、何処かで見た顔が……。

「あ、確か……。」

「何だ、忘れたのか？、警視庁の赤木だよ。」

丁寧にわざわざポケットから手帳を出して俺に見せた。現場で一度だけ話しただけなのであまり記憶には無かった。

「何でここにいるんだ？」

「え、えーと、ちょっと気になる事がありまして。」

俺は警察が苦手だ。今回のようなアクシデントがなければ一生この職業の人と会話なんてする機会はなかつただろう。

「そうかい。」

「刑事さんは何でここに？、」

「事件の捜査してるのさ。」

「捜査？、でも自殺つて新聞にも……。」

「俺は納得してない。あの日記を見せてもらつたが、これから死ぬような人間が書く内容じゃない。」

「や、やつぱり……。」

「やつぱり？、」

俺はほとんど直感でこの刑事は信用できるのではと思った。

根拠はない。しかし、俺はこう見えても自分の勘は意外と信頼していた。

「どうやら、お互に話す必要がありそうだな。その辺りの喫茶店でも行くか。」

男にお茶に誘われる筋合いはないとはい、俺も同じ事を考えていた。

ガラス張りに見える駅前は、夕方の第一次帰宅ラッシュで賑わっている。それ程大きな駅ではないが、昇降者数は同線上では多い方だ。昼間と夜の隙間の時間で、所々灯りが灯り始めている。

「さてと、で、何だつけ。」

いつの間にかトイレから戻ってきた赤木刑事がいつの間にか俺の前の席に座っていた。目の前にはビールとコーヒーというアンバラנסな組み合わせが置かれている。

「あの、勤務中なのでは…。」

「だから？」

一応、聞いてはみたが、この話は時間の無駄なので打ち切ることにした。

「赤木刑事は、彼女の日記の内容を見て、自殺が納得できないと。」「赤木さんでいいよ。そうだ。君は何で彼女の日記の内容が気になるんだ？」

ここまで話しておいて何なんだが、俺はこの続きを話す事を迷っていた。別にこの人当たりのいい警官が信用できないわけではない。理由を話すには、死神の話をしなければならない。いくら人が良いとはいえ、そんな荒唐無稽な事をあつさり信用してくれるとは思えないし、逆に俺の方が疑われる材料になりはしないだろうか。

「…。」

「どうした。」

拳動不審とまではいかないが、明らかに様子がおかしい俺の顔を覗き込む刑事。まるで自分が容疑者で取り調べを受けている気分だ。

「あの…。」

「ん?」

「…」「こんな話、信じてもらえないかもしないんですか…。」

「そりや、話してみないと分らないだろうが、信じるかどうかは君が決める事じゃなくて、聞き手である俺が決める事だ。」

まあ、言われてみれば全くその通りで、グウの音も出ない。目の前のコーヒーを一口飲んで一息入れると、話を切り出した。

「実は…俺、見たんです。」

「見た?、犯人をか?」

「いえ…。」

「じゃあ、何を?」

「…死神っていうんですか?、あの人间じゃないものを…。」

「…。」

赤木刑事は動きを止めて俺の顔をじっと見てる。心中では、どう思つているのか分らないが、一見動搖や混乱は見当たらない。職業柄、こういう変な事を言う人とも接してきたのだろうか。だから取り扱いには一般人よりは慣れれているのだろうか…。

「えつと…。」

「…」の句に困つていた俺に、赤木刑事は突然掌を見せた。

「話を続けてくれ。で、その死神と今回の話と何の関係が?」

やはり刑事ともなると、こういう話もちゃんと聞いてくれるものだ。俺はとりあえず今まで考えた事を正直に話す事にした。

「俺、今までそういうものは信じた事はないんですけど、今回だけは、どうも、本物見たいで…。」

「ふむ。君が何故それを死神だと思ったのかは、一旦おいておくとして、それが、彼女の死とどんな関係があると思ったんだい?」

「赤木刑事は責めるでも宥めるでもない冷静な口調で、俺に問いか

けてくる。

「俺は彼女と同じクラスです。別段仲良くもないし、あまり話した事もない。でも教室での彼女の様子だと、自殺するような素振りなんか微塵も無かつた。」

「なるほど、でもあの年頃の女の子は、そういう気持ちを隠すのがとても上手だつたりするものだよ。」

「だから、日記の内容なんです。誰にも見られない前提で書いているものなら、その日記の何処かに自殺の原因の断片があるはずだと思いまして。例えは…。」

「死神とか？」

「ええ、そうでなくとも、何か納得のいく理由が欲しいんです。」

「君はどうしてそう彼女の死の真相を知りたがるんだい？、さつきの話だと、彼女とはそんなに親しい間柄ではないようだけど。」

「俺が死神を最初に見たのは、彼女が俺の目の前で地面に叩きつけられた時からなんですよ。」

「…なるほどね。で、君は、死神を見てしまったのは、この事件に第一発見者として関わってしまったからで、死神から逃れるヒントがこの事件の真相に隠れているかもしけないと思つたわけだ。」

「さすが捜査のプロ、察しが良くて話が早い。その通りだ。」

「信じてもらえないでしようが。」

「ふむ、俺は死神は見たことないからな。だが理由はともかく、彼女の自殺に関しては俺も疑問視しているよ。残念だが、捜査上の守秘義務もあるんで日記の内容は細かくは教えられないが、彼女が死神とやらで悩んでいるような記述は無かつたよ。もちろん、それ以外にも死を連想させるような内容は一つもない。むしろ、高校生活を満喫しているような内容ばかりで、見れば見るほど自殺などとは程遠い心理状態だつたと思う。ただ、君はどうして彼女の自殺を疑つていいんだ？」

「あの日、俺の目の前で彼女は死ぬ直前に『助けて』といったんです。普通、自分の意思で飛び降りた人間が言いますか？」

「ほお、それはますます疑つてかかるべきだな。だが、それは君だけしか聞いていないから証拠にはならんよ。俺は信じてるがね。」

「…そうですか…。」

「」の刑事が嘘を言つてゐる様には到底思えないので、一応口記の内容に關しては確認できたと思つてよいだろつ。

「まあ、気になるのは分るが、捜査は俺達プロに任せせて、君は学生の本分に戻る事をお勧めするよ。」

赤木刑事は、ネクタイを緩めるビールに口をつけ、まるで水を飲むようにグラスの半分近く飲み干した。

「おつと…、とこりで。」

「はい。」

中身が半分になつたグラスをテーブルに置き、懐から手帳を取り出して、ガサガサとページを捲り始める。

「君が彼女のクラスメートだつたつて事で、一応確認して置こうかと思つけど。」

「何でしょ?」

「彼女の口記の中に時々出てくる『大木和也』って知つてる?『

「和也?、ああ、別のクラスの奴で、彼女と付き合つてた筈ですが。

「まあ交際していたのなら口記に出てきても別に不思議は無いだろう。

「それはおかしいな。」

「おかしい?」

「君らの学校にそんな名前の生徒はいないんだよ。」

「は?」

赤木刑事の言葉は、一瞬で俺を混沌とさせた。それじゃ、屋上で話したあいづは誰なんだ?、背筋を冷たいものが滑り落ちる。俺はもしかしてとんでもない事に關わっているのではないだろつか?

「そ、そういうえば…。」

「何だ。」

「今日屋上であいつに会いました。色々聞いている中で、午後の授業の話になつて、次の時間が理科だつて…。でもよく考えれば、五時間目が理科なんてクラスはないはずです。」

「そうなのか…。ふーむ。色々と確かめる必要がありそうだな。」赤木刑事は顎に手を当てて天井を見上げつつ残りのビールを飲み干した。

「そ、そんな…。」

喫茶店で話した翌日、俺は赤木刑事と学校の視聴覚室にいた。目の前には、先生が2人。その2人のうちの1人の先生の言葉に思わず席を立ち上がる。

「落ち着け。」

赤木刑事が俺の制服の裾を引っ張つて座らせる。だが、これが落ち着いていられようか。

「じゃあ、大木和也という生徒はいないんですね。」

「はあ、過去の名簿も調べましたが、うちの学校の歴史の中にそのような名前の生徒が在籍した事は一度もありません。」

「そんな馬鹿な。じゃあ、俺が屋上で話したあいつは誰なんだよ?」詰め寄る俺に不機嫌そうにする先生。

「君、屋上は立入禁止だぞ。」

そんな些細な事は今はどうでもいい。俺はとにかく自分の質問の答えが聞きたいたのだ。

「そうですか、しかし、最近学校に来なくなつた生徒はいますか?、ほら、登校拒否的なものなんかで。」

「うーん、風邪が少し流行つてるので病欠はいますけど…。」

「じゃあ転校とか。」

「それは今年は1人もいませんね。」

「そうですか。」

赤木刑事は考え込む。俺もそれに倣つたわけではないが、椅子に深く座つて腕を組んだ。俺に名乗つた名前は偽名だろ？しかし、同じ学校の生徒同士で偽名を使う意味などない。俺が直接見たわけではないが、第一、交際していた彼女の日記にもその名前があるのだ。

「やれやれ、これじゃあ調べようがないなあ。」

視聴覚室を出た俺と赤木刑事が同時に背伸びをする。

「あの、戸籍とかは？」

「あのね、何人いると思っているんだ？、第一、住所も分らないのに、絞りようがないだろ。名前も姓もあまり珍しいものじゃないから、同姓同名もたくさんいるだろ？し、それらを1人1人調べる時間なんかない。」

言葉にする必要もないくらい至極もつともな意見である。「参つたな。このままじゃ、君が容疑者になつちまうぞ。」

「は？」

突然電撃を浴びせられたような衝撃が走るとともに直感的にそつかと思い直す。そういうえば俺はあの日屋上にいたのだ。赤木和也と「真」さんと最後に会つた人物に当然容疑がかかる。

「お、俺ですか、でも俺は飛び降りた彼女を昇降口で見ているんですよ。どうやつて彼女を突き落とすんですか？」

「それなんだが、赤木君と君の共犯という線も考えた。」

「な、な、何言つてるんですか。俺は、あの2人と接点がないんですよ。俺がどんな人付き合つたか、調べて貰えれば分ります。」

自分が疑われるなど夢にも思つていなかつた俺は不意を突かれて慌てて言葉を搾り出す。

「慌てるなよ。こやつて話しているという事はその線が消えたという事だよ。」

「？」

俺が首をかしげると赤木刑事はポケットから煙草を取り出して火をつけた。ユラユラと揺れる煙が曇り空に向かってゆっくりと登つ

ていく。

「簡単な話だ。共犯の線は赤木君がいなければ成立しない。だから、赤木君の事を調べようが無くなつたという事は、君が犯人だと証明するものが何も無くなつたという事だよ。」

赤木刑事は遠くを見つめながら煙草の煙を大きく吐き出した。なるほど、だから昨日俺に接触してきて刑事だと名乗つたんだ。

「じゃあな。」

刑事は残念そうな表情で、携帯灰皿に煙草を押し付けるとその場を去つた。

大木和也が何者なのか?、今となつては分らない。あの日俺が見た奴の顔を忘れる事は出来そうにもない。いつかの屋上で背後からかけられた低い声も、今考えるとゾッとするが、あの時に落ち着いて返答できた事も何かと幸いしたのだろう。

事件に関わつている間、すつと俺に付きまとつてきた死神もすっかり見なくなつた。あれから変わつた事といえば、俺が屋上に行かなくなつたぐらいだ。

俺は相変らず変わり映えのしない孤独な日々を送つてゐるが、あの出来事を思い出す度に、和也だけではなくて吉村真弓という存在まで疑うようになつてきた。

昼休みなどは、教室でうつ伏せになつたまま寝てゐるのだが、またしても奇妙な事に一つ氣づく。寝つくまでの間、教室で話してゐる他の生徒の会話が耳に飛び込んでくるのだが、あれだけの事件だつたにも関わらず、その話題が一つも聞こえてこないのだ。皆が皆、氣を遣つてゐるだけといえばそれまでかもしぬれないが、どうしても気になつた。かと言つて何か行動を起こしてゐるわけでもなく日々は淡々と事件前と何も変わらない日常が過ぎていつた。

しかし、何かおかしい…。何がと問われれば言葉には出来ないの

だが、通常に戻つたはずの日常から妙な匂いがしてくるのである。事件前と事件後では、何かが違う。

そんなある日、俺はいつもの昇降口の出口で立ち止まつていた。

「あーあ、天気予報も当てにならんなあ。」

独り言で愚痴つて、突然脣ごろから振り出した雨粒を睨みつけていた。今朝、家を出る時の天気を考えると信じられない程に暗くなつた空から結構大きめの無数の雨粒が地面に叩きつけられていた。パラパラと音がする中、俺の横を通り過ぎていく用意周到な生徒達の色とりどりの傘が、薄暗いモノクロの景色にほんの少しの彩りを添える。

「しようがない…走つていいくか…。」

止みそうもない雨の前で、どうしようもなく腹を括る。駅まで、普通に歩いて十分程の距離だから鞄を頭の上に持つてきて全力で走るしかあるまい。

「仕方ない…。」

そう呟いて鞄を頭の上に持つてきた。

その瞬間目の前に雨粒ではない、何か大きな固体がビシッと目の前に落ちてくる。まさに走り出そうとしていた俺は不意をつかれて足を滑らせそうになつたが、何とか踏み止まつた。

「何だ？」

「どうした？」

周りの生徒が一斉にこちらを見る。俺は目の前に落ちてきたそれを暫く放心状態のまま、それが何であるかを認識しないまま、ただそれを見ていた。

「き、きやあああ！」

不意に俺を現実に引き戻す甲高い声。近くにいた女子生徒が、まるで夏休みの蝉のよつよつに空気を振るわせる声を発した。

「飛び降りたぞ！」

不意に目の前に現れた人間の死に目を閉じる暇も無く、俺は目が合つてしまつた。

「た、助けて…。」

俺は強烈なデジャヴに襲われて顔を上げる。目の前は、あの死神が雨の中、突っ立つてこっちを見ていた。

過去に帰る日（前書き）

この物語はフィクションです。名称や人名は実在の人物とは何の関係もありません。

「げほつ！」

ドアを開くとそこは埃だらけの場所だった。うつすらと太陽の光が埃のこびり付いた窓やトタンの隙間から漏れている。

「ここは？」

僕は1人言を言いながら計器類のメーターを確認する。

「えーと、西暦だから、そうか、数十万年の未来なのか‥。」

とりあえず外に出ようと、足を踏み出した。地面に降り立った足元から埃が舞い上がる。

「げほつ！」

咳を繰り返しながら僕はとりあえず出口を探すことにした。一先ず、綺麗な空気を吸わなければと思い、出口と思われる引き戸を見つけて、そちらへと歩を進めた。

「ん？」

不意に何かの気配を感じて立ち止まる。あたりを見回すが特に何も見当たらない。何せ自分のいた時代よりかなり未来の世界に来たのだ。知り合いなど1人もいないし、見つかったら、面倒な事になる。

人気の少なそうな座標を選んで来たつもりだが、何せ時代が違うので何が起こるかわからない。時間旅行が普通になってきたのも最近（勿論僕のいた元の時代で）だから過去や未来の安全な時間と場所を調査する調査員の献身的な努力により、かなりの数のツアーグループが組まれる様になってきた。

それでも何かと事故が絶えない危険な旅行であるのは確かだ。未来がどんな世界かは、人の想像や予測を大きく外れている場合が多い。

僕が自分のマシンに適当にセッティングした値が偶然僕をここに連れてきた。既に誰かが来たことのある安全な時代と場所かもしれないし、

そうでないかもしれない。どちらにしても僕はすぐに帰るつもりはなかつた。

僕のいた世界より数十万年の未来、さぞかし文明は発達し、素晴らしい世界が広がっているだろう。そして僕はこの世界で人生をやり直すんだ。

そう意気込んでやつてきたものの、いきなり埃だらけの倉庫からの出発。しかも、建物を構成する材料は、波型のトタンときたものだ。窓を構成しているガラスも硬質ではなく輝の入った超旧型のものに見える。

「間違つたのかな。」

メーターは確かに数十万年先を指していたが、もしかしたら僕は少し過去に戻つてしまつたのかも知れない。

「参つたな。メーターが信用できないんじや。戻るのも一苦労なんだけどな。」

愚痴を溢しながらも得体の知れない気配への警戒を続ける。一応持つてきた武器として光式銃が懷にあるが、出来れば使いたくない。殺傷能力は然程ないが、熱信号で組織一部を一時的に麻痺させる効果のある光線を放つことができる。要するに麻酔弾のレーザー版のようなんだ。

「だ、誰かいるの？」

僕は思い切つて声を掛けてみる。突然現れた僕にびっくりしているだけかもしれないし、余計な敵愾心を煽る事もしたくない。かといって自分の身も守らなくてはいけないので、一応銃を手にとつて握り締める。

異なる時代に行つた場合、基本はそこにある生物に一切の危害を加えていいはいけない事になつていて。当然だが、それが他の時代にどういう影響を与えるのかを計算する事がほぼ不可能だからだ。たとえ全てデータと計算式があつたとしても、僕の時代のコンピュータの演算能力では、変化の速度に追いつく程の性能がない為、この手の計算には一切ノータッチというのが、科学者の見解だ。

要するに、計算し終える頃にはもう次の変化が始まっているので、計算する事 자체が無意味だという事らしい。この時代なら、それを瞬時に割り出せる機械が普通にあるのかもしない。何せ、数万年未来の世界なのだから。

それはそうと、呼びかけた僕の声に返答は返つてこない。しかし、相変らず気配はそこにある。

「仕方ない…。」

ヒソヒソ声で僕はそう言つと威嚇射撃というやつを試してみる事にする。天井に向かつて撃とうとしたが、このオンボロの小屋が崩れてきては困るので地面に向かつて引き金を引く。

ヒコーン。

微かな風切り音とともに閃光が辺りを一瞬曇間の明るさに変えた。そして、その一瞬で、小屋の壁を背にこちらを向いていた人影がクッキリ映し出されている事を確認する。

「誰？」

再び勇気を振り絞つて声をかけるが返事はない。こちらに危害を加えるつもりならとつぶくにそうしているだらうが、そんな気配はない。たまたまここに居合わせて、向こうも困惑つてているのだらうか。だとしたら、威嚇など余計な事をしてしまったかも知れない。どうする？、このまま外に出てもいいけど、タイムマシンの在り処を知られてしまった。この人が誰かにこの事を言わない保障など何処に無いのだ。

「困ったな…。」

僕は敵意の無い事を示す為にわざと、聞こえる様に呟いた。まあ、三文芝居だといわれればその通りだらうけど。

「…。」

その影は何も言わない。本当に困った。

「動くな！」

不意に第三の声がその場面に割り込んできた。余りにも予想と意識の外側だったので僕は戸惑いを超えて心臓が止りそうになる。

「2人とも動くな！」

再び建物の出口付近からの声にそちらを向くと、茶色のズボンに同じ色の目立たないようなジャケットを羽織り、サングラスをかけた男が僕と同じ様な銃をこちらに向いている。

しまつた、さつきの威嚇射撃の閃光で見つかってしまったのだろう。それにあの腕章は時間管理警察の腕章だ。以前、ニュースで時間法違反の人が逮捕されてしまつたを見た事がある。

「冗談じゃない。前科なんかごめんだ。まだ、時間移動しただけで、僕は何も悪いことはしていないし、今後も人に危害を加える気はさらさら無い。何とかわかつてもらえないだらうかと頭を巡らす。

「いいか。動くなよ！」

警官は威嚇しながら銃口をもう1人と僕の交互に向けながら近づいてくる。

「貴様！、持つている銃をこっちに投げる！」

当然の如く、武器放棄の命令が下る。

「くそつ…。」

こうしている間にも、警官と僕の距離が縮まつていく。向こうも1人のようだ。もつといれば複数人数で踏み込んでくるはずだ。恐らく巡回中に建物から怪しい光が放たれたので様子を見に来たら2人の怪しい人物が対峙している場面に出くわしたという所だろう。もし向こうが1人ならまだ何とかなりそうかもしれないけど、僕はジリジリと後ずさりし始めた。

しかし、向こうもそれに気づいたらしく、僕の足元に向かつて短いレーザーを照射してきた。

「動くなと言つたのが聞こえなかつたのか？」

ますます不機嫌な表情がサングラスで強調されていく。
仕方ないと観念しかけた瞬間。

「む！」

突然天井からガラガラと無数の鉄棒の様なものが落ちてきた。

「何だ！」

それに慌てた警官が銃の構えを解いて出口の方へと退避を始める。

「こっちだ！」

背後からの声に振り向くと、そこに眼鏡をかけた、僕と同じ背格好の男の子が裏口らしき出入口から僕を呼んでいた。

その声に従うか…判断には少し迷つたが、僕は、その好意に甘える事にして裏口に向かつて全力で走り出す。

「ふう。危なかつたね。はあはあ。」

「あ、ありがとう。」

「どういたしまして。」

「こっちは？」

逃げる事に夢中になつて気づかなかつたが、何処かの公園のようだ。振り返ると裏山のよつたな小高い丘の上に木が生い茂つている。おろりく、その中についた建物から走つてきたのだろう。丘が小さく見えるとほ、相当な距離を走つてきたとみえ、僕も、僕を助けてくれた少年も息を整えるのに随分時間を費やした。

「はあ。」

よつやく鼓動が落ち着いてきて空を見上げて深呼吸をする。快晴の空は僕のいた時代と全く変わらない。よかつた、どうやら全く別の星などに来てしまつたわけではなさそうだ。

「怪我は？」

「あ、ああ、大丈夫。」

「とりあえず、ベンチにでも座ろ。」

「そうだね。」

噴水の前にあるいくつかのベンチには、親子連れや老夫婦といった方々がのんびりと腰を落ち着けていた。日曜日の午後の風景といった所だろう。僕達は開いていたベンチに腰掛けた。

「君、未来から来たんだろ？」

「え？」

突然の少年の問いかけに僕は何と答えていいか分らずに口をモゴモゴとさせる。

「分つてるんだ。この前も何か、同じ様な人があの倉庫で誰かを捕まえてた。」

「同じ様な人？、誰かつて？」

「ああ、ごめん、分りにくかったね。僕は、孝。この近所に住んでるんだ。」

「僕は…。」

「いいよ。言わなくて、未来から来た人ってそういうの隠しておかないと時間法が何とかでうるさいんだろう？」

「へえ、この時代じゃもつ君みたいな子でも時間法の存在を知ってるんだ。」

「いや、普通は知らないよ。」

「そうなの。何で君は知ってるの？」

「孝でいいよ。そりや、この前、未来から来たつて人から聞いたから。」

「えーと、未来、未来って言つてるけど…。僕は一応過去から來たんだよ。」

「へ？」

孝は目を大きく見開いて驚きの表情を浮かべた。僕がタイムマシンで來た事を知っているのに、たかが過去から來た事でそこまで驚かれる事には違和感を感じる。

「君、タイムマシンで來たんじゃないの？、さつき建物の中にあつた丸い機械はそうじやないの？」

意外な質問が飛んでくる。

「いや、孝の言う通りだよ。あのタイムマシンで來たんだ。」

僕の答えに孝は何故か首を捻つて怪訝な表情をしている。僕はそんな孝を見て同じリアクションをとつてみた。何故か話がかみ合わない…。

「えーと、今は西暦でいうとXXXXX年だけど……。」

「そうなの。じゃ、狙い通りの時代にこれたはずだよ。僕のタイムマシンのメーターもその年代を指していたはずだからね。」

「うーん。」

孝は妙に何かを考え込んでいる。僕は仕方なく暫く、そんな彼を眺めて動き出すのを待つた。

「えーと、ちなみに君の時代は何年なんだい？」

「××暦××××年。」

「……そんな時代は聞いた事無いなあ。」

「ちょっと、聞いた事ないって、せめて教科書に載つてるとか遺跡が残つてるとか、そうだサーバのデータとかは移管をして何処かに残つてるんじゃない？」

「うーむ、聞いた事もない。それに遺跡とかってさ、だいたい土器とか、貝殻とか、昔の人の骨とか、そんなんだよ。サーバがどうとか、データがどうとか、今の時代のならあるけど、君の時代のやつは何も残つてないと思う。」

僕の頭が目まぐるしく回転する。もう一度確認したいが、タイムマシンのメーターは確かに未来を指していた事は間違いない。それに座標軸などを考えて他の星に来てしまったとはとても考えにくい。大体、今こうやって同じ言語で「ワーコーデーションをとれている事自分が、よく考えれば奇跡なのだ。

「そうか。多分そうだよ。」

「え?、何?」

1人納得している僕に孝が顔を近づける。この少年の好奇心はなかなかのものだ。いつの時代もこういう人はいるものだと感心する。「えーと、簡単に言つと、この世界は一度滅びてもう一回、やり直したんじゃないかな。」

「やり直した?」

「零からか一からか分らないけどさ。つまり僕は、君から見れば過去に栄えた文明の人つて感じになるのかな。」

「うーん。」

僕の説を噛み砕いているのだろうか、孝は腕を組んで考え込んでしまった。僕はまたしても返答を待つ。僕は、退屈凌ぎに辺りを見回した。夕暮れの公園。この雰囲気は少し違つが似たような景色は僕の時代にも存在していた。

「ん?」

ふと孝の鞄からはみ出している本に気づく。
「これ見せて貰つていいかい?」

「ん? どうぞ。」

それは何かの雑誌だった。まだ紙媒体の本が存在しているとは…。僕の仮説が正しければこの文明は、僕等の文明にはまだ追いついていないようだ。僕の時代には、紙そのものは存在していたが、紙自体が高級なアンティーク品で、本などというものは金持ちのオーナークションに登場する高級絵画的なものだった。僕自身は、子供の頃の学校の授業で歴史を習う時に、博物館で一度見ただけだ。

「うーん、そうなのか。」

一人事を繰返す孝を横目に僕は雑誌の薄っぺらいページを捲つた。中身は色々な記事が大きなタイトルと詳細な文章、それに数枚の写真とともに紹介されている。中身は、僕の時代のニュースのデータと対して変わらない。

『タイムマシンは可能なのか?』

『恐竜の謎』

『最新医療科学を追つ』

どうやらそれは科学系の雑誌のようで、いくつかの特集記事が紙面を飾つていた。読み進めると、どうやらこの時代にはまだタイムマシンなど存在していないようだ。彼が、僕の話を聞いてくれているのは、普段からこういうものを愛読しているからなのだろう。

「よし、何となく理解した。」

突然、孝は顔を上げて言った。僕は少し驚いて雑誌から目を離す。
「で、君はこれからどうするつもりだい?」

彼は続けて僕に問いかけてくる。

「うーん、どうするって言われてもなあ。」

言われなくても、さっさからその事ばかりを考えていた。しかし、よい案が思い浮かばない。

「帰りたいのかい？」

「えーと、正確には帰りたくない。」

「え、何で？」

「うーん、僕は家出してきたんだよ。」

「家出？、そりやまた、古典的な。タイムマシンを扱つてるような君達程の文明でもそんな事あるの？」

「家出に文明も何もないと思うよ。これは人間同士の問題だ。」

「まあ、そなんだけどね。」

孝は苦笑いしながら、鼻の頭を搔いている。

「過去に行くのは、時間管理法で厳しいんだ。余計な事をして歴史を改竄されでは面倒だからね。それより未来へ行くことは制限はあるけど、ある程度は緩やかだつたりするから、ここで人生をやり直そうかと。」

「ああ、そなんだ。」

「でもなあ、何かこんなつもりじやなかつたんだけど……。」

僕はあからさまに肩を落として溜息をつく。

「まあ、話を聞く限りは、君にとつてはこの時代は不便そうだね。一回戻つて考え直してみては？」

孝の言う事ももつともだと思った。

「でもわ、わつきの人つて、もしかして未来の警官？。」

「どうしてそり思つの？」

「だって、明らかに制服がこの時代の警官と違つんだもの。」

「そうだよ。多分僕を連れ戻しにきたんだろう？」

「へえ、ついたばかりなのに対応が早いねえ。」

「そりやそうだよ。僕等が載つているのはタイムマシンなんだよ。」

数日後に判明したとしても、行き先の時代が分れば、その少し前に

到着して待ち伏せするのが常識だよ。」「なるほどねえ。」

「だから、無許可でタイムマシンを使った人達は、目的地へ到着した直後が一番警戒するものなんだよ。」

「ふむふむ。」

「あ…。」

話していて、ふと自分の離している事の矛盾に気づく。

「そういえば…。」

「どうした。」

孝が心配して真っ青な顔の僕を覗き込む。

「いや、僕が到着した時に時間警官がいたんだけど。」

「そうだね。今、君が、到着直後が一番危ないって言つたじゃないか。」

「そ、そななんだけ…。あの人一人だつた。」

「…？、それが何か？」

「普通、警官がそういう人を捕まえる時は、最低でも2人一組なんだ。それに、僕が到着してからあの人人が現れるまで少し時間があつた。普通は到着直後にタイムマシンを降りてくる所を囲むんだ。」

「何かさつきから聞いてるとやたら詳しいね。」

「まあ、父さんが警官だから…。」

「あ、そう。納得。でもさ、それが不自然だとしても、君のタイムマシンが見つかった事はヤバいんじゃない？」

「それは大丈夫だよ。」

僕は懐から長細い水晶の石を取り出す。

「これが無いとあれは動かせないからね。」「これ何？」

「僕も仕組みとかは詳しくは知らないけど、タイムマシンの動力の鍵だよ。これを操縦席の窪みにはめ込まないと動かないんだ。」

「でも、あの人未来の警察なら同じもの持つてるんじゃない？」

「それは抜かりない。」「それは抜かりない。」

「？」

「普通鍵を登録したらそういう犯罪を防ぐ為に「ペー」を取つてスペアを渡さなくちゃいけないんだけど、こいつは登録前のやつだから「ペー」はこの世の中に存在しないんだよ。だから、こいつは世界で一つしかないから、これを持つているつたはあれば動かないんだ。」「へえ。綺麗な石だな。ただのペンダントかと思った。僕も同じようなの持つてるんだよ。」

孝を眼鏡のズレを直しながら、自分のペンダントを僕に手渡した。それはまさに僕とそつくりの形をした石だつたが微妙に模様が違つていた。

「どうしたんだよそれ。」

「父さんの形見つてやつた。」

「そうか。」

「もしかしたらさ、警官じゃなくて犯罪者の方かもな。」

孝は悪戯っぽく笑つてそういうたが、僕には悪い冗談にしか聞こえない。

「とりあえず、何にしても一度戻りたいなあ。」

「今日はもう遅いからやめとけよ。明日行けばいいさ。僕も学校休んで付き合つてやるよ。今日はつち来いよ。」

辺りはいつの間にか夜の様相を呈して来ている。暗い中を戻るというのは確かに心細くて危険に思える。孝の親切心に甘えるが一番いいのだろうと僕は判断した。

「…そりやどいつも。」

「まあ、その辺に座つてくれ。」

両親は既に他界して一人暮らしだという事だったから、その辺りは確かに遠慮しなくても良かつたのだが、部屋に入ると予想以上の混雑振りに少し戸惑つた。

「えーと、掃除口ボットとかは…あるわけないか。」

「掃除機ならあるよ。使い方分る?」

孝は押入れの奥からホースのついた箱のよつな機械を渡してきた。正直歴史の教科書で見た事のある機械だが、使い方はさっぱり分らない。

「いい。」の辺のものを少し隅に寄せていい?」

「いいよ。」

孝はそういうふうと、部屋の隅にあつたソファらしきものに腰を降ろした。

「しかし、凄いね。」

机の上や床には何かの実験器具の様なものが散乱していて、足の踏み場もない。

「へへへ。本当はあの秘密基地の方へ移動しようと思つてたんだよ。」

「秘密基地?」

「今日、君が到着した所だよ。今日は下見に行つてたんだ。」

「ふーん。そうだったのか。そりや、運が悪かつたな。とんでもない場面に出くわして。」

「そうでもないさ。中々好奇心を擗る材料を貰つたと思つているよ。」

「僕は部屋の中を改めて見回す。月面写真や天体観測の模型から何か造りかけの機械の基盤など散乱していて、科学博物館をぎゅっと縮めてこの部屋に押し込んだ感じの装いとなつていて。」

「好奇心ねえ。隣の部屋見ていい?」

「どうぞ。と、その前にその石をもう一度見せてくれないかなあ。」

「別にいいよ。」

「僕は、彼に石を手渡すした。」

「わつ！」

雑多な荷物に埋もれかけたドアを見つける。今度はこつちの好奇心が擗られる。僕は荷物を搔き分ける様にしてそのドアを開いた。

「どうしたの？、そつちは寝室だから荷物は少ない筈だけど……。」

孝は、僕が声を上げた事を不思議だと思ったのか、椅子から立ち

上がり僕の肩越しに部屋の中を見る。

「わっ！」とでも言ひのを期待したが、彼は部屋の中を見ても無反応だ。

「？、何もないけど、布団とかが珍しいとか？」

僕は首を横に振る。僕の時代にもベットにしつくりこない人が床に布団を敷いて寝る事くらいはあるので、部屋の風景自体は別に何とも無かつた。

しかし、僕が声を上げたのはそんな事ではない。

「何だ？」

部屋の中に不気味に佇む黒い人形の影。黒い服を全身に纏ついたが絶対に幻ではない。襟と深く被つた帽子の隙間から見える目は明らかに僕を見ている。

「おい？、どうしたんだ。」

青い顔の僕の肩に孝の手がポンと置かれて僕は我に帰る。

「見えないのか？」

「へ？」

彼が僕の目線を追うが、特に何かを見つけたというリアクションはない。どうやら本当に彼には何も見えていないのだろう。うーん、何も見えないけど、特殊なコンタクトでもつけているのかい。」

僕は生まれてこの方目はいい方で眼鏡一つかけたこともない。

「そうか、見えないのか…。」

「死神…かな？」

「死神？」

「そうさ、まあ僕は信じないけどね。最近それを見たと言つていた友達が行方不明になつたんだ。」

「おいおい…。」

僕はこの手の話は苦手だ。でも孝が見えるものを見えないと嘘を

ついている様には見えない。警察ならともかく、そんなわけの分らないものまで追いかけてくるなんて…。

その時突然、ガシャーンとガラスの割れる音がした。

「な、何だ？」

僕も孝も音のした方を振り返る。そこには、あの茶色いジャケットを来た警官が銃をこちらに向いている。

「く、どうして…。」

僕らはなす術も無く、殆ど反射的に手を上げた。

「そうだ。大人しくしてろ。」

男は僕等の態度に満足したらしく、低い声で呟くと少しづつ近づいてくる。

「まさか、こんな事で捕まるとは…。」

僕は心中で観念した。まあ家出程度なので殺されるとは思えないが、こんなに早く計画が頓挫するとは。まあ、時間の長さはこの際あまり関係ないといえばないけど…。

「死ね！」

「え？」

その男は、僕の予想だにもしなかつた行動を開始した。

銃口を孝に向けて引き金を引いたのだ。僕も孝も、あまりの予想外の出来事に全く体も頭も反応出来なかつた。孝は至近距離から肩を撃たれて、その威力で壁に背中を打ち付ける。

「ぐつ…。」

肩を押えて蹲る孝に留めをさそうと男は更に銃口を向けたまま距離を縮める。何故、警察がこんな事を?、しかし、僕に迷つている時間はない。本能が危険を知らせている。

「この!」

僕は自分の銃を抜くと、その男に向けて思い切つて引き金を引いた。幸い殺傷能力がなく、この状況では完全に正当防衛なので一応、躊躇いはなかつた。僕の銃の銃口の向こうで男がこちらを向いて僕を睨みついているのが見える。

そして、僕の放った光線が男の肩に命中したのが見えた。

「ぐあつ！」

男は顔を歪めて肩を押えたが、倒れるまでには至らなかつた。すぐさま反撃してきて僕の肩を熱い光線が貫く。こちらの武器とは余りにも能力が違すぎる威力だ。確實こいつは僕達を殺すつもりでここにいるのだ。

「何でこの時代にそんな武器があるんだ？」

男は不思議そうに僕を見下ろすと、2発目の引き金に手を掛ける。どうやら僕の方から留めをさすらしい。何とかあがこうとするが床に落ちた自分の銃を拾うには、肩の痛みが酷すぎて腕が動かない。孝は苦しそうに壁にもたれたまま、肩を押えている。万事休すといつやつだ。

「待て！」

男とは違う声が突然、男の背後から聞こえた。僕も孝も、男も一斉に声のする方を向いた。そこにいたのは、男と同じ茶色いジャケットの男。そいつも僕を撃つた男と同じタイプの銃を持っていたが、標的は僕ではなく、僕に銃口を向けている奴のようだ。

「くそつ！」

そいつは舌打ちすると振り返つて、第一の侵入者に向かつてすぐさま発砲する。第二の侵入者は身をかがめて銃弾をうまくよけた形になつた。その隙に第一の侵入者は玄関に向かつて走り出す。

「そつちへ行つたぞ！」

明らかに仲間を呼ぶ声。その声に反応する様にドアが開いて3人程の同じ背格好の男達が狭い部屋に雪崩れ込んでくる。

「畜生！」

僕はその間、手の痺れが少し取れたので、床に落ちていた石と銃を拾い上げて孝に駆け寄る。

「大丈夫か？」

「う、うん。」

顔色は悪いが肩の傷は思つたより深くはないようだ。

男はそれを見て再び部屋の中に舞い戻つてくる。しかし、窓にいた男の銃口はさつきからずつと、その第一の侵入者に向けられた。追い詰められた奴は咄嗟に倒れている僕に手を伸ばし、すぐさま首を腕で締め上げられて銃をこみかめに押し付けられる。典型的な人質というやつだ。

「全員動くな！」

「くつ！」

人質に躊躇つているところを見るところあえず本物の警官らしいが、それ故に何も出来ずに立ち尽くしている。

「どけよ！」

男はかなりの力持ちの様で、僕を抱えたまま窓から飛び降りた。一応2階だったのだが、着地すると直ぐに走り出し、近くの車に乗り込んだ。キーがついたままという事はどうやら男の所有しているものらしい。

「待て！」

警官の止めるのも聞かずに男は車のアクセルを踏んだ。

「諦める…。」

男は僕に冷たく言い放つ。光線銃のようなものを僕に向いている。殺傷能力が何処まであるのかは分らないが、少なくとも意識を失わせる位の威力は十分予想できる。下手をすれば一度と目覚めない程の…。

僕は例の小屋に連れてこられていた。目の前には、僕のタイムマシン。男の持つ懐中電灯だけが唯一の灯りだった。いきなり車から放り出された後に銃を突きつけられている最中だ。

「諦めろって言われても。あんた、時間警察じゃないな。」

ここまでのかつらを考へるとそう簡単に諦めるわけにはいかず、僕はその男を睨みつけた。ついでにその男の背後にいた死神に対して

も同じ目を向ける。

「けつ、反抗的な目をしても結果は同じだぜ。馬鹿が、寿命を数分縮めるだけの事だ。」

男の引き金に当てた指に力が入るのが分る。

「畜生！」

僕の叫びに男が反応して笑い出した。

「あははは、そうだ。叫んでもいいんだぜ。こいつ時は誰でもそういう反応をするもんさ。ははは。そうさ、俺は警官なんかじゃない。この服の方が動き易いんでね。目的は達成できなかつたが、一旦引き上げさせてもいい。」

「目的？」

「ふん、お前の友達を殺す事だよ。」

「え？」

男の口から出た意外な言葉。

「な、何で？」

「お前も未来から来たのなら知ってるだろ？、タイムマシンをあいつが発明するからさ。」

「た、孝が？、で、でも何で…。」

「何で殺すのか？だって、そう遠くない将来にそのタイムマシンの材料になる石がどんどん消費され、この星のバランスが崩れる。そして、気候が変わり、俺達人間は殆ど死んじまうんだよ。だから、そうならないようにタイムマシンを作った奴を消せば俺達は滅びない。」

「そ、そんな理屈で…。」

「始めはお前も同じ目的かと思ったが様子が違うんでな。仕方なく俺が決行しようとしたわけさ。さあ、動力の石を渡しな。」

僕は銃を向けられている恐怖を搔き消す程の悔しさが込み上げてくる。何で、自分の生まれた時代でもないのにこんな目に遭うんだ。確かに危険を犯してここに来たんだが、命を捨てるつもりなど全くない。しかし、背に腹は変えられずに涙を流しながらポケットから

動力の石を取り出した。

「そうやつて初めから素直に渡していればよかつたんだ。」

男はにやけながら僕から石を奪い取ると、それを持ってタイムマシンに素早く乗り込んだ。扉を閉める時ににやけながら光線銃の引き金を引く。

「うわっ！」

それは余りにもあつさりした行動だつた。僕自身は石を渡した事ですつかり油断していた。光線銃から伸びた一本の光は、僕の肩を掠めて地面に突き刺さる。その痛みは次の瞬間に一瞬にして僕の肩に圧し掛かった。

「ぐあ！」

肩を押えて倒れこむ僕を勝ち誇つた田で見下ろしながら、男の姿は扉の影に消えていった。そして暫くするとマシンのエンジン音が鳴り始める。

「大丈夫か！」

ようやく屋上の出入口の扉が開いて、数人が到着した。肩に包帯を巻いた孝は僕の姿を確認すると駆け寄つてくる。

「血が出てるじゃないか。」

「見れば分るよ。」

「どうなつた？」

時間警察の男は、空中に浮かんでいるタイムマシンを見ながら、状況の確認を行う。

「見たら分るでしょ。。。くそ、ここまでの苦労が。。。」

僕は目一杯悔しい気持ちを露にして言葉にした。

「逃げられたか。行き先は君の時代かね。」

「そうですよ。チューーニングが間違つてなければの話ですけど。」

「そうか。」

時間警察の男は、諦めた様に肩の力を抜いた。その瞬間に空中に浮かんでいた僕のタイムマシンが眩い光を放つたと思うと、突然空中で四散して姿を消した。

その場にいた全員が目を閉じるか腕で顔を覆う。唯一サングラスをつけていた時間警察の男だけが顔を一切動かさずに消える瞬間をじっと見ていた。

「消えたか…。」

悔しげな声だけが、僕の耳に入ってきた。

光が収まると、時間警察の男は無言のままその場を去った。数人いた部下達もその後についていく。その背中を見送った後に、孝と僕だけがその場に取り残された。

「立てるか？」

「う、うん。」

僕は孝の肩を借りて身を起こす。彼は僕に何か言いたげだったが、目をあわせただけで何も言わなかつた。

「あ！、死神は？」

僕は、そう呟くと辺りを見回す。

「まだ見えるのか？」

孝の質問に僕は首を横に振つた。

数日後の公園のベンチ。

僕の肩も孝の肩も傷は大分癒えてきて回復に向かっていた。孝と2人でベンチに座つてボーッとしている、彼は鞄から科学雑誌を取り出して広げていた。

「まだ、そんなの読んでるのか？」

僕は、彼の方を振り向きもせずに呆れ顔で問いかける。

「あいつの話だと、僕が将来タイムマシンを作るみたいだからな。勉強しておこうかと思つてな。」

「そんなもの作つたつて口クな事にならないぞ。」

「どうか？、僕は使い方次第だと思うけどな。」

「いいか、道具つてのは便利なほど悪用がきくもんなんだ。それが

凄ければ凄い程な。だからどんなに便利でも存在しない方がいいものもあるんだ。お前は勉強なんてしなくていいよ。」

「そうかな。でも、お前の乗ってきたタイムマシンとあいつの乗ってきたタイムマシンって同じなのかな。」

「同じなわけないだろ。大体…。あ…。」

「どうした?」

僕の頭の中に一つの仮説が組み立てられる。あくまで仮説だが…。

「いいかい。最初に僕がここに来た。」

「ん、突然、どうした?」

孝は雑誌から目を離して僕の方を向く。

「いいから聞け。その後で、あいつが未来からお前の作ったタイムマシンに乗ってきた。」

「そうだな。確かに君は、未来じゃなくて、過去からきたんだよな。」

「そうだ。僕のいた文明は、何がが原因で一度滅びて、人間はまた一から文明を作った。そして、君がようやくタイムマシンを作るとここまでいったんだ。」

「それが何か?」

「つまりそうだよ。君がタイムマシンを作らなければ、僕は無事に過去に戻れたんじゃないか?」

「え?」

ポカーンとする孝の膝から科学雑誌を奪い取る。

「だから君はやっぱり勉強なんかしなくていいんだよ。この世界のタイムマシンが無ければ、奴がこの時代に来る」ともなかつたんだから。」

「な、いいがかりだ!」

孝はベンチを立つて僕が取り上げた雑誌を返してもりおつと手を伸ばす。

「あははは。」

孝は突然腹を抱えて笑い出した。帰れなかつた僕に向けられた嘲笑かと思い、僕はあからさまに不機嫌な態度で彼に顔を近づけた。

「何がおかしいんだよ。」

「おっと、これ見てみるよ。」

孝は僕の持っている雑誌のページの一部を指差す。僕の目線が彼の指先に向けられた。

「ふつ！」

僕の機嫌があつという間に直つていく。なるほど、これは笑える。その雑誌のページの特集には、『謎!』、カンブリア紀の地層から三葉虫を踏んでいる人間の足跡！』とある。

「あははは！」

孝を批判しておきながら、僕はもう一段大きな声で笑つた。その写真に乗つていた足跡のすぐ横には、足跡の主が僕から盗んだ水晶の石があつたからだ。記事の内容の中では、その石にも触れてある。『自然に出来た形とは考えづらく、足跡とともにこちらも謎である』的な表現で。

「こいつ、戻つてこれたのかな。」

涙目を拭きながら孝が僕に尋ねた。

「いや、絶対無理だよ。片道分しかない燃料だからね。」

「でも、それじゃ君が乗つていたら…。」

「この足跡は僕のものになつていたかもなあ。しかし、違う時代に置き去りにされる気持ちは少し分るかもね。」

僕は自分の発言にゾッとしたながら、それでも可笑しくて仕方ない感じでにやけて返答する。

「どうする？、これも僕のおかげだろ？」「

「せいぜい勉強頑張つてくれよ…。」

僕は苦笑しながら科学雑誌を孝に返した。

「帰るのを諦めるのかい？」

「いや、また一からやり直しだけど、諦めないよ。」

「また死神が現れたらどうするんだい。」

「そういえば、あの日から死神を一度も見ていない。あれは、僕じやなくて、僕のタイムマシンを盗んだ奴に取付いていたのだろうか。」

死神がいるところには必ず奴がいたような気がする。

「その時は、諦めるぞ。」

「そう悲観するなよ。」

孝はそう言って笑いを堪えた表情をすると、懐から見慣れた石を取り出した。

「え？」

「へへへ。」

「じゃ、まさか…。」

「タイムマシンは僕一人じゃ荷が重過ぎるからな。手伝つてもらわないと…。」

「わはははは！」

僕は笑いながら空を見上げて背伸びをする。雲ひとつない空が、広がっていて、この空だけはいつの時代も同じなんだなあと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182w/>

死神の杖

2011年11月7日03時28分発行